

914.6-Y851ウ



1200600736876



始



人のびあし

与謝野晶子

人のびあし

与謝野晶子

914.6

Y851ウ



I種

W



1200600736876



自序

日本の公衆と官憲と特に婦人達とに望みます。どうぞ私に之が私の眞實であると思ふ所を語らせて下さい。時は明治から大正へ遷つて居る。日本の女もまた男のやうにあらゆる虚偽と妥協とから脱して、眞實に思想し、眞實に發言し、眞實に行爲することを許さるべき時機に達して居ると信じます。

私はここに最近の感想を集めて「人及び女として」と題しました。この標語は私の此書が何を語つて居るかの説明であるばかりで無く、私自身が現に意識しつつ營んで居る實生活の態度の率直な表現であるのです。

曾て希臘の大哲が四徳の一つに數へた「節制」を私は永久に人間生活に必要な一條件だと考へて居ります。私の思想にも實行にも私の生の自尊から出發した反省と慎重とが相應にあります。私は良人及び十人の子の伴侶として、また日本民族の一人とし、

世界人類の一人として、出来るだけ實際的の立場から物事の観察と判断とを輕輕しくしないやうに心掛けて居ります。

私は眞の自由を求めて、虚偽の自由である所の放縱無規律を排斥します。例へば因習の束縛から脱した聰明な女は在來の女と違つて自律的合理的に一層よく其貞操を徹底すべきものだと思ひます。私はまた個人の獨立を求めて、利己的頽廢的な孤立に反對します。例へば人類は協同を欲求するものである以上、反抗よりも調和、分裂よりも團結に就くべき最良の手段を取るべきだと思ひます。

私の此書を読まうとせられる人達に先づ誤つた豫斷を以て對して頂かない爲めに、私は此書に一貫した私の主張を次に簡單に述べて置きます。

なぜに女が此様に眞實に思想し、眞實に發言し、眞實に行爲したいと要求するに到つたのでせうか。人類は男女相半して成り立つて居ります。一たび生の權利の平等が人間に自覺された以上、曾て女子供と呼ばれて一段低い無力なものに取扱はれて居た

女が男と對等の生活を要求するに到るのは、近代文明の正當な經過、合理的經過であると思ひます。文藝復興期以後の世界に起つた新しい文明は悉く男子の解放の爲めに偏して居たのですが、今は其れが人類の一半である女子の解放の爲めにまで開展して來ました。

人は生きて行くべき力を内に藏めて居て、其力は無限に發展すべき本能であるのですが、其れは男女に由つて優劣の差等があるので無く、其れを發揚させることを一方には許し、一方には抑へてあつた爲めに、現在のやうな一段低い無力な状態に女が停滞してしまつたのだと思ひます。其れで私の何よりも要求する所は教育の自由です。女の感情を健全にし、女の行爲を正しく調節する最良の法は女の知識を高く且つ博くするより外にありません。現代の女に必要な新しい道徳と言ふものも、知識的に女が自覺すれば必ず女自身に其れを要求し且つ實踐するに到るものであると思ひます。私は其れと同時に勞働の自由を要求します。他人の勞力を偷んで無爲遊惰に生きよ

うとすることは賢明な人間の欲する所ではありません。男に取つて眞理であることは女にも眞理です。女が労働に由つて経済的に自活することは常に女自身の獨立を保證することの一つであるのみならず、男との協同生活を堅實にすることの重大な要求だと考へます。

私は女もまた人類の協同生活を營む一組成分であることを自覺する以上、小は健全な子孫を作り、大は生氣ある自由民の協同生活を作るために必要な教育其他の公共問題に就て、人及び女としての立場から發言し、且つ自分相應の力を實行的に用ひることの自由を要求します。

私が此書に於て述べた題目は多様ですけれども、其精神は以上の要求を最も確實に貫徹しようとする外はありません。私は靜的に偏した保守主義をも、動的に偏した妄進主義をも併せて時代から遊離した空想として排斥する一人です。

一千九百十六年五月

與謝野晶子

目次

幸福な現在の女	三
女子と讀書	七
時勢と青年婦人	二二
私達婦人の要求	二七
日本人の體質と精力	二〇
日本人の食物	二五
故瀨沼夏葉女史	二六
地方人の生活	三三
東京に憧れる若き婦人達に	三六
貞操に就て	四〇
處女と性慾	四二
婦人と政治運動	四四
夏が來た	五〇
創新の生活	五二
欲求のまま	五四

婦人記者の社交俱樂部……………五
 製作の前後……………五
 誠と眞實……………五
 入澤常子氏……………六
 雜草……………六
 模倣と虚榮の意義……………六
 婦人界の一現象……………六
 小學生の掃除問題と體罰問題……………六
 婦人を侮辱する矯風運動……………七
 あれや、これや……………七
 青年の自殺……………七
 學制改革案……………八
 祭の日……………九
 姑と嫁に就て……………九
 颯風……………一〇
 文部大臣高田早苗氏……………一〇
 小學教育の改造……………一〇
 ………………一六

小學に於ける課業の淘汰……………一六
 女教師の未能力……………一七
 姑と嫁に就て(再び)……………一七
 紫式部の事ども……………一八
 紫式部と其時代……………一八
 貞操は道德以上に尊貴である……………一八
 愛の生活……………一七
 急進婦人の近狀……………一八
 婦人の告白……………一八
 輕躁な婦人……………一八
 婦人と裁判沙汰……………一八
 非常識な矯風運動……………一七
 平安朝の戀……………一九
 一九一五年の回顧……………二〇
 妻の意義……………二四
 男……………二六
 現代人らしく……………二九

夏	三三
婦人改造と高等教育	三四
髪	三五
母性偏重を排す	三六
先進婦人の饒舌	三七
川上愛子さんの遺書を読み	三八
婦人の飛躍	三九
既成宗教より脱せよ	四〇
間違つた婦人の趣味	四一
婦人自ら反省せよ	四二
私の現状	四三
小賣商の暴利	四四
感想の断片	四五
日本婦人の頽廢的體質	四六
安價生活よりも高價生活	四七
小學教育の本末關係	四八

人及び女として

與謝野晶子

幸福な現在の女

私は平生いろ／＼の不満もあるが、また一面には現代の女と生れたことを非常な幸福だと喜んで、神秘的な大實在の中に感謝して居る。

以前の親達は女に教育らしい教育を施す必要はないと思つて居た。其れに反して今の親達は出来るだけ我娘を教育したいと思つて居る。若し教育せずに置けば娘の肩身が狭からう、其將來の生活が不幸であらうと心配して居る。以前は書物を讀みたがる娘があつても親達は大抵其れを女の世渡りに用のないことだとして拒んだのに、今では親から進んでどの女學校へ入れやうかと氣を揉んで居る。若し我娘が學藝が好きで、高等教育を受けたいと望めば、親達は手内職をして居る程の身分でも、どうにか資力の續く限り娘の志を遂げさせて遣りたいと思ふのが今の慈悲な親心である。

其れに女を教育する諸種の學校が官公立のも私立のも多數に出來て女を歓迎して居

る。希望者さへあれば女子を入學せしめる官の大學までがある。

また歐洲の家庭と異つて、日本の家庭では女子の讀物に殆ど制限がない。たとへ家庭では多少の制限があつても、家庭の外で——友人間や圖書館やて——如何なる高遠な種類の書物、如何なる廣い範圍の書物でも讀み得る自由を日本の女は得て居る。歐洲では娘の讀む新聞雜誌にまで兩親が厳しく干渉するけれど、日本の近頃の家庭はそんな壓迫を子女に加へる様子が無い。女學校ではまだ偏狹な量見を以て讀物に干渉する弊があるけれど、其壓迫は學校外の世界まで及ばない。教育といふことは學校教育に限られたので無いから、たとへ女學校に入學しない女でも、日本では讀むことに由つて自由に女自ら教育することが出来るやうになつて居る。

また歐洲の娘は普通の劇場や音樂會へ出入することが絶対に出来ない。特に娘のためには開かれる或種の芝居や音樂會だけに出入を許されるが、其れも必ず兩親其他の監督者と一緒に行くのである。然るに日本の一般の娘は一人で、或は友人と一緒に、若しくは女中を供につれる位のこととて、大人の觀る劇場へ出入が出来る。活動寫眞、寄席、俄芝居のやうな興行物までも自由に見聞することを許されて居る。

日本の今の娘は何たる思想上の自由を與へられて居ることであらう。何れの方面から見ても日本の娘は既に從來の社會的習慣から解放せられて居る。こんな状態を歐洲の娘達に聞かせたら嘘だと云つて信じまい、若し嘘でないとなつたらどんなにか我々の境遇を羨むであらう。日本の女には周圍と戦はうとする歐米流の婦人解放論は殆ど無用である。

日本の女は今や斯う云ふ自由な時代に遭遇して居ることを知らねばならない、併せて此の自由を出来るだけ確實に有益に活用しなければならぬ。其れに、なぜ我々は怠けて居るのであらう。なぜ男の讀むだけの書物を讀まないのであらう。なぜ男と匹敵するだけの知識と感情とを修めようとしないのであらう。なぜ男と並んで女も爲し得る研究を勵まないのであらう。なぜ女の價值を高め得るだけ高めないのであらう。

なぜより秀れた、より完全な女となることに努力しないのであらう。

歐洲には今も猶娘を鐵の檻に入れた様な保守的な家庭がある。其れに對して激烈な反抗的の運動が女子の間に起るのは當然である。併し日本では比較的そんな頑固な保守思想の家庭がない。我國の両親は大抵教育萬能主義者である。其缺點は、深くして明かな省察を経たのでなく、唯だ漫然と女子教育の必要を感じて、「世間の風潮がさうであるから、教育さへ施して置けばどうか娘の爲めになるであらう」と云ふ位の考が土臺になつて居るのにあるが、何にせよ、親達も、社會も、或程度までは政府も、共に女子教育の熱心な獎勵者である以上、我々は周圍に向つて反抗的態度を取る必要を殆ど認めない。之を幸ひに、我々は自己の改造に熱中し、從來の「女とは弱い者、従ふ者、無智な者、踏み附けられる者、裝飾品、玩弄品、厄介者」と云ふ慘めな位置から跳り出すのが太切である。

我々は自己の内に深く根ざして居る廉價な涙や。物質的虚飾的に停滯する欲望や、

半可な諦めや、卑屈な依頼心や、其等の醜惡な舊習と戦はねばならない。眞に新しい力強い女性の生活は其れから始まるであらう。(一九一四年六月)

女子と讀書

女の讀書欲が一般に熾んになつて來たのは喜ばしい現象である。困ることには、日本の日常生活には歐洲の生活に見るやうな整然とした規律が無いので、煩瑣な雜用や、形式的な交際や、時を重んぜぬ來客やの爲に、だらしなく太切な時間を費す悪習があつて、男も女も靜に思索したり、讀書したり、他の述作を鑑賞したりする時間に乏しい。斯う云ふ點にも我々は在來の習慣を破つて、出来るだけ時間を有益に用ひねばならない。

殊に女には、何の實感もない事を唯だ華やかな言葉や、くどくどと永たらしい言葉で交換して、無用な饒舌と安價な笑として時を空費することを好む癖がある。自己の生

を奥深く且つ豊富にしようとする以上、我々は自重して、そんな凡俗な女の群から高く超越せねばならぬ。清少納言は世の女の中の第一の女になりたいと言つた。凡俗な多数の女の生活に身を置くことは雑草と共に朽ちて行くことである。我々は果して花の咲かない種であらうか。女が遠慮して卑屈な一生を送る時代は昔になつた。躊躇は要らぬ。我々は出来るだけ欲望を大きくし、熱烈にし、充實させた生活をせねばならない。

讀書欲はあつても、讀む書物の選擇を誤れば勞多くして却て功が少く、或は害毒さへも受けるものである。其れに就て自分は近頃世間に多く行はれる婦人向の書物と云ふ物を太抵讀むに足らぬ物だと思つて居る。其中には特に婦人の生理とか病理とかに關して讀まねばならぬ書物もあるが、太抵は現代の多数な女の知識を目安めやすにして書いた低級な書物計りである。低級な出版物と云ふ物は常識を養ふ資料になるから、讀んで全く益を受けないこともないが、我々は常識計りに安んじて居られる人間でない以

上、それらの書物に貴重な精力と乏しい時間とを費して居られない。

また低級な出版物には、低級な讀者の思想や趣味に媚びて書かれた物が多いから、讀んで解り易いだけ其れから受ける感化も深く、さう云ふ種類の書物から受けた思想や趣味が先入主になつて居ると、宗教的の迷信と同じやうに中々新しい高尚な思想や趣味に移り難いものである。例へば何處の國にも低級な市民や女學生や兵士などを顧客にして廉やすつばい涙を流させる通俗小説と云ふやうな物があつて、新聞小説となつたり、各國の停車場などで賣る單行本となつたりして居る。其等の讀者は多數を占めて居て書肆のためには都合のよいことであるが、現代に最も進歩し且つ優れた思想の書物は永久其等の多数の讀者に理解される機會が無いのである。

低級な書物の讀者に甘んじて居るのは、讀書の自由を許された現代の幸福を棄てることである。自ら求めて貧弱な思想の生に停滞することである。我々は最早そんなに欲望の淺い、そんなに愚かしい女ではない。其れて自分は特に女のために書かれたと

云ふ出版物の大部分を蔑視する。實際これまで自分が益を受けて来た書物は、其等の婦人向と云はれる書物の中には無くて、すべて男の讀む物になつて居る書物の中にあるのである。男の讀み得られる書物を女の讀み得られないことはない。人間に有用な書物である以上、男と一緒に女も讀むのが當然である。但し高尚な書物になる程低級な書物程には解り易くないが、解りにくい書物を努力して理解し得た時の歡喜は、同じ低級な書物計りを讀んで居る歡喜と比較にはならない。

高尚な書物は種々の暗示を與へて自分の心の眼を開いて呉れる。丁度望遠鏡や檢微鏡が世人の氣附かずに居る世界を見せて呉れるやうに、哲人とか天才とかの著作は我の心の眼に必要な其等の眼鏡である。低級な書物を讀んで居ては素通しの眼鏡を掛けるのと同じく、肉眼で見ると太差がないので、何の新しく且つ微妙な發見もないが、我々は自分の現在の力量に餘る高遠な書物を讀んで、初めて自己をより高く、より深く、より新しく、より楽しい生活に置くことが出来るのである。

婦人向などと云ふ出版物が世にあるのは、子供向と云ふ出版物があるやうに、一人前の知識の無い者として女自ら卑下して居るために世間から受けて居る最大侮辱である。我々は常に男の讀む物を讀まうと専ら心掛けねばならぬ。思想に貴族と平民の區別の無くなつた今日、更に男女の區別をも無くすべきである。

多數の女が男と同じ思想の水準に立つことが出来たら、どんなに人間の生活が幸福を増すであらう。女の一大弱點は愚癡であつた。之がために久しい間男を苦しめ、女自らも不幸な境遇に墮ちて居たのに、思想の飛躍に由つて愚癡を除いた聰明な女が殖えて行けば男女間の悲劇が無くなる計りか、初めて男と女とが調子を齊しくした生活、互に理解し合つた對等な生活が營まれる譯である。之は他に勸める迄もない、先づ自ら努力しなければならぬ。(一九一四年八月)

時勢と青年婦人

時勢の進歩に遅れてはならぬと云ふ言葉をよく口にするのは父兄である。そしてよく時勢の進歩に遅れるのも父兄である。

青年はそんな言葉を父兄程口にしないけれど、常によく時勢を直感して進歩の波に乗る。時勢を作るとも、時勢から置き去りにされる青年は殆ど無い。

父兄も其若かつた日には皆鋭い直感を持つて居て、時勢の波と共に動いて行く氣分が全人格を支配して居たに違ひない。其れてこそ明治の初年から大正へ掛けての新しい日本が開けたのである。

青年期を過ぎた父兄は大抵硬くなり鈍くなつて、同じ處に立ち止らうとする傾が生じる。守成には適するけれど創造には適しなくなる。守成とは現状維持の心であり、も一つ時勢が移れば過去に執着する心である。

時勢の進歩に遅れてはならぬと口にする父兄が却て時勢を感じる事が出来ず、寧ろ時勢と逆行する事實を示すのは傷ましい。

青年は誰も心の中で呟く、「父兄は古臭い」と。時勢は日々に新しく、青年の心も肉も日々に新しいからである。

父兄の青年期に於る時勢の進歩を象徴して云へば汽車であつた。併し進歩して止まない廿世紀の時勢の急轉は、之を汽車には譬へられない、この象徴は自動車である、飛行機である。

汽車を新しいとした時代にも危険はあつた。其新時代の生活の冒險に参加した青年が、今は父兄となつて更に來つた青年が飛行機を新しいとする時勢の冒險に勇ましく出發するのを一概に危険がるのは可笑しい。

今の父兄の青年期にも、さう云ふ時勢遅れの父兄が多く居て若い者の飛躍を阻つたであらう。古い人間はいつの世にも有つて時勢の進歩を邪魔しようとする。

社會の一切の争ひは保守主義と進歩主義、低徊主義と活動主義、心の硬く鈍くなつた者と心の若やかに敏い者とのくひちがひからである。

飛行機の發動機が爆發し推進機が旋動する様な新しい力を求めて居る青年の氣分を察しないで、何時までも陸蒸汽なかにじょうきを珍しがつたり、又甚しきは雲助かづの昇あがぐ駕籠に乗つて贅澤がつたりして居た時代の人間の氣分て今の時勢を律しよう、教へよう、戒めようとするのは見當ちがひである。

明治の初年に今の父兄が青年て居て、新しい時勢を見越して採用した自由平等の思想や博物含密の學術は當時の謂ゆる天保人の頑固黨が迫害を加へたに關らず、文明開化の時勢の波に乗つた青年の努力で、十年後には憲法政治を生み、あらゆる今日の學問科學の盛期をも開いたてはないか。

時勢は斷えず前へ前へと轉開する。天保人を置去りにした時勢は、また今の老人中老人を置去りにするに違ひない。もう現に大分置去りにして居る。日清戦争前の國粹

論者は何處へ行つたか。日露戦争後に自然主義の文學を咀つた人はロマンの藝術さへ輸入せられる今日になぜ屏息して居るのか。三四年前の尊徳宗の鼓吹はどうなつたのか。女子大學、女子商業學校、女子職業學校、女子師範學校の卒業生は勿論、其れ以下の學校教育を受けた女までが、續々と家庭の外で職に就いて居るのに、なぜ家庭萬能主義の論者は之を沮止することが出来ないのか。

時勢は新しく進む力である。よしや一時は其れに逆らふ保守の力が勝つやうに見えても、過ぎた跡を顧みれば常に進歩の力が打勝つて居る。

自分は近頃目を覺し出した女子の運動をも時勢の進歩の順當な經過だと考へて居る。今の青年の中で、男の爲には日露戦争後二三年が第一の維新であつて、今は第二の維新が來やうとして居る。女は少し遅れて第一の維新が今日來たのである。

男子が時勢の新しい力を思ひ思ひに個性の樂器に掛けて奏かなてようとする時、同じ氣分を臆おそげながらも直感した若い女が黙つて居られやうか。久しく冬眠して居た女性の

美くしい鳥が廿世紀の陽氣に蘇生して若い男子に聲を合さうとするのは當然のこと
で、其れに驚くのは發明に遅れた國民が飛行機に驚くやうなものである。

日本の現状は甚しく混亂して居て、宗門の法王と稱せられる人が妾を蓄へ、臺閣の
卿相が不正の富を抱いて失落の難を免れて居る世であるから、新しい女と云はれる中
に一部少數の奇矯變態の女がまじつて居るのも已むを得ない。

若し今の教育者や父兄が、一部の變態を見て新しい女の總てがさうであると考へる
なら、一般の新しい女の爲に氣の毒である。一部の奇矯な女達は偶々文筆の便を有つ
て居るので其れが目立つ。併し家庭、學校、官衙、病院、會社、商店の内に黙々とし
て働きながら、時勢の新しい氣分と方向とを早く感知して、此時勢に乗つて疾驅すべ
く自己を教育して居る多數の女のあることを知らねばならぬ。彼等は從來のやうな唯
だ柔弱な女でない。女性としては飽迄も謹厚であるが、その謹厚には敢爲の勇氣が伴
つて居る。(一九一四年五月)

私達婦人の要求

表面だけを觀察すると日本の婦人界は一般に呑氣なやうで、却て裏面の實狀は非常
な動搖時代に入つて居ります。因習から解放されて自然に生きようとする近代人の氣
分は男子の側ばかりで無く若い女の側にも及んで居ります。女子教育の程度が低いた
めに近代文明の意義を十分に理解するには到りませんが、兎に角今日の若い女は
何れも現狀に不満を抱いて虚偽から眞實へ、壓制から自由へ、無智から聰明へ踏み出
したいと云ふ氣分を多少とも自覺して居ります。

教育者や親達が若い女の此氣分を透察し併せて多大の同情を以て臨まれないと、此
動搖時代が順常な経過を取らないで意外な變調を生ずる危険があります。即ち世に謂
ふ「新しい女」のやうな新生活の犠牲者を多數に輩出させるやうなことになるてせう。

今日の教育者や親達は近代の世界を支配して居る自由思想と科學思想を何れも間接

（不確定）
（決定）

に賛成して居る人達ではありませんか。自由思想に由つて四民平等の意義を肯定する人達なら、久しく劣弱無智な位地に停滞して居た女が男子と對等の位置にまで向上しようとする要求に異存は無からうと思ふのですが、どうでせう。科學思想に由つて「眞實」の絶対尊嚴を知り、引いて虚偽の分子の多い在來の宗教、政治、學問等に盲従しない人達なら、若い女が因習の壓迫から脱して、最も眞實な、最も緊要な、最も堅固な、最も聰明な生活を開かうとする要求に、進んで助勢を與へられるとも、決して反對せられる理由は無からうと思ふのですが、どうでせう。

人類の一半は女です。一半の男子ばかりが文明人となつても、他の一半の女が劣弱無智で居ては文明が全人類に均霑されたと云はれないのは勿論でせう。何時までも女を第二位の人間に停滞させて置いて男子自身が不安を感じないやうでは男子の文明もまだ不徹底だと云はねばなりません。婦人を因習思想から解放することは同時に男子を因習思想から解放することなのだと思ひます。

（いとしくうるほふ）
（若くは人同様の利益を得よう）

若い女の氣分は日一日と動搖を増して行きます。何事に對しても盲従することが出来ず、片端から疑惑を抱いて其れを解決する独自の力の足らないのに焦燥して居ります。さうして第一に教育の自由に憧れて居ります。即ち若い男子の知つて居る世界と同じ世界を知りたいと思ふ欲求は、意識無意識の別はあつても、今の若い女に共通した氣分となつて醗酵して居ります。

かう云ふ氣分を持つて居る若い女に、押付けがましい結婚や柔順一方の道德やを以て迫つても快く其れを受容させることは困かしいに違ひありません。やつと目が覺めかけたばかりの若い女の要求が總て眞理であるとは定め兼ねますが、其要求の基礎となつて居るものは教育者や親達の同感せられる現代的氣分であることを透察して頂けば、其處に若い女をして順當な経過を取らしめる路が開けて來るだらうと考へます。

日本の婦人解放運動は歐米の女權運動のやうな狂激な現象を示さないうて温健な發展を遂げたいものだと思ひます。其れには聰明な男子側から進んで先づ教育の自由を許

されることが急務です。高度の教育を授けもせず置いて、少し計り學問した若い女の言動を目安に女子の高等教育を是非するやうなことが無いのを祈ります。私達は一躍して男と對等の地位に就かうと云ふやうな無法な要求を持つて居るのではありませぬ。先づ教育に由つて、次に實際生活に由つて十分の實力を養ふことを望んで居るのです。(一九一六年一月)

日本人の體質と精力

汽車、電車、乗合馬車、さう云ふ物に乗ると日本人は男も女もよく居睡をする。日の永い季節の午後なら疲勞すると云ふこともあるが、日の短い頃、おまけに朝から其等の車中で眠つて居る人の少くないのは、歐洲人が終日其等の車中で大抵何かの書物や雑誌を讀んで倦む色の無いのに比べて非常な相違である。

一體に日本人はよく晝日中ひるひなかに居睡る。學生が教場で居睡る。大臣と代議士とが議會

で居睡る。聴衆が説教、演説の席で居睡る。日本人の多數が常に疲勞して居る。常に神經衰弱に罹つて居る。

日本人は何事に對しても強烈な欲望が少い、またそれを遂行する根氣に乏しい。全體にねばり強い所が少い。物質生活に對しても、精神生活に對しても同様である。

果して日本人は歐洲人に比べてその生きようとする意欲が本質的に弱いのであらうか。私はどうもさうは考へたくない。

それは偶然な理由で日本人の生の意欲が停滞して居るのである。その重なる理由の一つには食物の劣等なことを挙げねばならぬ。それが爲に日本人は支那人朝鮮人よりも體質を粗悪ならしめて居る。

粗悪な體質から強烈な精力の醜酵する筈がない。日本人の生の意欲は肉體の營養不良と精神の教養不足とから衰弱して居る。日本人に歐洲人程の鑑賞力も、消化力も、創造力も、忍耐力も備つて居ないのは怪むに足らぬ。日本人の魂は常に肉體と共にだ

らしく居睡をせねば居られないのである。

汽車、電車、乗合馬車だけの刺戟にすら永く堪へられないで居睡をする程に感覺の弱つて居る日本人は、その汽車や電車を發明する理知と根氣とを備へて居ないのは勿論、可なり久しく汽車や電車に乗り慣れて居ながら、その汽車や電車の構造が何うして出来て居るかと云ふ科學上の研究心すら持つて居ないのである。何事も一知半解で済して置いて平氣で居ることが出来る。舊物に就ても新物に就ても大した執着があるのではなく、深い理解があるのでない。生の意力を飽迄も増進して、より新しく、より強く、より廣く、より濃かに、より整然と、より幸福に生きようとするのが歐米人の生活様式であるけれど、日本人の生活様式は微温な生活欲を續けて、どうてもいいから生きてだけ行かれば満足であると云ふ風である。そして唯だどうにかお茶を濁して生きて行かれる爲に、間にさへ合へばよいと云ふ考で舊い物でも新しい物でも没批判的に採用し、また深い省察もせず、等に附して仕舞ふのが日本人の常習である。

ほんとうの生きかたを要求しない日本人、ほんとうの研究家にも、思索家にも、作家にも、鑑賞家にも成り得ずに居る日本人、要するにほんとうに生きて居ない日本人とも云ひ得るであらう。

神經衰弱に罹つて居る日本人は、何か思ひ立つと根氣仕事を避けて一氣に仕上げようとする。世の中に一氣に仕上げられる物は無いから、已むを得ず先進國が多くの歳月と莫大の勞力を費して仕上げた文明事業を模倣するやうな狡猾こつぱいことを考へる。併し模倣は何事でも外形だけに止まるものである。日本に憲法があつて憲法の精神が日本人に理解されて居ないのは、明治大正の文明が太抵模倣の文明であつて、日本人自身の要求から生れた文明でないからである。

日本人は自分達の生活意志の微温なことを辯護して自ら欺く爲に、風流、茶氣、禪味、粹、武士道、質素、妥協と云ふやうな消極的生活法を案出し、その局限した生活法の中で寂しい諦めと、微かな満足とを求めようとして居る。若しその消極的生活法

を踰える舉動があれば、野暮だとか、俗だとか、或は個人主義だとか、或はハイカラだとか、或は危険思想だとか云つて排斥するのである。

日本人の生活を改造するにどの方面から手を着けたらよいか、餘りに亂雜を極めて居るので冷靜に大觀しては却て手も足も出ない氣がする。それで秩序の立つた改造の考案に時を費して居るよりか、現狀に不満を抱いて居る人は誰も先づ手近な所、自分の力の及ぶ所から改造して掛かる外に方法は無いであらう。

一番手近なのは自分自身である。自己の内に惰眠を貪つて居る生活欲を刺戟して目を覺させ、微温より熱烈に、弱小より強大に、膚淺より深刻に生きようとするもの、潑刺たる動的のものとせねばならぬ。

それに就て私のしみじみと感じることは私自身の體質の虚弱なことである。私は持病と云ふ物を知らず、日本の婦人の中にあつて比較的健かな體質を持つて居るのであ

りながら、常に肉體の抵抗性と強韌性と燃焦性との脆さ、はかなさを知覺して、自己の生活の肯定を鈍らせ、自負心を殺ぐことが多い。

氣は附いて居ながら、またその欲望はありながら、體力が其れに伴はぬと云ふ恨み、これが常に私を苦める。そして此事は日本の男女一般の缺陷ではないでせうか。

(一九二五年四月)

日本人の食物

歐米の人形に比べて日本の人形は非常に壊れ易い。私は其れがよく日本人の全生活を象徴して居ると思ふ。日本人の生活を剛健なものに改めるには、内面生活を豊富にして精神上的の美食を奨励する計りてなく、同時に體質を良くする爲めに口から取る食物の改善をも計ることが大切である。粗食に甘んじる顔回流の生活は最早現代の生活ではない。

地上僻陬の一邊に簡素な生活をして夢のやうな一生を送ることの出來た時代なら鬼

も角、交通機關が東西を接近させ、學問、藝術、經濟が世界の人心を一融させようとして居る今日に、先進の文明人と逆行した生活法を取つて競争場裡に生存の權利を得ようとするのは思はざるも甚しい。

私は日本人の食物が菜食主義を原則とすることを改めない限り、日本人の體質は永久に歐米人に劣らねばならず、従つて日本人の知識、感情、意志もまた永久に歐米人の下風に立たねばならないであらうと思ふ。

日本の食物は量の割に質が乏しく、滋味に於て歐風の食物に甚しく劣つて居る。

御馳走の場合でも大抵は目に見る食物であつて、身に附く食物としては貧弱である。

私は日本人の食物を歐風に改めようと云ふのではないが、食物の質を豊富にする點に於て、歐風と均衡を得る程度にまで改めたいと思つて居る。併し食物を改めると云ふことは習慣の上から計りてなく、經濟の上から見て困難なことである。矢張「日本人は貧乏であるから」と云ふ理由に歸着して實行に差支へる。

それなら日本人の體質を此儘で放任して置いてよいか。日本人の生活の基礎となる體質を、それが益々悪くなるともしくはなり相にない状態に置いて平氣で居られるか。何人も眞剣に日本人の將來を考へて見ると、重要な問題の一として體質の營養不良と云ふ一大事實に會せずには居られない。そして何人も歐洲人に匹敵するだけの體質と腦力とを持つて居ると自負し得ない以上、日本人の體質に不満足を感じない人はない譯である。

日本人の食物を遽かに改善することは經濟の點から困難であるが、各自に體質の不良を自覺して必要なだけの營養を取らねばならぬと心掛けることが、日本人の生活を食物の方面から改める第一歩であると思ふ。其心掛が普及すれば漸次に日本料理は観るための物でなくて、生きるための物に改まつて行くであらう。衣食住は共に大切であるけれど、日本人が貧乏である以上、衣と住とは多少の不自由を忍んでもいいから、その衣と住とに使用する財力を食に集中して體質の挽回を計らねばならぬと云

ふことに各人の實行が向うであらう。

私は家庭に於ける料理にも、女學校で教へる割烹にも、其等の心掛が全く缺けて居るのを遺憾に思ふ。日本人は手數と費用とを使つて無駄の多い食事をして居るのである。(一九一五年四月)

故瀨沼夏葉女史

三月の末に瀨沼夏葉さんが産後の病氣で突然に歿せられた。折悪しく世間が衆議院議員の選舉に喧騒して居たので、新聞紙初め日本人一般に此若い女流文學者の死を痛惜することが簡略であつた。

私は夏葉さんにお目に掛つたこともなく、手紙の上で御交際を願つたこともなかつた。そのお筆になつたものはまだ女史が尾崎紅葉さんの門で教を受けて居られた頃の物から私は讀んで居たのであるが、お目に掛らなかつたのは私ばかりでなく、文界の

多數の人は女史の顔を寫眞以外で知る機會が無かつた。それは女史の性情が家庭以外の汎交を好まれなかつた爲であるらしく、また女史の性情が新聞雜誌の上で輕薄に利用せられたり、目立つて評判せられたりすることを嫌はれた爲でもあるらしい。それで女史の逸話とか性行の一端とか云ふ事も殆ど世の噂に上らなかつた。女史の寫眞すら新聞雜誌に現れることは甚だ稀であつた。

女史が露語に通じて居られて、直接に露西亞文學を翻譯せられたことは殆ど二十年前からの事業であり、昇曙夢さんよりもずっと以前に着手せられたのであつた。直接に露西亞文學を讀んで紹介の勞を取る人は今日と雖も昇さん以外に頭角を現した人を見ない位であるのに、女史は早くから一人てアンナ・カレニナに手を着けたりせられた熱心と勇氣とは、その翻譯の作品と共に文藝史上の記念である。

女史の文章は、初めの程こそ硯友社風の技巧に累せられた點を見受けたが、後には「清婉」とも云ふべき圓熟境に達して居られた。そして女史の寫眞と文章を透して私の

見た女史は矢張「清婉」の二字で表象することが出来ると思ふ。女史は一葉女史のやうに表面に才氣走つた婦人てなかつたと共に、一葉女史の文章に見える様な術氣と厭味とを持つて居なかつた。併し女史の思想感情がどれだけ深味を備へて居たかは女史自身を告白せられた作物が乏しかつたので知ることが出来ない。私は若し女史の日記や隨筆類の遺稿があるなら夫君の瀬沼氏に其れを發表して頂きたいと思ふ。

また是れは私が寫眞ばかりで見て居た上の判断であるが、明治大正の今日までの女流文學者中で第一の美貌を備へて居た人は夏葉女史であると思つて居る。

近年女史は露西亞へ旅行せられたことがあつた。私はその旅行に由つて經驗せられた所の物が女史の創作となつて現れる機會があるであらうと期待して居た。年配、經驗、思想、文才、凡て圓熟の境に入りつつあつた女史が、突然世外の人となられたことは痛恨の至りである。(一九一五年四月)

地方人の生活

私は此三月の總選舉に良人が郷里から候補者として立つた時、京都府下の有權者を訪ねたので、久振に山國やまくにの農家の生活に觸れることが出来た。選舉のための戸別訪問と云ふことの愚劣なことを知つたと共に、私は其等の農家の生活の大部分が依然過去の儘であるのを目撃して悟る所があつた。其等の農家では男も女も殆ど同じ勞働に服して居る。晝は田畑を打ち返し、山へ行つて木を伐る。夜は土竈どがまの前に腰を下して楯火を焚きながら暖を取つて、氣力のない低聲で語り合ひ、疲れると汚れた木綿蒲團の中へ潜もぐつてしまふ。彼等は有權者たる程財産を持つて居ながら、殆ど新聞雜誌と云ふやうな物を手にしない。新聞を取つて居るのは一村で村役場と小學校と床屋と以外に幾軒もない有様である。彼等の生活は重複であつて、少しの創意も、刷新も、進歩もない。彼等は父祖と同じ事を繰返して同じやうに死んで行くことが希望であるらしく

思はれる。

私は其等の家で中學卒業生と女學校卒業生とに出會ふことが困難であつた。私は五百戸ばかり訪ねた中で殆ど一人の其れらしい男女も見受けなかつた。新聞すら讀まないものであるから書架と云ふやうな物に接することの出來ないのは言ふまでもない。

私は其等の家の不潔な中で、無智から出る素朴な言語や安價な涙を多く見た。また疑深い目附をも多く見た。

彼等に熱烈な生の要求があらうとは決して想はれぬ。私は斯う云ふ遲鈍な農民が多数を占めて居る日本で代議政治を初めたのは甚しい時代錯誤であると、しみじみ感じた。彼等に電燈の要求はない、脂松やにまつでも點ともして居れば十分なのである。衆議院議員どころか村會議員の選舉さへも中心から必要を感じて居ないのに、彼等に向つて叩頭して歩く代議士候補者及び其推薦者の戸別訪問程愚劣なものはない。私は一週間程其愚劣な行爲を續けたことに就いて多大の恥辱を感ぜずには居られない。

併し此恥辱は私一個人の恥辱でなくて日本人全體の恥辱である。政府は勿論、地方の財力上の優越階級である大地主や府縣會議員、郡會議員達が今猶「依らしむべし、知らしむべからず」流の專制思想を以て彼等に臨み、少しも彼等農民の大人おとなを教育しようとは力めないのは無情である。

私は彼等に強烈な生の要求が無いからと云つて絶望するものでない、彼等の内に眠つて居る生の本能を刺戟さへしたならば必ず強烈な要求の生ずるものであることを期待する。現に今度の總選舉に盛に流行した政談演説などが幾分その刺戟になつたやうであるが、選舉の時だけに政治の方面から刺戟するのは効力が浅い、一日曝あたためて十日寒ひやすやうなことになる。私は各町村にある青年會や婦人會をもつと意義のあるものにして、學術講演などの方面から大多數の國民を教育して欲しいと思ふ。

所が青年會と云ふものが大抵町村長または資産家の走狗となつて其願使に任ずる奴隸の集合所となり、婦人會と云ふものが大抵會長、副會長、幹事などと云ふ地位を爭

うて町村に於ける資産家の妻女が虚榮を満足させる具となつて居る。中には見識ある男女有志家に指導せられて健全な發達をなして居る青年會や婦人會を見受けることもあるが、概して自治獨立の精神に乏しい團體が多いと云ふのは惜むべきことである。

また其れに就て私の感じたことは、日本の生活が餘りに中央集中主義に傾いて居て、學問と徳望と實行力とに於て敬服すべき人物が殆ど地方に居ないことである。多少の才分を持つた男女が都會へ出たがるのは歐洲の田舎に於ても免れない近代の傾向である。歐洲の田舎へ行けば、何處にも屹度首都にまで其高名が聞えて居る程の學者、藝術家、高僧、政治家などが居て、一地方の光榮となつて居るのである。聞けば我國では人物ばかりでなく、地方の農工業までが漸次に都會の資本家に兼併せられて、財力に於ても中央集中主義が行はれつつあると云ふことである。さう云ふ状態では私達の懐しい古巢であり、永久に新人の搖籃であるべき田園が却て落伍者と、低能兒と、其等を利用して私

利を營む小野心家との捨場所になつて仕舞ふのでは無からうか。

私は都門に居る才人が歸去來を唱へて地方改良の爲に歸るやうな殊勝な心を容易に起すものとも思はない。それよりか地方にある青年階級の少數な男女が、老壯年階級の願使に甘んずることなく、寧ろ時代遅れの彼等を反省させる意氣込で、互に自由意志に由つて自己の問題を研究し解決するやうに積極的に行動して欲しいと思ふ。

それから今度地方へ行つて私の感じたことは、地方にある教育者と云ふ人人の氣力の非常に沮喪して居ることである。中學、小學、女學校等の教師が利己主義病に罹つて、自家の専門である教育に對し、近代の學問藝術に現はれた新思想に對し、社會問題、政治問題、婦人問題等に對して、潑刺たる興味と熱烈なる憧憬とを失つて居ることである。教師と云ふものは何時でも身を挺して新思想の播種人となる自負と熱心が無くてはならぬ。然るに彼等の精神は早くも老いて居る。地方に於て最も現代思想に縁遠い者は宗教家と教師と神職とであると斷言してもいい程、彼等は現代の進歩に落

伍して居る。

「大人げない」と云ふ語の持つて居る思想ほど日本人を誤らしめて居るものは無い。日本人の弱點は早く大人になつて羨びてしまふことである。地方に行くといふと此早く羨びた大人の男女が元氣の無い取りすました顔をして澤山に居る。(一九一五年四月)

東京に憧れる若き婦人達に

私は毎月幾通か同じやうな青年の人人の手紙を地方から受取る。文學者となりたい、そしてあなたの家の書生にでも女中にも置いて頂いて勉強したいと云ふ依頼である。これは私ばかりでなく、文界の先輩や友人が常に苦められる手紙である。

其等の手紙を受取ると、私は封を切らない先から其未知の差出人の名に由つて中の用向が豫感される。私はまた苦痛を覚えさせられるのだと思つて封を切ることを一寸躊躇することがある。

私に對する手紙の差出人は若い娘さんが多い。文章や字體に巧拙はあるが、また往來常識の有無の疑はれるものも混つて居るが、太抵眞面目に其人自身の境遇や希望や家庭の事情などが書かれて居る。私は其れに對して同情せずには居られないと同時に、其返事として無情なことを書かねばならぬのを想うて苦痛を感じる。さう云ふ人に對して私の書く返事は常に次のやうな意味のことである。

「あなたの御熱心なお手紙に對して、私の致す不本意な返事をお許し下さい。あなたは文學と云ふものを速成で修められる職業だと思ひ、その職業を以て衣食住の生活が容易に出来るものだと思つておいてになります。それは第一に打破らねばならぬ空想です。また誤解です。文學は金錢の収益を目的として居りません。原稿料と云ふ金錢の収益のある場合もありますが、それは文學を製作する目的ではなくて、製作の後に偶々得る機會のある副産物です。文學には必ず収益が伴つて居ると云ふものではないのです。

文學は其様式は種々に別れて居ても、其目的は作者自身の生活の表現にあります。作者自身が一個の新しい人として多少とも新しい生活を體得して居ない間は、表現すべき生活が無いのですから従つて文學は無い譯です。

文學に従事して居る者の家に居れば文學上の教育を受けることが出来るとお考へになるのも間違つて居ります。昔と違つて都會に住んで居る者は學者にしても、藝術家にしても大抵自分の仕事と、餘儀ない世間の雜用とに追はれて忙しく日を送つて居るものです。其中から時間を割いて書生や女中に何かを教へると云ふやうな餘裕は全くありません。

また學者文人と云ふ者は大抵貧しい生活をして居て、家族を養ふことにすら汲汲として居りますから、他人のお世話まで手が届きません。之も昔の學者文人はさうでなかつたのですが、近年は益々學者文人の生活が困難になつて參つたのです。

私共も以前は柄がらにない無理をして度度あなたのやうな希望の方をお世話したのです

が、凡て失敗の經驗ばかりを致しましたから、今では絶対にお断りすることに決めて居ります。失敗の經驗の主要な一つを云ひますと、地方で想像して居た文人の生活と實際とが非常に懸隔があるらしいのです。文人と云ふ者の生活は美しい鳥が花の間に遊んで居るやうな氣樂なものかと想像して居たのに、東京へ来て見ると、文人の家も普通の家と同じ様に赤ん坊が啼いて居る。私の方から云つても女中として使ふ以上、寒中に襪むく襪むくを洗つて貰はねばならず、拭掃除もして貰はねばなりません。それで夜間に子供の寢鎮しんまつた後でなければ女中が假初にも机に向ふ時間はありません。空想に驅られて私の宅へ来た地方の娘さん達は、この實際の凡俗な生活に驚いて二三日も経たない中に歸つて仕舞はれるのです。

猶餘計なことながら附け足して申します。地方のお宅においてになつて徐ろに讀書することがお出来になるなら、わざわざ東京へ来て無駄な苦勞をなさるに及びません。初めから東京へ来ねば文學の製作が出来ないと思ふのは都會崇拜から来た誤解です。」

併し斯う云ふ手紙を書く度に、自分の感情を壓へて理性ばかりで書いて居るのが氣恥しくてならない。都會に居なくても文學は作られると思ふのは都會を知り盡した今の私の考である。併し都會を知らない地方の娘さんが都會に憧れるのは自分の娘時代に思ひ合せて自然な感情であることを私は一方に認めて居る。(一九一五年四月)

貞操に就て

實際に萬人に共通な要求を基礎としない眞理や道徳と云ふものがあらうか。萬人に滞りなく當て填まるものでなくなつた以上、それは既に眞理でも道徳でもない。

貞操は最早現代の道徳でないかも知れぬ。

貞操は美しい物と私は認めて居るが、併し藝術でもない。

貞操はどうやら富に等しい物である。自身の物として善く、他人が所有して居る時にも居ない時にも關りなく思はれるものである。

貞操は或人に取つて趣味であり、嗜好であり、癖である。貞操の要求を感じない人に於ては貞操は何でもない。男性にあつてはこの種の人が大多数なのである。私は貞操を女性の物とばかり思つて語つて居るのは固よりない。

貞操を戀愛の方面からのみ批判しては不完全である。性慾からも觀察すべきである。經濟問題からも攻究すべきである。(一九一五年四月)

處女と性慾

私はこの間藝術座のサロメを見て斯う感じた。サロメは寫實味の勝つた劇として演出すべきものでなくて、矢張オペラとして演出すべきものである。私が斯う感じたのは藝術座の俳優達の演出法にも關係があつたらしいが、サロメに對する私の解釋が固より主因になつて居た。サロメは純粹な處女である。其れが能動的に男を挑むと云ふことは、處女の生理と心理とに矛盾するやうに思はれる。之は私一人の經驗から

推斷するので、一般の女性には及ぼし難いかも知らぬが、純粹無垢の處女には結婚期と云はれる年頃に達しても性慾の強烈な自躍は起らないものである。勿論性慾は或一定の年頃になれば異性に對する好惡の感情となつて自發する。それが戀愛の感情にまで進みはするが、あらはに肉の欲求を感じて積極的に自ら悶へると云ふには到らないものである。全然肉の欲求が無いかと云ふと、讀物とか世間話とかに由つて刺戟せられながら、纔に一の好奇的空想として動いて居るばかりで、まだ肉の實感を少しも解しないのであるから、猛烈にサロメがヨカナンに仕向けるやうな態度には出られない。それは羞恥と云ふやうな表面的な感情が抑制して居るからでは無く、全く肉の欲求が其れ程積極的に躍動して居ないからである。

處女が男に對して能動的に戀をして居ても、それが肉の欲求となつて、男を挑むと云ふやうな事實は、昔から歴史にも文學にも例が少い。「あなにやし愛男」と先づ言ひ掛けられたと云ふ神話や、戀人の首級に接吻するサロメの傳説などは稀有の例である。

源氏物語や榮華物語を通して見た平安朝の生活にも、處女は再三男から誘はれて初めて許すことが普通である。徳川時代の小説や劇には處女から男を誘ふことを仕組んだ物を多く見受けるが、それは作者が武士道全盛期の男子に諂つて、男子が女子を挑むと云ふことは不見識であると云ふやうな作意から仕組まれたことで、處女の性慾が徳川時代に到つて激變した譯ではなかつた。私は徳川時代の其等の小説や劇を見るたびに虚偽と醜惡の不愉快を感じずに居られない。處女の純潔に對する侮辱だとさへ思つて居る。

女性が肉の欲求を感じるのは男性に誘發された後のことである。私は處女の童貞を保つことは苦痛で無いから永續すると信じて居るが、一旦童貞を破つた以後の婦人が肉の欲求を忍ぶことは概して苦痛に違ひない。それは體質、性情、境遇、年齢に由つて苦痛を感じないで居られもするであらうし、また男子ほどに性慾の壓迫を感じないのが婦人生理の實際であるから、孤獨の男の書いた文學に現れるやうな不斷の苦痛を

感じもしないであらうが、處女を破つた婦人が孤獨に堪へ難いやうになるのは——性慾以外の複雑な感情も加つて——自然の推移である。さうなつた婦人が時として能動的に男に身を投げ掛けるやうな強烈な情慾を感じる場合があらうとは想像し得られる。近松の書いた「堀川波の鼓」のお種のやうな性格の女が、お種のやうな境遇に置かれた場合に、欲求を自制しきれずに過失に奔ることは同情を惹くことである。

それが劇として寫實風に演出する時のサロメは、婦人が觀て虚偽を感じる點を免れないが、オペラとして音樂的に演出する時のサロメは、其れが史上の王女でも處女でもなく、また男でも女でもなく、人間に共通した深刻な愛情の象徴として何人にも共鳴せられるのである。我國の舞踊にある狂亂物の如きも、寫實でなくて、愛情の象徴である點に於て微弱ながら我我と交感を保つて居るのである。劇に於けるサロメも歐洲の俳優の演出では、寫實を離れて象徴の氣分を夢幻の間に現し得られるものださうである。(一九一五年五月)

婦人と政治運動

近頃内務大臣大浦氏が公會の席で、衆議院議員其他の選舉運動に婦人の關係することを禁止しようとする意向を明言せられた爲に、それが世間の問題となつて居る。私は斯う云ふ問題が大浦氏の發言に由つて提出せられたことを怪まない。氏は今の官僚政治家の間に在つて誰れも知る専制主義者の雄である。

私は大浦氏の意見が候補者に從屬した運動員として婦人を選擧人を戸別訪問することを制止しようとする趣旨であるならば全く同感を表したい。運動員と云ふものは候補者の代人若くは使者である。候補者が自身若くは使者を以て選舉人の門に叩頭しながら投票を依頼して歩くことは、國士を以て任ずる程の人にあるまじき卑屈な行爲である。また其れが爲に候補者自身には巨額の運動費を要し、選舉人に於ては多大の迷惑を受ける。私は此理由から候補者に從屬する一切の運動員を男も女も禁止すべきも

のであると思つて居る。運動員を絶対に禁止すれば戸別訪問は従つて禁止される譯である。

併し大浦氏は専制主義者である。人間の欲求の自由を理解せず尊重しない人である。同じ専制主義者にしても頑強な保守思想を基礎として居るのなら、他山の石として争ふのも張合のあることながら、氏は固よりさう云ふ思想家ではない。細心の省慮を要する問題に對して僭越にも古臭い概念を以て是非しようとする俗人が「女には女の仕事がある。男の仕事に關係しようとするのは餘計なことであり、生意氣千萬な事である。政治は女わらべの知ることでない」と云ふ風に言つて、それで立派な批判になつて居ると考へて居る如く、大浦氏もさう云ふ無反省な俗見から、漫然として婦人の政治運動一切を禁壓しようと思はれるのであらう。

人生の持續と改造とを欲する者が、その欲求を實行に移すことは人間自身の必要事件を行ふことである。人間自身のあらゆる必要事件に參與することは各人の所有する

権利では無い。政治が人生の爲めの政治であり、政治の改造が人生の必要事件の一つである以上、何人も政治運動に關係して差支ない譯である。男子は關係して善いが、婦人は關係してならないと云ふ理由は毫もない。人間の欲求が男女に由つて決定的に差別があらうとは思はれぬ。過去の婦人に政治の欲求が微弱であつたにしても、其れて未來を推斷する譯には行かぬ。人間の欲求は進化し、そして時に激進する。近代に於て人間の欲求が激進した爲に、人生の種種の機關がその欲求に従つて内容と相とを改めた。政治の意味も近代のは昔と異つて居る。既に民主的精神を基礎とした政治の端が開かれたからは、少數の權家が天下の政治を私して居た専制時代と異つて、日本人全體が政治に參與する權利を行使してよいのである。

民主的精神が人間の自由、平等、博愛を主張し、更に此精神に促されて發生した新理想主義が人間の飛躍を唱へて我我を勇氣づけて居る時代に、謂ふ所の「日本人全體」から婦人を除外して、人としての權利を婦人から奪はうとするのは不法である。

俗人はまた「政治に關係することは日本婦人の貞淑を傷つけるものだ」と云ふてあらう。私はさう云ふ俗論家に質さう。憲法政治の精神は貞淑な性情と戻るものであらうか。また日本婦人の性情は貞淑のみを固執して移らないものであらうか。また何かと云ふと歴史を論據にしたがる俗人達は、東西の史上に散見する婦人政治家を悉く不貞の女だと解釋するのであらうか。帝王親政時代に於ける天照大日靈女尊あまてらすおほひのめこと以下の聰明な女性天皇や、皇后、皇女の方方が體現された政治生活の精神は、矢張不貞の例であつて、我我日本婦人の範とは爲し難いものであらうか。明治維新の改革に奔走した婦人志士に贈位などのあつたことは日本人の生活と背反したことなのであらうか。

また俗人は婦人の政治運動を認容すれば、すべての婦人が政治に熱中するに到ることを恐れるかも知れないが、それは全く杞憂である。政治は富籤や馬券と異ふ。多数の有象無象が狂奔する目的にはならない。既に男子が自由に政治運動をしてよい地位に置かれて居てさへ實際に運動するものは一小部分の男子に過ぎない如く、婦人も少

数の適任者だけが政治に關係するのみであらう。婦人に參政權を與へる日が來ても實際に代議士となる者は實力ある最少数の婦人のみであるに相違ない。すべての婦人が政界に奔るものでない以上、婦人が政治運動の爲に他の職務を曠廢するであらうと想ふのは餘計な心配である。

併し斯様なことは大浦氏に解る筈がない。何人も聰明な文明政治家を以て大浦氏に期待して居ない。大浦氏は近く警察權と黄金との威力を以て多数の與黨を帝國議會に送り得た人である。陰險と暴壓とは氏の習性である。私は寧ろ飽迄も其陰險と暴壓とを氏に發揮して欲しいと思ふ。もつと頑強な専制の力が現れて國民を苦めなければ、先帝陛下の下し賜つた憲法の精神を擴充する自由思想は我國に勃興して來ないであらう。

歐洲の戦争が終つた後で舊に倍する實感と權威を以て再起するものは佛英兩國の理想主義であらう。従つて婦人の參政權の如きも案外速かに是認せられて、歐米の家

常茶飯となつてしまつてあらう。そんな世界の大勢に頓着しない大浦氏はどんな禁令を近く日本婦人の上に布かうとするのであらうか。(一九一五年五月)

夏が来た

夏が来た。どの草木も芽と花を着け、どの野山も若やかな緑を衣^きて望る。鳥も魚も昆虫も飽食と生殖と飛舞とに忙しく、光と、香と、色と、音とが燃えつつ、噴きつつ、融けつつ、流れつつある。しばらくも休む隙のない自然よ、勤勉な自然よ、おまへは今私の書齋にカーネーションの一鉢とチュウリップの切花とを捧げた。私は其前で筆を執つて居る。自然よ、私はおまへに對して愧かしい氣がする。私はおまへのやうに勤勉でない。私はおまへのやうに悠悠としては居なくなつた。私はおまへのやうに無我無中ではなくなつた。私はおまへのやうに全身を愛の爐に出来なくなつた。けれども自然よ、私はもうおまへの子でも友でもない、人間はおまへの工人である。

人間はおまへを征服し、善用し、改造せずには置かない。私も微力ながらその人間の組に居る。

自然よ、おまへは何程も進化しない、年々歳々おまへの作る花は永久の香を放ち、永久の色を見せ、永久の心を語つて居る。おまへの休まずに働くのは大抵重版である。おまへの勤勉はおまへの徒勞である。(一九一五年五月)

創新の生活

私が永久を嫌ふ感じは過去を嫌ふ感じとひとしい。過去は骨董臭く、永久は單調を免れない。過去と永久とが時としては同じ物に見えて現れることさへある。過去に甘んじる人が一種の生命麻痺であるなら、永久に安んじる人は一種の老衰である。

人間の特權——人間の特に發動する自由な生命力——は人間自身と自然とを材として改造に次ぐに改造を以てすることである。自然の意志も恐らく同じであらう、併し

自然の改造力は甚しく鈍いやうに見える。人間の中では今日までの女が久しいあひだ自然の鈍さを模ねて居た。女はいつまで経つても娼婦と妾の心を失はずに居た。女は過去のものであつた、永久のものであつた、自然の一部であつた。

けれど、女は今氣が附く時が來た。過去の固定と永久の沈滞とから目を覺して、生命の動力を男と一緒に活用する時が來た。

自然にも稀に突發があり、急變がある。近代の人間は寧ろ突發と急變を屬性として居る。家畜が猛獸となることはないが、近代の人間は一躍して神とあらゆる舊勢力とに代つて被支配者から支配者になつた。人間の過半数を占めて居る女も少しく男に後れて今茲に強烈な本能を突發し、新代の改造者に急變しようとして居る。

昨日を以て今日以後を測ることは最も不當、不正、不安、不明なことである。俗人は此事を知らない。俗人は歴史を重んじ、過去の經驗を恃み、永久を信じ、人間を鈍感な自然に妥協せしめようとする。併し人間の中の優強者は過去と永久とを無視し、

自然を鍛へて新しい現實を作り上げる。優強者の生活は芳烈新鮮な人工の生活である。俗人が人工を卑むのは彼れが過去に縋り、永久に頼る半死老衰の人であつて、その實力が偉大な人工を成し得ないからであるが、優強者から見れば人工の外に彼自身を満足せしめる華華しい充實した生き方は無いのである。

偉大な人工は過去と永久とを超越して突發する。謂ゆる百尺竿頭に一步を進めて突發する。ロマン、セザンヌ、キュウリイ夫人と云ふ様な天才の出現は豫期以外の新しい事實である。過去の輦車に憧れ、馬車を永久の乗物として頼んで居る俗人に、飛行機の發明は豫想されないことである。「女に何か出来るものか」と云ふ人に専ら過去の女を回顧し、眼前に停滯して居る永久の女のみを眺めて、この世紀の優秀な女が日夜に急變しつつあることを知らない人に違ひない。歐米の女權運動とキュウリイ夫人のラヂウムの發見とは共に女性の急變を證明して居るものである。

女性は急變しつつある。婦人の性格の如きも一概に過去を以て推斷する譯には行く

まい。處女にも強烈な肉の欲求が突發しつつあるかも知れない。従つて貞操の意義なども急變しないとは限らない。(一九一五年五月)

欲求のよまよ

内心の欲求の儘に生ゐること、之が眞實の生活である。本然の生活である。より幸福な欲求のために他の欲求を我れと我が壓迫する場合がある。其れも眞實の生活である。本然の生活である。

俗人は妥協と姑息を調和だと曲解して其れを我々婦人に強ひようとする。「品よく」と云ひ、「柔順に」と云ひ、「圓滿に」と云ふのは調和でも何でもない。過去と妥協し、永久に姑息せよと誘惑する俗人の聲である。「圓は退嬰萎靡の圖であり、角は分裂躍進の圖である」と未來派の女詩人が云つたやうに、我々婦人は空虚な全圓を望まない。外形に不備な所はあつてもよいから新鋭多角な生活がしたい。眞の「調和」は外形にある

のでなくて、新しい眞實を掴み得た全人的感激と緊張とにあるのである。ゴッホとピカソの畫を見よ。(一九一五年五月)

婦人記者の社交俱樂部

東京にある新聞雑誌社の婦人記者達が社交俱樂部のやうな會を近く創められた相である。その會員の中には學殖も見識も実行力も十分備つて、新しい文明婦人たるに背かない神近市子女史のやうな人達も居られるのであらう。日本の現状から云へば、婦人記者達は婦人界の新知識であり、選良であり、そして多くの若い婦人が羨望の目を寄せる最も自由な境遇に在つて活動する人達である。私は皆さんが我々婦人の先驅となつて婦人界改造の範を我々に示されることを熱望する。我國の婦人團體は決して少くないに關らず、我々の蒙を啓いて新しい生活への指示を與へる様な團體は殆ど見當らないのであるから、其會を單に婦人記者達の社交機關たるに止めないで、婦人界の

爲めに種々の新思想と新運動との發電所となるまでに擴大して欲しいものである。

(一九一五年五月)

製作の前後

自己の知り難きを思ふ日がある。自己を肯定することが小兒の自慢とひとしいものでないかと思ふ日がある。自己の微力をつくづくと思ひつめる日がある。そして何も手に附かないで、やるせない不愉快な思ひをして暮す日がある。私に取つて日月の蝕のやうなものである。さう云ふ厭な日が幾日も續いた後で、私はたまたま私の思想に仄かな光と動搖とを感じる。同時に私は製作欲の壓迫を感じながら、よろよろと倒れかかるやうにして筆を執る。

私の歌は形式に拘泥しないで作ることにして居る。之は三四年來のことである。三十一字の歌は感想さへ心に溢れるやうになつて居れば、形式は少しも累をなさない。自己催眠の暗示を與へるやうに短歌の形式で表現しようと云ふ暗示を心に與へて置け

ばそれでよい。どうかして表現の緒が樂にはつれて出ない時には、その表現しようとする感想が自然に持つて居る語の一つを紙の上書き附ける。すると其語が緒となつて感想に伴ふ語が前後に延びて出る。

私はまた詩を作る。私は之が詩壇の新しい人人の間に詩と稱せられるものと共通の點があるか、どうか、之が果して識者から見た詩と云はれるものか、どうかを知らない。唯だ私は自分勝手に樂器を取つて弾き鳴すやうな氣持で作つて居る。私は音樂を學ばなかつたが、私の詩は私の素人音樂の積りである。また私の詩は私の全人格が踊つて居る聲の線、ひびきの襞の積りである。

巧拙と云ふことは三四年來の私に大して氣になることとなくなつた。それよりも淀みなく實感を歌ひ得たと云ふことが満足である。また世評と云ふものも殆ど心に上らないやうである。之は一つは生活が忙しくて自分の作物の批評などを讀む暇がない爲でもあらう。全く世評を氣にしないこともない證據には、たまたま自分の敬服して居

る文界の人達が私の作物にしかじかの評をせられたと人傳ひとづてに聞く場合などに私の胸は小娘の如く蕪くのである。

自己の明かに見える日がある。それは冥想と云ふやうな氣持でじつと内省した時ではない。一體に私の經驗では内省と云ふものは自分の一面ばかりを深く穿つて眺めさせるだけで、自分の全部だと思ふものを見せないものである。自己の明かに見えるのは自分の作物を製作の時から或時を置いて後に偶々讀む時である。それは自分の醜さも、美しくさも、強さも、弱さも全部が餘さずに見える時である。

自己の全部を見ることは、太抵の場合私を喜ばすよりも私を哀ませる。自分の進歩の遅遅として居ることを見せつけられるからである。私は其度に「過去を無視せよ」と心の中で叫ぶ。實際過去の自分なんか何うてもよいと云ふ氣持になつて、私は現在の執着に向ふ。私には自己の過去を明かに見ることが厭さに、平生成るべく自分の舊作

を讀まないことにして居る。(一九一五年五月)

「誠」と「眞實」

人間を絶対に満足せしめるものは「眞實」である。「誠」の一意である。理知も、權謀も、暴力も人間最後の欲求である所の眞實の力には及ばない。私は個人の生活も世界人類の生活も眞實を以て基礎とすべきものだと思つて居る。個人の道徳と世界人類の道徳とが矛盾して居るなら其何れかが虚偽の生活であることを愧ぢねばならぬ。東洋の道徳が「誠」を第一義とし、修身、齊家、治國、平天下と云ふ順序でその「誠」を延長させて居るのを見ると、歐洲の道徳が「眞實」を第一義として人生を終始しようとするのと理想に於て一致して居るのであるが、日本今日の政治家は却て個人と社會國家を乖離せしめ、個人關係の外は専ら權謀と虚偽を以て臨みつつあるのである。

私は日本が青島に出兵したことを其當時から一人ひと苦くしいことだと思つて居た。更

に支那に對する外交談判を見て、今の政治家は王道の國を霸道の國に墮落させ、文明仁義の民に剽盜劫掠の蠻族たることを強ひるものだと思つた。

加藤、尾崎、武富三氏のやうな比較的文徳の士を以て世の中から信頼されて居る政治家が「選舉干渉の事業は斷じて無い」と云ひ「外交に失敗の點があるなら細目に亘つて論證して欲しい」と云つて在野黨に挑戦して居るのを見ると、今上の御代となつても政治家は益々權謀と虚偽を能事として愧ぢないのである。

増師案に對して鮮明に反對説を唱へて居た大隈、尾崎二氏が、一旦政權に縋りつくや否や、理由らしい理由もなく増師案賛成者に一變した厚顔無節操の如きも、國民教育の上に大きな悪感化を及ぼすことである。

私は良人の大臣を通して政界の裏面に接近して居られる尾崎テオドラ夫人の如き貴婦人が、聰明な貴婦人だけに、政治家の良心の腐敗に對して苦悶を感ぜられることが人一倍深からうと想像して居る。私はまた屢々我子の質問に對して現代の知名な政治

家を大抵敗徳者の例に引かねばならないことが苦痛である。(一九一五年五月)

入澤常子氏

入澤博士夫人にお目に掛つた時、男の子には女の子の讀物をも讀ませ、女の子には男の子の讀物をも讀ませて居りますと私が云ふと、夫人は自分も男の子が病氣の時などには慰みに編物をさせたりすると話された。夫人は自分の力で國を富ますことは出来ないけれども、せめて國民の節儉を計りたいと云つて、僅かの尺で足る女帯を工夫したり、狭くて便利な臺所を工夫したり、いろいろの考案を實行して居る人である。

(一九一五年六月)

雜草

雜草が庭に殖えて行く。私は一方の庭だけを雜草に任せて抜き取らずにある。そして毎朝顔を洗ひながら目を遣つて居ると、雜草と云つて疎かにして居たものがいろいろ

ろの意味で心を惹く。人に知られた木や草花は新しい刺戟に乏しいが、雜草は第一その名からして私には研究課題である。私は雜草の持つて居る風情や姿態を歌つて一冊の集にしたいと思つて居る。(一九一五年五月)

模倣と虚榮の意義

人はその生活意志が夏草の活力のやうに旺盛である限り誰も自分の生活を時と共に改造し擴大して進まうとする意向を持つて居る。その意向を實現する方針として独自の理想を作り、その理想を實行することに由つて生活の改造は遂げられるのであるが、また独自の理想を建設するに到らない間は誰も他人の新しい生活を模倣して、自分が在來の生活に甘んぜず何等かの新異を欲求しつつあると云ふ意向だけを表示して生きて行く。誰も明かに意識して模倣するものは無いが独自の理想を建てる程度に到らず、さりとして現在に停滯するに忍びない人は、知らず識らず模倣に由つて自分の生活

に有つて居る新しい意向を表示し、其れて自己の存在を意義あらしめて居るのである。しかも模倣家が心から模倣に満足して居ない證據には、世に新しい生活様式の起る度に忽ち弊履を捨てる如く第一の模倣を抛つて第二の模倣に移つて行くのでも明かである。そして太抵の人は久しく模倣の域に妄動しては居ない。經驗が積まれ、見識の高まるにつれて、自分に相應した何等かの理想を建設して独自の生活を創造して行く。天才の生活に比べたなら創造の生活と云はれないかも知らぬが、我々凡人の生活も平凡、不純、低調ながら、全くの模倣でない限り一種の獨創生活であることを主張したいと思ふ。

また、人はよく婦人の虚榮を批難する。私は或程度までは其批難に同意するが、虚榮の意義を一度も反省して見たことのない人達の苛酷な批難には反對である。虚榮と云ふ言葉を辭書で見れば善くない意義の抽象名詞として示されて居るが、人生の事實

は前後左右に關聯して居て、辭書の中の言葉が示して居るやうに孤立した思想も事物も存在して居ない。どうして虚榮を以て不徳の一種であると斷定してしまふことが許されやう。實は世に虚榮と云ふ面白からぬ字面の言葉があるので人は無自覺に此言葉を使用し、最早此言葉では表示し難くなつて居る事實をも猶漫りに此言葉に當てはめて是非しようとするのである。停滯した因習的言語と進化流轉する現實との間に生ずる錯誤である。

私の見る所では、大抵の場合、虚榮として世間の或人人から批難せられる事實は却て批難に値しないのみか人生發展の順當の經過として肯定すべきものである。例へば劇壇の人となる婦人、理論を喜ぶ婦人、家庭外に活動する婦人などの増加して行く現象を批難して、その原因を虚榮心に歸するやうな常識論がある。私は其等の婦人が悉く確かな独自の理想を有つて居る者とは思はないが、少くも其等の婦人が悉く自己としての新しい生活を建てようとする意向——新生活に對する欲求——を其等の言

動に由つて表示して居るのを明白に認めることが出来る。この事實が虚榮と云ふべきものであるなら、虚榮は言葉の輕浮なる割に意義の愛すべきものである。人は實力の満たされないことを批難するのであらうが、意向は實行の前驅である。菩提心の發芽である。意向が前に無くて實力を充足する活動は生じない。一等國たる實力をまた具現して居ないのになぜ日本が一等國の仲間入をして苦しい外觀を張つて居るのか。專制政治の夢を見て居る國民になぜ日本は憲法政治の制度を布いたのか。一等國とならうとする意向と、憲法國にならうとする意向との表示を先に急いだことは明かに國家の虚榮に違ひない、しかも其れが日本人の生活發展に正しく必要な經過ではないか。但し模倣を以て一生を終始するやうな輕躁婦人には與し難い。其等の婦人が如何に流行の衣服と化粧品とで自ら飾らうとも、其れは生命のない飾人形に過ぎない。尤も一見飾人形と見える婦人達の中にも、久しく模倣に留つて居ない立派な素質の人が多數に混つて居ることであらう。その區別が容易に附かないものである以上、一概に時

代遅れの虚榮と云ふ言葉を以て其等の婦人を罵るのは却て論者の性格の狭小、輕浮、苛酷を自白するのである。

虚榮が實力を促し、不經濟が富を作る。人生は何時も質素と儉約のみを前提にして發展するとは決して居ない。「驕る者は亡ぶ」と云ふやうな觀念を無條件に振廻してはいけない。文明と云ふものは元來人間の贅澤心が築き上げたものである。

(一九一五年六月)

婦人界の一現象

近頃最も私の注意を惹いたのは、大隈現内閣首相の主宰せられる雑誌の上で、二十七人のあらゆる階級の婦人が其二十五人まで衆議院議員選舉運動に婦人の關係することを肯定したことである。中には其理由の消極的なものも見えるが、多數の思想が揃ひも揃つて積極的であるのは在來の婦人界に見掛けなかつた新現象である。井深はな子氏、三谷民子氏のやうな基督教の學校に勤めて居られる教育者の意見が、他の官私立學

校に關係ある婦人教育者の意見と違つて無遠慮にきびきびして居るのが人意を強くする。明治前期に猛烈な改革思想を有つて居た男子側の基督教名士は悉く銷沈してしまつたのに、當年の意氣が其等の基督教婦人に復活して來たやうな感がした。東京朝日の記者竹中繁子さんの書かれたものは二十七人の中で議論の質も量も第一に秀れたものであつた。世人は之を以て單に選舉運動に對する一部婦人の意見だとばかり見てはならない。之もまた現代生活に對する日本婦人の意向の急轉を表示するものである。これだけの結晶を露はに見せたからには幾多の品脈がどの階級の婦人にも次第に分布されて行くものであることを想はねばならない。(一九一五年六月)

小學生の掃除問題と體罰問題

小學生に教室の掃除を課すること、及び體罰を加へることの可否が近頃の問題の一つになつた。斯う云ふ問題は現に小學へ行く子供を持つて居る人と否とて其考察の仕

方と其論斷とに眞實性の親疎が分れる。小學教員と父母とは共に同じ子女の教育に係して居りながら、一方は概ねまだ親としての實際の愛情を體感して居ない人人が多いので、動もすれば教育の法則を主とし、子女の生を客として取扱ふ風を免れ難い。教育者のみならず、一般に我血を分けた子女を持たない人人の教育論には多少實際に疎い所がある。子女の生の發育を害するやうな危惧のある教育法は眞實に我子を愛する人間の堪へ得ないことである。教育の法則を立てる人達も、其法則を應用して他人の子を教育する人達も、常に父母の愛を斟酌せねば人の子を賊そこなふ結果になる。世に最も深く子女の生を味讀し愛重して居る者は父母であるから、眞の師道——眞の教育は——子女に對して長者たる愛——師の愛——に父母の愛を加へたものであることを心掛けねばならぬ。

現に四人の子を小學に託して居る私は、母としての愛から此問題に對して明かに反對を唱へる一人である。

子女に清潔を尙ふ心と物事を整理する習慣とを養はせる爲に教室の掃除に當らせる必要があると教育者側は主張するのであるが、其等の修養に就いては他に幾らも方法があつて、例へば私の家では子供等の衣類は成るべく子供等自身に疊ませたり、子供等の本棚や遊戯品の箱やを必ず月に三四回子供等自身に整理させたり、日曜日に限つて時々庭の掃除を子供等にさせたりして居るのであるから、わざわざ多人數の集る教室の埃塵ほこりを浴びて病毒に感染する危険を犯させるには及ばない。それも山間の村落にある小人數の清潔な小學などならば教員の適宜で掃除をさせてもいいが、結核菌などの多量に撒布されて居るのは勿論、ペスト菌さへも油斷のならぬ都會にある小中學や女學校で學生に掃除を課するのは非常識であり、既に醫界の信用すべき人達が頻りに衛生上から反對して居るのに教育者側や文部省の屬僚達が病毒に感染する危険の無いことを臆斷するのは亂暴である。科學を尊重する教育界に却て科學的精神の實行され

て居ないのは意外に感ぜられる。私はそれが科學の研究範圍で證明せられる問題である限り、醫界の人達の意見を信用して教育者側の臆断に反對せざるを得ないのである。

私は如何なる場合にも自他の肉體を虐待することは野蠻の行爲だと思つて居る。まして學生を體罰に處することは教育の目的と正反對の行爲である。目的の爲に手段を擇ばないものである。たとひ在來はさう云ふ行爲が師父に許されて居たにせよ、人權の尊嚴を自覺した今日の人間は其等のことに正しい反省が無くてはならぬ。罪人には體罰を科することがあるけれど、兒童の學業品行の優劣は罪惡でないから懲罰的の處分を加ふべきでない。飽迄も愛と威嚴と道理とのある教訓を以て當人の自省を促すのが教育者の取るべき唯一の方法である。それとも體罰を科すべき合理的基礎が他にあらうか。私は断じて無いと思ふ。教育者が體罰を科するに到る由來は、一にそれが在來の教育の習慣になつて居るから、二に激昂の餘りに弱者を腕力で威壓したく

なるのは人間の本能であるから、三に教師自身の人格が卑くて眞の師たる愛が足りないからと云ふことに歸してしまふやうであるが、是等は凡て此問題を肯定する合理的基礎となるものではない。有害な習慣から人間を解放するのが教育の目的の一つであるのに、反對に子女をして習慣の犠牲たらしめるやうなことがあつてはならない。私なども曾て我子を懲罰の積りて打つたこともあるが、その刹那に自分に潜在して居る野蠻な本能が私の愛情を瞬間の麻痺に誘つたことを悔い且つ恥ぢ、併せて子供を腕力で威壓することが決して子供を反省せしめる結果にならないことを豫感して自分の不
明に戰慄したのであつた。

一體に模範小學と云はれるやうな學校を出た人で他日一流の人物になつた人の掛いのほ、我國の模範小學と云ふ意味が煩瑣な形式の整頓にあつて、子女の生を愛養する教育の根本精神と遠ざかつて居るからである。私は堺市の宿院小學に學んだが、それ

は二十餘年前から全國で有數な模範小學であつて、年毎に優等の卒業生を出すことも
掛くないのであるが、今に人の視聽を引く一流の人格が一人も出て來ない。かう云ふ
無能な模範小學が全國に殖えて、形式主義の教育が人間の發揚を妨げて居ることを思
ふと寒心せざるを得ないのである。

私は高等師範の嘉納治五郎氏程の人が矢張精神主義の教育を穿き違へて、其附屬小
學の兒童に掃除を課することを固執せられるのを遺憾に思ふ。衛生上の危険を凌いで
までも兒童に掃除を課することが精神修養に必要なとするのは、氏もまたいつの間
に形式主義に墮落されたのではないか。

私はまた多數の小學で生徒に掃除をさせる理由の一つは小使の人数と經費とを省く
爲だとも聞いて居る。私は自分達の子供が學校の小使に代用されることを批難するも
のてない、寧ろ暹羅の國民が貴賤の別なく一生に一度出家して行脚乞食まじやうの行を修する

如く、學課の餘暇に多少の勞働に服することは自營自活の愉快と、人間平等の博愛觀
とを感得する利益のあるものとして賛成し、また我國のやうに貧乏な國ではそれが爲
に幾分ても學校の經費を節約することが出来るなら、それも結構な事として喜ぶので
あるが、併し其れが衛生上に危険である以上、他に如何なる利益があつても斷然私は
不賛成を唱へる。之は小學ばかりでなく、中學と女學校に於ても同様に廢止せねばな
らぬ惡風である。(一九一五年六月)

婦人を侮辱する矯風運動

矢島かぢ子老女史等の婦人團體から今秋の御即位式の大典に際し、あらゆる祝賀會
の席に醜業婦の参加することを禁止せしめようとする運動が起つて居る。私は日本に
ある諸種の婦人會が其團體の勢力を善用して、男子の閑却して居るあらゆる公共問題
の改造に努力するに到ることを望む者であつて、前述の小學生に關する二問題の如き

も婦人團體が率先して世の反省を促すべきことであると思ふのであるが、矢島女史等が常に其等の現實生活に密切な問題を閉却して、禁酒、廢娼、有婦男子の姦通制裁と云ふ様な遠大な問題にのみ専心して側目^{わづら}を振られないのは遺憾である。殊に大典の祝賀會に醜業婦云々の運動に就いては、私が平生竊に敬意を寄せて居る老女史に向つて抗議せざるを得ないのを悲む。

私の抗議の理由は簡明である。醜業婦もまた我々と異なることのない一個の日本國民である以上、大典を祝する感情に我々と等差のある筈がない。彼等を祝賀會から排斥する理由が何處にあらう。勿論彼等は醜業婦として参加するのではなく、藝妓として参加するのである。社會の下層にあつて肩身の狭い彼等に、如何なる名義の下にせよ、公會の席に参加する便宜を假して、國民としての祝賀を共にせしめることは、私の知つて居る基督教の博愛的精神にも協つた行爲である。其れが皇室歴代の聖旨である一視同仁の道徳に協ふことは言ふまでもない。

一體に私は矢島老女史等の如く藝妓に向つて類に「醜業婦」の賤稱を下すことを好まない。たとひ裏面には賣淫の行爲があるにしても、彼等の全部が其行爲をなすものではなく、固より彼等は表面に藝妓を業として居るのであり、裏面の醜業を恥ぢても居るのであるから、我々は出来るだけ許かぬことを以て直しとしたい。(一九一五年六月)

あれや、これや

聯想は嗅覺よりするものが最も敏感で且つ最も微妙である。私は自動車が発散して通る揮發油の煙の匂ひを嗅ぐ度に巴里の思出が込み上げて、涙がにじみ出るまでになつかしい。人間が大昔から香料を愛するのも香料其物の快感ばかりでなく、香料に伴ふ複雑な聯想を愛するのであらう。揮發油の煙は智的に考へて醜な香であるが、私の感情では巴里の聯想を刹那に起させるものとして、一つの親しい實感的な芳烈な匂ひになつて居る。

香料と云へば人は直ぐに梅の花、橘、薔薇、山梔くらなほと云ふやうな物を擧げる。其れは併し冷静な理智を以て概念を述べるので、香に對する實感を述べることになる、個人個人に由つて直接経験が違ふのであるから、私のやうに揮發油の煙の匂ひがなつかしいと云ふやうな特例が多いことであらう。

何事も其人の直接経験から得た實感を述べるのではなくては眞實の個性が出ない。概念を述べて平氣で居られるのは、日本人の生活が表面的だからである。

日本の女はよく概念だけで物を言ふ。家庭や學校や書物から教へられた儘の思想で物事を觀察し、判斷する。それで日本の女には誰に聞いても山は富士山、花は櫻が佳く、袈裟御前は歴史上に實在した貞婦で、紫式部と清少納言とは同じ天才であり、花を活けるには在來の插花法に由らねばならぬもの、と云ふ風に意見が一致して居る。それでは版に押ししたやうな他人の意見を踏襲して居るだけで、實は自説と言ふものが全く無い譯である。

流行と云ふ物は總てが佳いとは限らないが、それが流行する程あつて其中に何がしかの人を惹き附ける新味を以て居ないことはない様に思はれる。言ひ換へれば群衆心理が無意識に或物の缺陷を感じて居るか、同じく無意識に或物を望んで居るかする場合に投じて都合よく或物を提供することの出来る素質を何處かに備へて居る物が、流行の潮流を作るのであるらしい。流行を作らうと苦心して種種の新奇な物を提供する人は常に多數なものであるが、其れが大抵失敗に終つて流行の勢力とならないのを見ると、流行を作らうとする人にも、流行を迎へる一般の人にも、何が果して流行するかは解らないのである。稀に流行を作り得た人があれば、其人は無意識に時代の缺陷と要求とを感じて或物を提供したので、初めから必ず之が流行するであらうと言ふ合理的な確信があつた譯ではないであらう。

近年は衣服其他の色に萌葱や茶が流行して居る。流行して見ると久しく等閑にして居た其等の色が或新味を以て人に迫るのを感じる。人は流行に由つて其等の色に新しい趣味を發見し、各自の生活を爽かて、熱に富んだ、意味深長のものに轉化するのがある。萌葱や茶は珍しい色でないが、其れを迎へる群衆の心内で無意識に豫感して居る或新しい情緒と其色とが偶々調和して一つの色の新味を創造するのであらう。色彩に就いて何の理解もない純模倣者は別として、多少でも趣味の上に目の開いて居る人には、其物の流行に由つて初めてしみじみと感得する或新味が必ずあることを經驗するものである。

若い女の心理から云へば、自己の青春と云ふ力にどの様な色彩でも惹き附けて美しい物に鍛へ代へる丈の自負と誇りがある。其れて流行の色に限らず、若い女はどの様な色彩でも自由に採用して躊躇しないのである。他から若い女に向いて、流行に順

應せず自己の判断で流行から選擇をせよと云つても、それは若い女の心理を知らない註文である。若い女はさう云ふ註文に耳を貸さず、各自の好む色彩を主調として自由自己を裝飾する外は無いのである。

萌葱色の流行はそれが餘りに突然な色彩の提供で流行の色としては過去に例の乏しい所から、最初(一昨年)の頃は一寸人情に馴染まなかつたし、其色の工夫にも流行元の方で十分巧く行かない點があつたらしく見えたが、今年に入つて三越などで見ると萌葱の工夫がまことに好い落ちつきを示すやうになり、それと同時に一層廣く流行するやうである。

近頃女の帯の狭くなる傾向のあるのはいい事である、在來の帯が與へる重苦しさを脱して、日本の女の腰を幾分腰自身の持つて居る肉の形の美に比例して細く見せると

共に、非常に輕快の感をさへ與へる。之は一時の流行で終るべき性質のもので無いであらう。

帯が今の様に世界無比に廣くなつたことは、女が中古の服の上衣うはぎであつた褂かたぎの類と袴はかまとを脱いで、當時の下着であつた小袖こそでを上衣として着るやうになつた時、腰のまはりが見み窄すぼらしいのと臀部の露骨なのを防ぐ爲に、廣い帯を幾重にも巻いて腰を豊かにし、兼ねて其帯の結目を種種に工夫して、見る人の注意を臀部から腰へ轉ぜしめたのであつた。私は帯が細くなつて帯と人體との在來より一層よく調和した美を見ることも愉快であるが、之が爲に帯を見る部分としてのみ女の腰を眺めて居た習慣を破つて、謂ゆる細腰の美を見る人體の主要部として眺めるに到らうとすることを喜ぶのである。

私は綿入を着た女の形を好く思つて居ない。また帯の上から羽織を着て、歐洲人が「猫背をした日本の女」と云つた様な風をも好まない。綿入羽織を着るに到つては醜の

部に屬すべきものだと思つて居る。私はなるべく明治以前の女がして居たやうに、又現に歐洲の女がして居るやうに、薄着に堪へる習慣を作つて冬の女の姿態を瀟洒としたと思つて居る。出来ることなら綿入を用ひずに長襦袢の上へ袷あはせを二枚着て濟ませたいのである。

日本の女の服装は袷あはせを着る時節から少し姿が好くなり、單衣の上に夏帯を締めて素足で歩く頃に到つて、希臘精神と共通した人體美が遺憾なく發揮され、日本の冬服が動もすれば衣服を主として人體を従とする嫌のあるのを一變して、着る人自身にも、他の人にも自由と優美と爽快との感を與へるのである。私は夏の暑さに可なり惱まされるが、夏の日本服のとりどりに持つて居る輕快と美とを思ふと、一年中の嬉しい季節は矢張り夏が第一である。

私は或人から招かれて夏場所の相撲を一日觀た。東京へ來て相撲を觀るのは十五年

振である。國技館に萬以上の人がぎつしりと詰つて、力士も見物も汗になつて勝負に熱して居る光景は決して文明的なものではないが、一種の壯觀を感せずには居られない。西班牙の闘牛などの気分も之に近いものであらうと想像されるのであつた。

私は太刀山の土俵入を觀て某氏から望まれるままに次の一首を書いた。

太刀山が兩手を打てばはしきやし兩國の海涼風ぞ吹く

そして太刀は飽迄も天下の唯一人であるのは云ふまでもないこと、大錦、栃木山、源氏山などの新鋭な力士の當り難い勢を心強く思つた。併し正直に云へば相撲は私の趣味から遠いものである。なつかしくもないものである。

最初に品川停車場へ着いたのと、東京停車場へ着いたのとて、其人人の東京に對する第一印象が異つて居る。人間の種種の思想が齟齬するのも、其由來を尋ねると東京停車場へ同時に着なかつたと云ふのに起因して居る様な場合が少くないであらう。た

あいもない理由から人生の融和を缺くのが痛ましい。其れを何うすればいいか。全く融和することは困難かも知らぬが、私は誰もあらゆる方法を盡して其齟齬の距離を少くすることに力めねばならないと思ふ。其主となる方法は人人が敬愛し合ふと共に各自の理知を透徹させることである。宗教家などは愛さへあれば世の人が融和するやうに云ひ續けて來たが、理知が略ぼ平均して理解し合はねば其愛さへも危険を免れない。感情のみの愛は盲目の愛、妥協の愛、屈從の愛である。それが折に觸れて動搖するのは已むを得ない。

自分等の借家住居をして居る日本の家は餘りに自然に對して抵抗力を缺いて居る。自分等は鼠や、蚤や、蚊や、其他いろんな昆蟲やに侵入されて、其等と心ならぬ合住あひすまみをして、其れを如何ともすることが出來ないで居る。夏中私の子供等が蚤と蚊の爲にどれだけ大切な生血いきちを吸ひ取られるか知れない。蚊は蚊帳で大部分防ぐにしても、

粗末な根太と畳とを通して床下から攻め入る蚤に對してはどんなに蚤取粉なんかを用ひても無駄である。蚤の爲に幾度も目を覺して夜啼をする幼い子供等の世話に掛つて居て親達の睡眠の不足勝なのも晝の仕事にどれだけ害を與へられて居るか知れない。併し自分等のやうな位地の者が若し歐羅巴の都會に住んで居たら、六七階の頂上にある狭い屋根裏を借りて住む外はないのに、日本なればこそ門構で庭の附いた家に住むことが出来るのである。其れを思ふと雨が漏つたり、鼠や蚤に攻められたりするの少しは辛抱せねばならないであらう。

私が佛蘭西のツウルで美術商をして居るビニョレ夫人を訪ねに行つたのは、其日の午前に和田垣博士の紹介で令嬢と知り合ひになつたからで、其訪問も博士と同行したのである。私等が商賣物のピアノの三臺程も置かれて狭く見える客室へ通されて、夫人と共に話して居る時に、丁度夫人と同年配の四十前後と見える紳士が背廣を着て出て

來た。カンキナ酒が御馳走されることになつて私達の各自に杯を分たれた時、令嬢は机の抽斗から其紳士の用として特にしまつてある杯を出して來て與へた。博士とは相識と見えて談話が交された。私は客のやうでも無くまた夫人から家族らしく待遇されて居ない此男性は何者であらうと思つた。紳士はカンキナ酒を飲んでも博士や令嬢と話しても絶えず淋しい目附を變へなかつたが、其内に室外へ出て行つた。夕方になつてビニョレ夫人の家を辭した時、博士から、先刻の紳士は夫人の良人で令嬢の父である人である。同じ家に今も住んで居るが、夫人は離婚の裁判を法廷に仰ぎつつあるのである。或はもう判決があつたかも知れない。事の起りは夫人が病氣になつて居る間に、良人であつた彼人が或婦人と關係したと云ふのであると、こんな話を聞いた。

私はビニョレ夫人の凜然とした態度に敬意を拂はないでは居られなかつた。餘りに自己を滅却して居る日本婦人の多數のために、私は後悔の涙に咽んで居る其紳士を氣の毒であると云ふより先に、此夫人の賢明を紹介したのである。(一九一五年六月)

青年の自殺

境遇を離れて自己と云ふものの存在を考へられない以上、人が境遇の支配を全く受けずに存在することも考へられない。勿論人は出来るだけ境遇を改造して自己に都合の好いものになりたいと努力して居るが、境遇の壓力の方が強い場合に自己の萎縮するのは已むを得ない。後の場合に人は往々死を望み、また決然として自殺を實行するものである。

私は如何なる場合にも自殺を賛成しない。併し常に生の肯定者である人間が卒然として自殺するに就ては、それが狂人と癡人でない限り、自殺を決心するに到らねばならなかつた其人の心的経過に同情することを惜まない。

今年七月に入つて青年男女學生の自殺が新聞紙に由つて屢々傳へられ、それが世人の注意を引いた。それに就て新聞記者達の批判は異口同音に冷淡と淺薄とを示して

居る。即ち「文學や哲學に耽つた結果の厭世自殺であらう」と云ふのである、自殺が厭世の結果であることは凡ての病死者が最後に心臓麻痺で斃れるのと同じく改めて云ふまでもないことであるが、其厭世の原因を一概に文學や哲學に歸するのは臆斷も甚しい。今日の文學や哲學を少しでも研究した人ならさう云ふ概言は下されない筈である。人生を肯定し、讚美し、人間本位の能動的生活を主張するのが現代の文學及び哲學である。是等の中に自殺を懲惡するやうな要素は假にも見當らない。

自殺した青年諸氏の中に一人の第一高等學校の生徒がある。其人は優秀な資質の青年でありながら極めて貧乏な境遇に置かれて居て、或特志家から支給せられる學資の内を割いて毎月郷里の老母に送らねばならなかつた。また其人は一食參錢を限度とせねばならなかつたので、毎日三度とも人並の食物を取ることが出来なかつた。生の第一要素である食事がそれ程に悲惨であつた以上、學生に必要な其他の物質に就ても不自由がちであつたことは萬々想像せられる。其人は已むを得ず食事を廢することさへ

あつたと云ふ。私は直感する、其人が書中の哲學や文學に由つて死を決したのでなく、貧乏と云ふ現實に苛まれて人生を逃避するに到つたのであることを。私は其人の記事を読んだ時にしみじみと涙ぐまずには居られなかつた。そして私の涙には其青年を悲む涙と共に私自身の貧乏を悲む涙が混つて居た。私も現に貧乏のために屢々自殺の幻覺に迫られ、忽ち醒めては慄然として戦く一人であるからである。

私は今眼を病んで居る。細字を書くことも讀むことも非常に苦痛である。醫師の診斷に由れば過勞と營養不足との爲であると云ふ。併し私は此悪くなつた眼を虐待して、今現に華氏九十五度の酷暑の中で汗を拭きながら筆を執らねばならない。私は醫師の勸告通りに假に一ヶ月でも静養することの出来る境遇に居るのではない。

固より私は能力の許す限り勞働することを望んで居るから過去の勞働も厭ふ所でない、また體軀を勞する外に精神を勞することが人間の生活を持続し開展する爲に必要

であると信じて居るから、過度の心勞をも辭しない積りである。けれど私達のやうな勞働階級にある人間の體勞と心勞とは餘りに過度である。私達が到底背負ひ切れないまでに過度である。それは私達の生を助長するのでなくて却て私達の生を虐殺するものである。

私は世界の人類が同じ理解の下に結束し合ふ黄金時代が來ない限り、個人の勞力と報酬とが正しく比例するものとは想はない。併し私達が過勞に由つて健康を害するまでに休息なく勞働して居るのに、其れに對して社會から酬いられる所の金錢が常に不足であり、不定不安であるのは餘りに不公平である。私達の交友の間には毎月五六百枚からの原稿を書いて纔に五六千金しか収入のない人がある。如何なる種類の著述であるにせよ、毎月五六百枚の爲に費す勞力は聞くさへ空怖ろしい感がある。人間わざで無く、器械わざである。私達は其人に比較すればまだ自ら慰めねばならない。併し私も亦毎月百枚二百枚多くは三百枚の原稿を書き、四五千首の歌を撰ぶことを以てやつ

と十餘人の家族と共に覺束ない生き方をして行く境遇に居る。過勞は私一人であるが、營養不足は親も子も共通である。私達が巴里滞在中の食事は極めて廉い料理店で濟ませて居たのであるが、今私達の全家族一日分の副食物代は巴里に於ける私達の一人一度の食事に當つて居るに過ぎない。なんと云ふ惨めな日送りであらう。

私は高等學校の生徒某氏の自殺の記事と前後して文部省の某高等官が「かう云ふ厭世自殺者は出来るだけ攻撃して世の戒めにせねばならない」と云ふ意味の批評を加へて居るのを讀み、また數日の後に文部大臣一木氏が自殺青年の頻出に對して「青年の氣風の頹廢」と云ふ數語を以て評し去り、其原因を文學書に歸して居るのを讀んで、今の官僚の無情と無考察とを例ながら憎まらずに居られなかつた。私達兩親が明日にも卒然と死んだら私達の子供は皆路頭に迷ふのである。偶ま一二の子供が特志家の恩恵に由つて學生生活を續けて行くやうなことがあつても、高等學校の生徒某氏が實母を養つたやうに學資の中で他の弟妹を食はせて行かねばならないとしたら、私達の子供

もまた自殺する氣にならないとも限らない。そして時の官僚と學者と新聞記者と群衆とから「青年の頹廢」と云ふ意外な汚名を着せられて冷罵されるであらう。其れを思ふと親たる私達は子供の爲にも飽迄生きて行かねばならない。

世界の不幸と災害と罪惡との大部分は大多數の人類が貧乏であると云ふことに淵源して居る。貧乏の爲に資質の優秀な人間も愚物と伍して一生を送り、富を擁して居る爲に愚物も優秀な人間を壓伏して居る。殊に我國は法外な軍備擴張に財力の大半を消費して居ると、同じく法外な軍國主義の爲に巨額の外債を負つて居るとして、軍人と貴族と富豪と以外に國民一般が不自然な貧乏生活をして居るのであるから、私達の勞働に對して酬いられる所の極めて薄いのも怪むに足らない。どうしたら私達がこの不自然な貧乏の苦痛から脱することが出来るのであらうか。

青島攻撃に参加した陸海軍の將校に慰勞として十五萬圓の金員を贈ることが臨時議

會で可決された。將校が戰場に馳驅する勤勞に對しては平生から俸給が支拂はれ、戦時には特に其れが増額されて居る。戦歿した軍人の遺族に對する賜金は意義のあることであるが、現役に居り、若くは恩給を受けて豫備にある將校に對して巨額の慰勞金を議決することは軍人の勢力に餘儀なくされたのであらう。一方にさう云ふ無駄な出費の餘裕を示しながら、一方に一食參錢で飢を凌ぎ、往復の電車に乗つた爲に自殺前に一日の絶食をせねばならなかつたやうな高等學校の生徒があり、また私達が自身の勞働の質と艱苦とは青島攻撃に参加した將校達の其れに比して決して遜色がないと信じて居るに關らず、一ヶ月筆を執らねば私の全家族が餓死せねばならず、私自身が過勞の爲に眼が見えなくなつて居ても猶手探りに物を書かねばならぬ境遇に居たりするのを思ふと、我國の生活の亂調子と不純とを悲まらずに居られない。

かう云ふ私自身に即した實感を書くに、私が唯だ一概に貧乏を苦に病んでさもない泣言を並べるやうに思ふ人があるかも知れない。我國の習慣では蔭で貧乏を歎いて居

ても公衆の前でさう云ふことを公言するのを恥とするのであるが、私は個人が互に恥を隠して唯だ好い程な事ばかりを言ひ合つて居るやうでは、誠實の披瀝が缺けて居るのであるから、人間相互の理解も結束もむづかしいと思ふのである。

青年自殺者の中に一人の女子美術學校生徒があつた。此人に對しても新聞記者達は哲學に耽つた結果の自殺であるらしく傳へた。併し遺書の公にされたのを見ると、此人は頻に或人に對して怨む所のある口氣を洩して居る。其れは哲學に耽る様な理性を備へた人の態度とも思はれない。私の想像では、此人は互に祕密と疑惑を打明けて裨補し合ふ親友、白熱の愛の中に頼り合ふ戀人、自分の性格を理解して時時の激勵と同情とを寄せてくれる慈親、明師、それらの何れをも持たなかつた爲に、若い女性の生理的變化に伴ふ幽鬱と孤獨の煩悶とから脱れようとして身を殺すに到つたのであらう。若し私の想像通りであるなら此人の自殺もまた境遇に支配された所が多く、高等學校

生徒某氏の死は貧乏が最大原因であり、此人のは周囲の無理解が最大原因であらう。それにつけても私の思ふのは、今日の青年男女が何れに向いても權威と溫情と明智とを以て自分達青年の指導者となり、性情と境遇を理解して蒙を啓き勇氣を附けてくれる先輩師長に出合はないことである。どの社會の先輩も一身の計にのみ忙殺せられて、ゆるゆると後進と語る暇がなく、たとひ其暇があつても其等の先輩は眼前の必要から虚偽を語るに慣れて眞實を言はない。また年齢の相違と怠慢とから其思想は古くなり、或は古い思想の假面を被つて居る者もあるから、思想にも情緒にも青年と共鳴する所が缺けて居る。或女流教育家が、「今日の女學生は教師の前では表面柔順を粧うて居て、内心は少しも服して居ない、そして教師に對して本心を打明けることがない」と歎息したが、如何にも其通りである。今日は女學生もまた師長の虚偽を摸ねて居るから、成るべく柔順の假面を着て教師の機嫌を損じないやうにし、其れと同時に教師の思想が專制保守に靜止して居ることを見抜いて居るから、本心を打明けて却て

不法に壓抑せられるやうな目に逢ふことの愚を避けて居るのである。

今の青年の師長となる人達、殊に女學生を教へようとする人達は、先づ自己の固陋を破壊して自由思想の人となり、自己の倦怠疲勞を癒して活動の人とならねば、青年の信賴歸服する第一の資格を缺いたものである。其等の教育者が老婆心から舊式な訓誡を加へる程青年の心は教育者から離れて行くであらう。(一九一五年八月)

學制改革案に就て

教育調査會で菊地大麓博士等の學制改革案の通過したことは在來の學制を破壊する端緒を開いたと云ふ意味で私は嬉しく思つた。私は自分の子の一人が今年から中學に入つたので母としての實際の立場から學制に就て改善して欲しいと思ふ點が多い。此度の改革案は中學以上を卒る迄の改善が主になつて居るが、私は小學からして改善の餘地が多いやうに思つて居る。小學の一二年生の學課が餘りに平易過ぎて生徒の腦力

を徒費させ、或は生徒の興味を稀薄にし、怠屈を感じしめて居る。三年生になつて急に學課がむづかしくなり、其れが爲に生徒の元氣を沮喪させる恐れのあるのは一二年が平易過ぎるからである。片假名や平假名は大抵の子供が小學へ入る迄に悉く記憶して居るのに、其れを二年間掛つて少しづつ教へたりするのは迂濶である。一體に子供は大人オトコの知つて居る事を早く知りたがるものである。一年からもつと程度の高い物を授けて好い。それには教科書も改めねばならぬ。今頃青砥藤綱や二宮尊徳の話などを載せるのは滑稽である。

汎く實際社會に立つて活動するには中學と高等女學校の程度を高めたものを卒業して居れば用が足りる。現に三井銀行などが大學卒業生を採用せずに商業學校や中學の卒業生を採用する方針を實行して居る位であるから、今より一層完備した中學や高等女學校が成立てば其卒業生を歓迎する風潮が益々社會に行き互るであらう。菊地博士が大學卒業生でなければ賣口が悪いと見て甲乙二種の大學を置かうとせられたのは學

生に親切なやうで、却て將來の社會事情に透察の足らない意見ではないでせうか。二種の大學が出来て見れば人の榮譽心から屹度誰も程度の高い大學へ入學しようとするであらう。大學は矢張一種にして置いて、それも無用の課目を廢し、今の大學よりも程度の高い、且つ緊張したものとし、大學の數を殖して今の高等學校を其校舍に用ひるやうにしては何うであらう。そして大學には是非女學生を入學させて欲しい。また大學の公開も必ず改革案の一項目であつて欲しい。

學校は雜多の學課を授けて學生の腦力を疲らせるよりも、必要な學課を深く授ける以外に、何事にも研究の方針を示して學生の自修的興味を促す場處であつて欲しい。

歐洲の中流以上の家庭では母親が子女の教育を監督して居て、今我子が學校で何を習つて居ると云ふことを明かに知つて居るし、我子の不得手な學課には母親が學友となり教師となつて復習と研究とを一緒にして居る。我國の母親も其程度まで教育的にならねば新しい母とは云はれない。(一九一五年七月)

祭の日

今日は六月十五日、自分の住んで居る麴町區は山王神社のお祭で、大通の軒軒に提灯が吊され、兩側の人道には繪を描いた燈籠が並び、街の角には毎年ある踊屋臺が出来て居る。

女の子等の行つて居る雙葉小學は祭のために一日休暇になつたが、同じ佛蘭西風の教育をする學校でも男の子等の行つて居る曉星小學は山王神社と大分離れて居るためか、休まない。それで皆が揃つて居る朝の食卓で赤飯を取らせた。

朝の用事の片附くのを待つて、二人の女中に伴れさせて女の子等と隣とを山王様の境内まで遊びに遣つた。序に電車に乗つて青山の博覽會へ行つても好いと云つたので、其方へ廻つたのか正午になつても歸らない。二歳になるアウギユストは枕蚊帳の中でよく寝て居る。狭い家も今日は暫らくの間がらんとして珍しく静かである。

良人と二人で先に食事をして居ると、まだ子供と云ふ者を持たなかつた十年前の簡素な生活が偲ばれる。「子供がみんな巢立つて外へ出て仕舞つた某伯爵の家庭が淋しくて困つて居ると云ふが、まあ今日の様な氣持の日ばかりが續くのだらう」と良人が云ふのを遮る様に「そんな年寄の夫婦の家の事なんか云はないてお置きなさい」と云つた自分も、やはり心では同じ様な淋しさを聯想して居たのである。

良人との話は祭の事に移つて行つた。自分達は畿内に生れたので祇園祭や宇治の縣祭、住吉祭などが餘計になつかしい。併し子供等は大きくなつた後に東京の祭や節會が思ひ出されるであらう。其れにつけても、祭や節會が次第に減つて行くのは人の心を荒涼ませて好くないことである。

昔からの物を強ち保存したり復興したりする必要もないが、力めて破壊するにも及ばない。破壊す勢力で今の世に適した節會を新たに作つて欲しい。其れは昔からの慣例で、富家や貴族が主となり、藝術家が意匠して創めるべき事である。歐羅巴では二

月の謝肉祭、五月のミカレエム祭、花祭、其他季節に伴れて都も鄙も沸返る様な面白い年中行事が多い。巴里などは春から秋へ掛けて毎週どこかの街に祭があつて、踊やいろいろの行列が催される。

自分は一昨年の七月に巴里で見た獨立祭の晩の眩るしい光景を思ひ出した。セエヌ川の上の煙火が今も目の前で裂ける氣がする。

良人は昨夜着いた新聞の記事を話して、今年の巴里の花祭(五月三日)の行列に大勢の貴婦人や女詩人が澤山の美くしい花束を群衆に撒いて歩いた中に、ジュール夫人と云ふ園藝家は、一人て八千束の薔薇を撒いた。其れからロランチイと云ふ美術家は自製の花神の小さな像を一千軀配つて歩き、各鐵道の有志は汽車や汽車の食堂の無料切符を無數に配つたと云ふ。

自分は榮華物語などに煩はしい程書れた平安朝の祭や節會、饗宴や佛供養の樂を思ひ浮べて、歐洲の其れにも劣らぬ行事は我國にも昔は屢々あつたのであると思つた。

自分達の食事の濟んだ頃に、麥蕪細工の土産などを持つた女の子等が歸つて來た。青山へ廻つて模造の軍艦とかを觀たさうである。

午後一時を過ぎて光と秀が歸つて來た。此男の子等が制服を單衣に着替へて、例の様に顔や手を洗つた後で、果物を食べて、之から山王様へ出掛るのだと云つて居ると、仰山な笛と太鼓の音を先に立てて、町内の若い衆のする獅子舞が門へ入つて來た。門前の狭い路次は外の子供で充満になつて居る。おそろしい騒音が俄かに祭らしい氣分を家の内にまで漂はせた。

暫らく舞つて居る獅子を、女中に抱かれたアウギユストは泣かずに眺めて居た。

書齋へ入つて机の前に坐つた自分は、遠くなつて行く獅子舞の笛の音を聞きながら、ふと涙ぐましい氣持になつた。何だか十四五歳の頃の自分が思ひ出されるのである。自分の心は模糊として象を成さないけれど、この淡い悲哀は、其頃の自分が少女としての人並の歡喜から逸れて、冷たい家庭に厭な思ひばかりをして居た其れを恨む心で

あるらしい。

この時、二階の書齋から降りて来た良人は、女の子等を相手に、自分の書齋を覗きながら、両手にカスタネットを鳴らして踊る波斯人の真似をして居た。子供等は解らぬながら、珍らしい所作をする父を見てきやつきやつと笑つて居る。あの單純な獅子舞の笛の音が良人をもこんな氣分にさせたかと思つて、自分も思はず微笑んだ。

(一九一四年六月)

姑と嫁に就て

或會社の技師をして居る工學士某氏の妻が自分に對する苛酷を極めた處置に堪へかねて姑を刺したと云ふ故殺未遂犯が近頃公判に附せられたので、其事件の真相が諸新聞に現れた。嫁が姑を刃傷したと云ふことは稀有な事件である。無教育な階級の婦人間に於てさへ類例を見出し難いことであるのに、工學士の妻として多少の教育もあ

り、女優として立たうと決心して居た程新代の藝術に對する渴仰もある婦人が、かう云ふ慘事を引起すに至つたに就ては何か特別な理由がなくてはならない。私は諸新聞の態度が初めから一概に被告を憎んで掛らずに、力めて細かに事件の眞實を傳へようとし、其結果「東京朝日」記者のやうに特に被告に對して同情のある報道をされたことを、被告と同じ女性の一人として感謝する者である。

新聞紙の傳ふる所に由れば、姑と云ふ人は明治以前の思想を其儘に墨守して移ることを知らず、現代の教育を受けた若い嫁の心理に大した同感も無く、却て斷えず反感を持つて對し、二言目には家風を楯に取り、自分の舊式な思想を無上の權威として嫁の個性を蹂躪し壓倒することを何とも思はず、聞き苦しい干涉と邪推と、惡罵と、あてこすりとを以て嫁を苛めて悔いぬやうな、世に謂ふ姑根性を可成多く備へた婦人であるらしい。私は幼い時から私の郷里などにさう云ふ無智な姑の少くない事を見聞して居り、また一般に溫厚な嫁程さう云ふ姑の下にあつて人の知らない多大の苦痛を

忍んで居ることを知つて居るので、姑に對する新聞紙の報道を誇張だとは思はない。また妻と云ふ人は新聞紙に由れば普通の教育もあり、常識もあり、良人との仲も睦まじく、所帯持も好く、快潤ではないが優しい中に熱烈な所のある婦人で、藝術上の希望を満たしたい爲に女優として立つに至つたのも良人との相談の上であつて、夫婦の間に決して其れが突飛な問題でもお轉婆な行爲でもなかつたのである。これは今日の女子教育の程度から見ても工學士の妻として恥しからぬ婦人であることは誰も同意するであらう。普通ならば學士の妻となつたことに甘んじて尋常な一生を送る若い婦人が多い世の中に、更に物議の多い女優となつて新しい藝術に何程かの貢獻をしようとする熱心と勇氣とを思ふと、寧ろ多數の學士の妻の中にあつて得易からぬ健氣な婦人の一人であると思つてもよい。

若い夫婦は良人の任地である横濱に住み、老父母達は神戸に住んで居たが、姑はをりをり夫婦の家に來て滞在しながら良人の留守に嫁に小言を云ひ、良人に對しても嫁に

就て讒訴とも見るべきことを言ふのであつた。其れに就て若い妻は日本の一般の女性が姑に捧げる限りのあらゆる忍従の態度を取つて、少しも其れに反抗する言動を示さなかつた。新舊思想の過度期に生れたあはれな若い妻は、姑の無情非理を知りつつ出來るだけ忍従の態度を取る外に賢い孝養の法がなかつた。

ここに私の遺憾に思ふのは——寧ろ攻撃したく思ふのは——其良人たる工學士某氏の思慮の足りないことである。なぜに一人前の教育ある紳士が其母の舊思想を説破し、其苛酷な干渉を諫止して、夫婦の間の生活は専ら夫婦の間で決すべきものであることを宣明しなかつたのであらう。母を尊敬し併せて妻を愛重する文明男子が此際に取るべき手段は、誠意ある諫諍を敢てして、母を時代錯誤から救ひ出し、現代に適した賢い母たり新しい母たらしめる外に無いではないか。子としても良人としても確かな且つ周到な思慮を缺いて甚だ煮え切らぬ態度を取つて居た爲に、母の恥を世に曝し、妻を罪人たらしめ、自分自身を不幸に導くやうな悲惨な結果になつてしまつた。

私は良人たる人さへ首鼠兩端でなかつたら、この悲劇の運命は多分避け得られたのではないかと思つて返すがへすも惜まれるのである。

さて嫁が姑を刺すと云ふ悲劇の突發した時には姑が夫婦の家に滞在して居た。其れは良人の不同意に拘らず家風に合はぬ嫁は姑の權威で離縁させると云つて其離縁を實行する爲にわざわざ神戸から出掛けて來たのであつた。そして良人の留守に姑は散々の惡體を吐いて亂暴にも肺を病んで居る嫁をいびり出さうとした。恐ろしい權幕で今から直ぐに出て行けと云ひ放つた。今日まで如何なる難題にも、邪推にも、惡罵にも、あてこすりにも十二分に堪へて居た溫良な嫁も、むざむざ良人との愛を割かれる此不法と苛酷に對して、思はず自製の繩を逸してかッ、と逆上した。たとひ嫁の血族に精神病の系統のあることが後に公判廷で立證されたにしても、姑の不法な言ひがかりが專擅苛酷な夫婦の離別に及ばなかつたなら猶此逆上はしなかつたであらう。また或は無情な離別を強ひられたにしても、嫁の體質が平生の生理状態であつたなら恐らく猶此

逆上はしなかつたであらう。併し不幸にも若い嫁は病身である上に月經時であつた。逆上すると同時に偶ま手近にあつた刃物を取つて姑に投げ附けた。積極的に斬らうとするのでなく、勿論殺意があるのでなく、手當り次第に投げ附けた。其れは猛烈なヒステリーの發作であつた。姑は微かなかすり疵を負つて逃げ出した。かうして意外な悲劇が突發し、嫁が姑を刺したと云ふ稀有な故殺未遂犯が成り立つた。

ヒステリーは今日までの所、多數の婦人の或時期（月經時、妊娠時、分娩後、子宮病時）や或境遇（久しい間の獨身、異常な災厄）に伴ふ共通の發作症である。其れに強烈なものと微弱なものがあり、又遺傳から來るものと特發するものとあるが、其れが或事を誘因として遽かに迫つて來る時には、人は意識の統一を失つて自分で自分が制し切れなくなるものである。私は自身に精神病者の血を引いて居るし、父が卒中で斃れた程の大酒家であつたので、自然に病的な素質を持つて居て、或時期に往往はげしいヒステリーに襲はれることがあるから、其若い妻が逆上して刃物を投げ附けたと云ふ心理を

十分に想像することが出来るのである。投げた物が偶々及物であつた爲に大それた刃傷沙汰になつたが、ヒステリーの不可抗力に襲はれた其時の気分は、何でもいいから手當り次第に投げ散して鬱積した心の蒸汽を狂的に洩さずには居られないのである。そして其不可抗力に襲はれて無茶苦茶なことをしてしまつた後の甚しい悔恨と不快さは之を経験しない人に到底理解の出来相にないことである。意識の自制を失つた際は云へ、姑に刃物を投げ附けて負傷させたやうな結果を作つたのであるから、其瞬間の後に自己に返つた若い妻が教育ある婦人だけに其悔恨が心を噛んだことも異常であつたに違ひない。法廷に於て被告が誠心誠意懺悔の涙に咽んだと云ふのは同情されることである。

其動機に情狀の酌量すべき所があつても、其事實が法文に觸れて居るのであるから犯罪人として處刑されるのは已むを得ない。殊に在來の道德や習慣を其不用な部分までも背景にして居る日本の法律では、嫁が姑を刺したと云ふ表面の大それた事實を重

く見るので情狀酌量の餘地がない。其れて此犯罪は八年の懲役に處せられ、執行猶豫の沙汰も無かつたが、宣告の際に物優しい判事は獄則を恪守して刑期の半を過したなら假出獄の恩典に浴することも出来ると云ふことを告げたと云ふことである。私は此刑罰の裁量が妥當であるか何うかを知らない。兎に角かうして某工學士一家の傷ましい悲劇は一段落が附かうとして居るのである。併し私は此事件を切掛きっかにして更にいろいろの感想が胸に浮ぶ。

同じ悲劇の種は、姑と嫁のある日本の家庭の大多數に伏在して居る。姑が嫁を愛すると云ふ様な事は昔の清少納言も珍しい物の中に引いて居る通り寧ろ例外であつて、「あなたは善い姑をお持ちになつてお仕合せです」と嫁の友人から祝を述べる程のことである。固より姑根性には種種いづくあつて某工學士の母の實際は何うであるか知らないが、最も極端な例に引かれる残忍な姑さへ決して世間に珍しくはないのであるから、

其れ以外の、或は悪性、或は不良な程度の姑は無數に散在して居る。官吏や被傭人となつて他郷に生活して居る若夫婦の中には父母と別居して居る者が多く、其等は直接に姑の干渉を受けないであらうが、併し某工學士夫婦のやうに横濱と神戸とに別居して居てすら前述の様な慘事を引起したのであるから、如何に遠く離れて住んで居ても聰明な愛情を缺いた姑に對する嫁の氣兼苦勞は多少に拘らず附帶して居るのである。まして姑と一所に定住して居る大多數の嫁が其等の姑の下に或は干渉され、或は苛められ、或は意地悪く一分だめしに精神的に虐殺されつつあるのは言ふまでもない。

私は自分の息子のやうに嫁を愛し、或は蔭に廻つて嫁を辯護する程の美質を持つた理想的の姑が甚だ稀に世にあることを認めるが、其れは勿論尊敬すべき姑である。併し謂ゆる姑根性を脱しない大多數の姑達に就て、私は一概に憎惡のみを以て對しようとは思はない。之は私が姑と云ふ者を持たない境遇に居て、姑に對する氣兼苦勞の實感を經驗しないからでもあらうが、私は憎惡の外に氣の毒などと思ふ感が附隨して居

る。なぜなら彼等の大多數の姑達は一方には教へられざる婦人であり、一方には老後の索寞、月經閉鎖期前後の悲哀、其他種種の事情から精神の平衡を缺き、若しくはヒステリー症に罹つて居る婦人だからである。

數年前に私は老人教育の必要であることを述べた。日本の教育と云ふ意味が青年教育ばかりに偏して居るので、青年の思想はどしどし前へ進んで行くのに、老人は一度若い時に教育されたりであるから其思想は過去の儘に乾干びて居る。社會の要部が老人と青年とて成立つものである以上、老人と青年との意志が疏通しなければ社會は順調に進歩しない譯である。年齢の差などがあつて少しは疏通しにくい部分があるのは免れないにしても、青年と共に現代の思想に浸ることを怠りさへしなければ、すべての老人が青年の思想を大部分理解することが出來て、同じ基調の上に呼應し協力して人生の音楽が合奏されるに到るであらう。然るに日本の老人の多數は私の此理想と全く背馳して居る。殊に老婦人の階級は其若い時に教育らしい教育も受けて居ない人

が多く、男子側の老人でさへ内外の新書に親むことは稀なのであるから、其等の老婦人達が現代に就て精神的に何物も教へられて居ないのと言ふ迄もない。それで過去の思想に停滯して居る老婦人は萬事を過去の標準で是非し、若い嫁のする事が凡て氣に入らない所から、一一其れに世話を焼きたくなる。世話や忠告の程度に留つて居ればよいが、親切が過ぎては干渉となり、加之に在來の姑と嫁とは殆ど専制時代の君臣の關係であることが正しいとせられて居るから、干渉が一轉すれば強制となり威壓とならずには置かない。

其れに老婦人の中には早く良人に別れたり、又良人があつても愛情が亡くなつて居たりして心寂しい生活を送つて居る人がある。さう云ふ婦人は子供の愛だけがせめての慰安であり生活の力であつたのに、子供に嫁が出来れば嫁は子供に對する愛の競争者である。そして結婚以後の子供の心理が母に對して幾分疎縁になるのも、また其れに就て母が孤獨の寂しさと嫁に對する一種の嫉妬とを感じるのも自然の人情であらう

と想はれる。

また月經閉鎖期前後の婦人の心理と云ふものがヒステリイ的にいろいろの症狀を呈するのは顯著な事實であつて、さう云ふ症狀に罹つた老婦人は嫁のする事なら針程の事も憎くなつたり、嫁が好意でした事も反對に僻んで解釋したり、酒精中毒者が杯を放さないやうに、又してはあくどく嫁苛りよめがらをして嫁の苦痛を樂まずには居られないのである。さう云ふ老婦人は子供を多く生まないやうにと云ふ口實の下に、しばしば若夫婦と室を同じくして臥し閨房を監視する殘忍をさへ敢てすると云ふことである。

かう云ふ種種の理由の下に悪性になり、不良になつて居る多數の姑根性と云ふものを私は一概に憎むことが出来ない。たとひ姑根性は憎んでも、かう云ふ後天的理由で畸人化され病人化された姑其人は寧ろ氣の毒に感ぜられる。

讀書欲の全く缺けて居る多數の老婦人達が今更他の勧めに従つて無爲の時間を多少

でも新書の研究に善用しようとは考へられない。併し老婦人達を在來の姑根性から脱して明るく快濶な性情の人と改造するには現代の思想を何かの方法で理解させることが必要である。若い男女を教育する設備は幾らもあるが、専ら老婦人を教育する會合はまだ何處にも起つて居ない。老婦人の多く集る諸種の會合はあつても、其れは凡て物見遊山の變形で、老婦人同志の奢侈と自慢の競進場たるに過ぎない。多數の老婦人が寺院や教會へ集ることがあつても、既成宗教は最早彼等に現代を教へる場所ではない。僧侶や牧師は非現代的な迷信の鼓吹者であり、そして最も彼等老婦人に受のよい僧侶や牧師は一種の幫間に墮落して居る。そして其等の老婦人の多數は寺院を嫁の惡口の交換所とし、嫁に食べさせる物を吝ちんで蓄ためた金を寄附して、早晚滅亡する運命を持つて居る兩本願寺のやうな迷信の府を愚かにも支持しようとするに過ぎない。

私は何とかして老婦人の思想を現代的に近づける方法を識者に工夫して欲しい。若し現代の思想に對し少しづつでも理解が出来たら、多數の老婦人は嫁よめ苛いびりに心を勞す

る様な時代遅れの生活に甘んじまい。歐米の老婦人達が若い婦人と協力して諸種の社會事業や婦人問題に努力するやうに、日本の老婦人も何かの有用な事業に活動しようとするかも知れない。活動は人を若返らせる回春藥の最上の物である。さうなれば境遇から得た孤獨の悲哀や、僻みや、老婦人の生理的變化から得た病的心理なども大に減少され緩和されるであらう。

併し之は私の空想かも知れない。政界に元老と云ふ物があつて、精神も體質も變兆を來して居ながら、老人の親切から政府當局者の施設に干渉して却て國民を迷惑がらせて居る。そして元老の頭と云ふものは到底國民の自由思想と一致する見込のないものである。家庭に於ける現在の姑と若夫婦との思想も元老と國民との其れのやうに全く相容れないものかも知れない。

現在の姑達に就いて私の考は右の様に希望と悲觀と半して居るが、併し未來の姑に

就いては全く新しい紀元の開かれることを期待して居る。今日の教育ある若い妻は其程度に差があつても、概して幾分づつか皆新しい妻である。私は出来るだけ自治獨立の生活を送らうとして居ると共に、他の自治獨立の生活をも尊重したいと思つて居る。結婚して一家を營むに至つた我子夫婦は既に分封した自治獨立の一團であるから、私は全然その生活に干渉したくない。在來の父母舅姑は我子夫婦から財養し孝養されることを望んだのであるが、私は我子が獨立し得る迄の教育には飽迄も力を竭す覺悟で居る代りに、我子から其報償を得ようとは毛頭考へて居ない。まだ私は家系、家風などと云ふ物も少しも尊重すべき物と思つて居ないのであるから、子供等が何處へ行つて自治の生活を始めても其れを祝福する外に何の註文もない。獨立するに至つた我子には絶對に干渉しない積りであるから親の名を以て威壓がましいことをしないのは勿論である。私は今から幼い子供達に各自の意見を親の前で大膽に述べる習慣を附けて居る。其れは私と子供達との思想が他日相反する時があつても互に氣兼ねずに研究し合

つて理解することの出来るやうにと思ふからである。夫婦、親子、朋友の愛も初めの中は感情一偏の愛であるが、少し年齢が長けて行つた後に誠實と知性との理解が伴はない愛は危い。感情と知性と誠實がすつきり透き徹るやうに融け合へば夫婦親子は勿論、我子の嫁とも一切の他人とも愛し得られるものであらうと私は思つて居る。既に新しい妻である私は他日かう云ふ思想の上に立つて新しい姑ともなる積りである。併し我子夫婦に對するかう云ふ意味の生活は最早母と子、姑と嫁と云ふ關係でなくて、年齢の違つた一種特別の親友と云ふ關係に近いであらう。親友の間には威壓も、屈従も、僻みも、排擠も無い。そして世には思想の合つた親友も相反した親友もあり得る。また快濶な競争の上に成立つ親友もあり得る。私は命の限り、はた天分の盡きない限り、他人とするやうに我子夫婦とも愛と誠實と思想との快濶な競争を續けたいと考へて居る。(一九一五年八月)

颯風

八月十三日。

昨夜は夜通し蒸暑くて寝苦しかつた。夕刊の新聞に颯風が東京をも襲ふ筈だと書いてあつたが、夜の十時頃から果してそれらしい風が吹き出した。併し雨はまだ小降であつた。蚊遣線香が無くなつたので十一時で筆を止めて蚊帳の中に入つたが、寝苦しいままに何時しかうとうとすると、アウギユストが啼いたので目が覺めた、もう夜明である。白んだ戸の隙間から吹き込む風で蚊帳が凄じい程煽られて居る。次の室から起きて来た二人の女の兒が戸の間から庭を覗いてコスモスもデアリヤも折れて仕舞つたと言つて居る。劇しい風雨の音が山中で聽いて居るやうである。

颯風と云ふ新語が面白い。立秋の日も數日前に過ぎたのであるから、從來の慣用語

で云へば此吹降は野分である。野分には俳諧や歌の味はあるが科學の味がない。勿論「野分の又の日こそ甚じう哀れなれ」と清少納言が書いた様な平安朝の奥ゆかしい趣味は今の人にも傳はつて居るから、野分と云ふ雅びた語の面白味を感じないことは無いが、それでは此吹降に就ての自分達の實感の全部を表はすことが不足である。近代の生活には科學が多く背景になつて居る「呂宋を経て紀伊の南岸に上陸し、日本の中部を横断して日本海に出て、更に朝鮮に上陸す」と氣象臺から電報で警戒せられる暴風雨は、どうしても「颯風」と云ふ新しい學語で表はさなければ自分達に満足が出来ないのである。

清少納言は野分の記事の中に萩や女郎花の吹き倒されたのを傷ましがつて居るが、デアリヤやコスモスの吹き倒される哀れさは知らなかつた。おなじ草花でも彼と是とは感じが異ふ。今の人は歴史的な萩や女郎花の趣も知つて居る上に、舶載の花の新味

も知つて居るのであるから、今の颯風は昔の野分に比べて趣味の點から云つても内容が複雑になつて居る。新しい詩人は颯風を歌つて屹度歌や俳諧にある野分以上の面白い新篇を出すであらう。文明と云ふものは前代の文明の中から今日にも役に立つ純粹な美點だけを傳へて、其上に今日の生活が生んだ新しい美點を加へようとするので、自然、前代の用語では現代の文明が盛り切れなくなつて、是非とも新しい用語や新しい形式が必要になる。それを覺らない人は不知不識現代の生活から孤立して、偏したり、僻んだり、なんでも新しい世態に難癖なんくせを附けたりする保守氣質の人になつて仕舞ふ。忠孝道德や賢母良妻主義の教育やて押通さうとする人などが矢張それである。忠孝も賢母良妻も其必要なことは今の人に取つて解り切つたことである。併し今人はそのみでは生活が出来ない、其上に世界の文明と呼吸いきの合ふいろんな思想を内容とした生活をして居るから、この現代生活の律動を象徴する標語として忠孝や賢母良妻を應用しようとするのは非常に不十分なのである。

自分はこんな事を考へながら顔を洗つて、朝の食事を子供等と一所に済ませた。例の様に麵包と珈琲だけで朝の食事を別に座敷で済ませた良人は、戸が開けられないので電燈を点けた儘十種に近い新聞を讀んで居る。其側へ行つて自分も二三の新聞を讀んだ。歐洲には今戦争と云ふ怖しい颯風が吹いて居る。其れが東洋にも波及しやうとして居る。自分は平生戦争を忌はしく思つて居る一人であるけれど、今度の戦争は之が最後の戦争となる程敵も味方も手疵を負つて、世界を震慄させ、目を覺させて、野蠻な武力の競争を永遠に廢絶する土臺となる爲に、一時出来るだけ大戦争の開かれることを望んで居る。今日の新聞にある電報では獨逸の大軍が佛蘭西と白耳義の國境へ集中され、カイセル自身が國境戰の聲援に出馬したやうである。リエイジュの一敗位に懲りる様な獨逸ではないから、英佛の聯合軍を相手に激しい大會戦が行はれるであらう。新聞の豫測のやうに佛軍が必ず強いとも限らないから、互に一勝一敗は免れま

い、一度に運命の決することは無いであらう。

良人も自分も佛蘭西最負であるから、佛蘭西が戦争に對して上下とも整然たる秩序を保つて居ると云ふ電報を読んだ時は嬉しかつた。それから少時良人と巴里の今日此頃をいろいろ想像して話し合つた。オテル・ド・ギロンギロンの製作室で、ロマン翁は平氣でモデルを相手に下圖を試みて居るであらう。詩人ゼルアラン翁はサン・クルウの家で新詩集「高き焰」の校正をして居るであらう。自働車の音が厭だと云つてゼルサイユの郊外へ隠居したアナトオル・フランス翁と、此春その新劇「忍冬」を巴里で十日間上場して不評に終つた舉句一時大患に罹り、近く新劇「鶏頭」を巴里への面當に羅馬、ミラノ、ゼノア、フィレンチエの四箇所で同時に上場しようとして居たのに、戦争で當分伊太利へ歸られなくなつたマンヌンチヨとは厭な顔をして居るであらう。オペラも芝居も休まずに居るであらうか。ベルンナイムの店で未來派の畫家が壯んな戦争畫の會を開

いて居るかも知れない。こんな事を良人が云つたので、自分も、今頃若し巴里に居たら戦争の事なんか忘れて、リュクサンブールの美術館でロマン翁の作の「鼻の缺けた人」の首でも恍惚と眺めて居るかも知れないと思つた。

昨日までは彼方の窓下や此方の室の隅へ日を避けて、濡手拭て汗を拭き拭き筆を執つて居たが、今日は涼しい代りに何の室も戸が開けられない。雨風の音を聴きながら電燈の附いた書齋で之を書いて居ると、なんだか海の底に坐つて居る氣がする。電燈が突然消えた。いくら待つても點かない。東京の電燈が夏の間だけ晝も點くのは旋風器に送電するからである。今日は涼しくて旋風器の用がないから會社で送電を止めたのであらう。良人は蠟燭を點けて二階へ何か讀みに行つた。肴屋が來たと咲が知らせて來た。もう正午前になつたのである。自分は戸を細目に開けて其明りて之を書き終つた。(一九一四年)

文部大臣高田早苗氏

高田早苗氏が大隈内閣の有力な一員となられた爲に、文部省自ら教育界の宿弊である劃一主義を打破する實行者の地位に立たうとして居ることは時勢の急轉を示すもので、誠に喜ばしい現象だと思ひます。自由主義の教育を要求することは單に識者階級の問題でなくて、最早一般の輿論になつて居るのですから、其輿論を代表して立つた高田氏に向つて少數の保守主義者が現状維持説を唱へて反對しても、議論の上では恐れるに足らないと思ひますが、人のために職を設ける日本朝野の弊は教育界にも根を張つて居るのですから、不急な學科を省いて有用な學科の程度を高めたり、學年を短縮して授業の方法を緊張したりするために學校内の無能者と冗員とを淘汰するやうな結果でも豫想されるなら、教育界の寄生蟲である其等の無能者と冗員とは多數を恃んで高田氏の改革案に反抗し、それがためには政界に於て同じく無能者と冗員との集團

である貴族院や樞密院の勢力を借りて不法にも天上から文部省の新施設を壓迫し妨害しようとするでせう。高田氏が果して其試練に堪へて輿論を實行するだけの果斷があるかどうかは私に解らないことですが、改進黨時代から今日まで大隈氏幕下の一智囊であり、久しく早稻田大學の經營者として民間の教育に従事せられた經歷と實力とから云つて、從來の文部大臣のやうな伴食でなく、閣僚中にも世間へ對しても重きをなして居る氏のことですから、此機會を逸せずには必ず萬難を排して責任を實行する覺悟を持つて居られるでせう。世間も其れを専ら期待して居るやうに見受けられます。今は一に高田氏の果斷が何より必要な時機になりました。私は日獨開戦、選舉干渉、増師案の通過、其等のことが大隈内閣と其輿黨とが今日までに爲した重大な失態であると考へますが、併し明治初年以來の悪政である官尊主義、劃一主義の教育制度を高田氏に由つて打破することが出来るものなら、それが永久日本民族の上に無限の幸福を齎すものであることを想ふと、他の一時的な失態——取返しのでなく失態は之が

爲に償つて餘りあるやうに考へます。さうなれば大隈内閣の存在にも初めて意義が生じ、頽齡の大隈氏にも其終りを善美ならしめることが出来るてせう。(一九一五年十月)

小學教育の改造

私は大學を改造することにも賛成ですが、教育の基礎は小學にあると考へる所から小學教育の解放を一層急務だと感じ、殊に劃一主義の弊は今日の小學に於て最も甚しいと感じて居ります。私は現に數人の子供を三箇所の小學に通はせて居るため、何かにつけて自分の子供が文部省の教育主義に由つて其順當な發達を妨げられて居ると云ふ感を切實に經驗して居ります。

一般の小學では優能、平能、低能の區別なく、同じ教室で同じ教師が同じ程度の學課を授けて居ます。一つの教室に十人や十五人の優能兒がまじつて居ても、教師は多數の平能兒以下を標準として教へて行かねばなりませんから、優能兒をして其等の足

弱と並んで歩いて常に退屈を感じさせ、退屈に由つて兒童の心身を非常に疲勞させる結果になつて居ります。其内に優能兒であつた者も學業に刺戟を失ひ、競争心を減じて研究を懈り、終には平能兒の位置に墮落してしまひます。之は人物經濟から見て非常な損失を日本民族が招いて居る譯になります。

また小學教師の人格が概して劣つて居ります。私は初めから劣弱な素質の人のみが小學教師を志願するものだとは思ひません、大概是高等教育を受ける學資が無いと云ふやうな境遇の青年が師範學校へ入學するのです。それで若い小學教師の多數と云ふ者は職に就いて二三年間は師範學校時代の活氣と、誠實と、理想とを以て子女の教育に眞剣になつて居ます。さう云ふ若い教師に教へられる教室は、優能、平能、低能が入りまじつて居ても、教師の注意と斟酌とが行き亘つて居るので、優能兒も退屈を感じずに勉強し、平能兒以下も優能兒に刺戟せられて意外の進歩を示す場合があります。併し其等の學童が次の學年になつて他の教室へ行くと、其處には前と異つた教師

が居て若い教師が一年間眞剣に教へ込んで置いた良い習慣を滅茶苦茶に破壊してしまひます。後の教師はもうすつかり若い元氣をも、誠實をも、理想をも失つて、教授細目と小學の雜務とを形式的に繰返して行く一個の器械になつて居ます。教師自身の個性を以て一一の生徒の異つた個性を適宜に陶冶しようとするのでなくて、教師自身も小學制度に屬した物質である如く、生徒をも一樣に小學制度に屬した物質のやうにして取扱つて居ます。さう云ふのが勤勉な教師として校長に重用せられるのですから、小學教師の多數は就職後四五年もすれば太抵其れに墮落して潑刺たる人間性を麻痺させてしまひます。勿論教師の間には内心で小學教育の現状に憤慨して居る人達もあつて、殊に若い小學教師は大抵文部省の教育主義に反對の思想を持つて居る人達ですけれども、多勢に無勢で已むを得ず隠忍して居る有様だと云ふことです。(一九一五年十月)

小學に於ける課業の淘汰

また他の中高等程度の學校に於ても同じことですが、無用若くは有害と思はれる學科が小學教育にも混つて居ります。甚しいのは都會の小學で手工を授けたりすることです。其れが爲に教師は授業以外の時間にいろいろの手藝を稽古に通つたりせねばなりません。小學は幼稚園のやうに遊戯させる處でもなく、また小學で教へた程度の手藝が何の工賃生活の資料になるのでなく、唯だ教師と生徒に時間と腦力を徒費させ、父兄に材料費を授業料以外に支出させると云ふに過ぎないのですから全く無用有害な課業です。其れを今では、甲の小學が手工を教へると乙の小學も其れを教へねば世間體が悪いやうに思ひ、さうして小學校長が上長の官公吏と父兄とに勤勉周到を自慢する一材料にして居るのです。

私は小學の課目に必修的なものと任意的なものとの二つあつて、前者は人間生活の基礎となるものであるから力めて教へる必要があり、後者は其生徒の好惡と得手不得手とに由つて取捨せしめる程度にして置けばよいと考へて居ます。例へば修身、數學、

國語、理科、歴史、地理と云ふやうな學科は前者に屬すものとして、今よりもつと程度を高くしてよいものもあり、徹底的に教へてよいものもあり、之には奨励のために採點の必要もあると思ひます。歴史に於て神々が天上から降られたと云ふやうな、高等歴史と聯絡の斷えた虚偽を教へるのは好ましくありません。神話として美的教養のために教へるのは結構ですが、歴史は歴史として今の學界の知識と協同して出来る限り正確なことを教へねば人を誤ります。

それから習字、體操、唱歌、圖畫、手工と云ふやうな學科は前者に比べると必修的の性質を持つて居らず、或物は特別の天分に由るものであつて、圖畫などは下手な者には何うしても描けないし、或物は上手であるに越したことはないが、下手でも人間生活に差支ないものがあり、また今は下手でも大人になつて上達すべきものもあつて、體操、習字、唱歌、手工などは下手な者にそれを強要しても徒勞に終る性質のものです。然るに今日の小學では是等と前者とに寛嚴の手加減をせず、どちらも同じ

割合で採點して居ります。それで數學、國語、歴史、地理などが如何程優れて居ても、體操や唱歌や習字が下手であるために、どの學科も平均して普通に出来るやうな生徒の爲に首席を占められると云ふ不都合な結果になつて居ります。教師も父兄も此不都合に氣附いては居るのですが、小學制度が此不都合を敢行させるのですから致方がありません。之がために必修的な學科に對して天分を持つた優能兒がどれだけ餘計な苦勞をして居ることとせう。同じ必修的學科である國語の中でも私は讀解を主要とし、作文と書取とは少し軽く見るべきものだと思ふのですが、今の小學では同等に見て採點して居ります。

私は此五六年間小學に長男と二男を通はせて、いろいろ小學教育の宿弊を實驗しましたが、中にも二人ながら三番から十番までの間を常に上下して居て、其れ以上の席順に進めなかつたのは、専ら習字、圖畫、唱歌、體操などの點が優秀でないためでした。子供も小學四五年生になると學業の性質に輕重のあることに氣が付き出しますか

ら、重要な學科で常に良い點を取りながら其他の學科で他の同窓の下風に立つことを可成深く残念に思ふらしいのを見て、私は席順などは氣にしくなくてもよい、重立つた學科さへ出来ればそれでよいではないかと云つて慰めて居る次第ですが、併し小學で奨励のために席順を附ける以上、席順なんか氣にしないでよいと親が云ふのは矛盾です、虚偽です。

また私は小學の教科書に就ても不備な點を幾つも感じて居ります。都會の或階級の子供は大抵小學へ入學するまでに片假名を知つて居ります。其等の少年少女にお伽噺の本と云ふものが如何に廣く讀まれて居るかと云ふことを教師が考へないのは迂闊です。片假名と平假名とを一二年も掛つて教へるなどは凡ての子供を低能兒扱ひにした教育法でありませんか。また讀本の中に義務の觀念が多く書いてあつて、個人の權利を自尊する思想が少しも示されて居りませんのなどは立憲國の基礎教育から魂を抜き去つた觀があります。(一九一五年十月)

女教師の未能力

私は小學教育に従事する女教師の殖えて行くことを婦人界のためには喜ぶ者ですけれど、教育の方から考へると、現在の女教師の人格程度では概して面白くない結果になつて居はしないかと感はれます。同じ男の生徒でも男の教師の受持の教室と女教師の受持の教室とで學力にも氣象にも非常に差があると云ふことは掩ひ難い事實です。都下の或小學で百人の生徒から優能兒と平能兒及び低能兒とを區別して、優能兒の教室は女教師に擔當させ、他の教室は男の教師に擔當せよとしたが、一年の後になつて優能兒の組は優等の成績を示す者が殆ど無く、一般に氣力の弱い、學力の平凡な者が多くなり、幾人かの落第生をさへ出すに至り、之に反して平能兒等の組は概して良成績を示し、五十人の内から十六人の優等生を出すやうな結果になつた事實があります。之から推して私は今の様に精練せられない女教師から教へられる生徒は不幸だと想ふ

のです。

それは婦人が教師に適しないと云ふのでなくて、現在の女教師達が男の教師だけの教育を受けて居ないために、生徒に向つて同じ事を教へながらも、其教授に自分の人格から發する威嚴が缺け、一の物を一と教へるだけで一を透して十の物を暗示するだけの知識と才氣とに乏しく、細かい所に氣が附いても太切な大體の要領を掴む氣轉が利かなかつたりして、生徒を敬服させることも、激勵することも出来ないからだと思ひます。男の生徒を教へてすら然うなのですから、まして久しい習慣から學問的能力の鈍つて居る女の生徒が概ね女教師の手で教育されて居ることは、教育されないよりも増しだと云ふ位の消極的な効果しか舉らないことだらうと思はれます。今日の小學に女教師を採用して居るのは男の教師に比して俸給が廉くて濟むと云ふことが唯一の理由であつて、其他に教育の上の有利な理由は一つも無いのだと云ふことです。私は婦人の活動が教育界に及ぶことを賛成する者ですが、今日の女教師の實力では却

て太切な子女の開發を妨げるものだと考へますから、出来るだけ女教師自身の教育を男子以上に高めて欲しいと思ひます。男子以上に高めるやうにしてそれで漸く男子の教師と對等に役立つことが出来る位のものでせう。

此女教師の問題は高等女學校に就ても同様のことを私は考へて居ります。中學卒業生と同じ年數を費しながら高等女學校卒業生の學力が到底彼れに及ばないのは、固よりいろいろの理由のあることですが、多くの女教師に教へられると云ふことも主要な理由の一つであつて、同じ學科でも男の教師が教へると否とて生徒の理解に深淺鋭鈍の差が著しく見えます。私は女子にも徹底的な教育を施すべきものだと思つて居る立場から、或二三の學科を除いた外は男女混合で教へる中學などが出来て、優能な女子だけが男の生徒と對等に教育されるやうなことも行つて欲しいと考へて居ます。

高田氏は比較的新しい思想を持つて居られる文部大臣のやうに見受けますから、私は國民教育の根本である小學から初めて自由と實功とに富んだ制度に改めて頂きたい

と思ふ一端を茲に述べました。文部大臣は國民教育の大體の方針を示すだけで、教育の實際的方面は各學校の個別的自治的能力に任せるやうにしなければなりません。すべて此主義で大膽に改革して頂きたいと思ひます。(一九一五年十月)

姑と嫁に就て(再び)

本誌の此號に「與謝野品子氏に呈す」と云ふ一文が載つて居ります。それは前號の本誌で私が某工學士と云つた中根氏が私に寄せられた私信ですが、私の所感の中にある事實の相違を訂正するのに最も便宜だと思ひますから特に本誌に載せることにしました。私のあの文章を書いた眞意が某學士の家に起つた不祥事を批評するのが主でなく、其事件を新聞紙上で知つて偶々私が平生日本の姑と嫁とに就て考へて居る所を述べる機會を得たのであつたことは、中根氏も本誌の讀者も認められることであらうと思ひます、併し私の文章の中に、私が不精確な新聞記事と、更に其記事を読んで十數

日を経た後の臆氣な記憶とに由つて書いたことが、中根氏の指摘されたやうに幾個所も事實の細個條と相違して居て、わざと私が中根氏の母上を曲解し矯誣したやうな結果になつて居ることは、私の深く愧ぢる所であり、併せて幾重にもお詫び致す次第です。私はまた中根氏の私信が少しも激昂の態なく極めて溫健に書かれて居るのを讀んで、私の想像して居た某工學士とは非常に相違した性格の紳士であることを尊敬します。此私信に比べると、私の前號の文章には、日本の姑根性に對する憤りが一時に勃發した所から幼稚な激昂と誇張とが可なり多く混つて居ました。それに就て私は赤面する外ありません。此私信に由て中根氏の母上が「謂ゆる殘忍な姑根性を悉く備へた婦人」でないことを知ることが得ましたのは私の誤解を正す上に有力でしたけれど、私は猶、中根氏の私信に現れた母上の場合を透しても、日本の大多數の姑が聰明でないのと、老年の病的心理とから、若い嫁の心理を味解しかねて、氣の毒にも雙方の生活を陰鬱悲慘にして居る事實が窺はれるのであつて、日本の生活に姑と嫁との問題は

容易に解決し難い暗黒面であることがしみじみと思はれます。

私の前號の文章が姑の批難に傾いて居たのは、感想の動機が然らしめたので、決して片手落てはありません。若い女の多數が私始めまだ驚くべき程無智であり、缺點だらけであることは私が多年論じて居る所です。併し老婦人の無智は概して若い女の無智よりも甚しいと思ひます。老婦人は男子が彼等の都合の好いやうに作つた道徳習慣の制約に盲従して、少しも疑惑を挾まないのみか、却てそれを以て若い女を自分の如く奴隸的に墮落させようとして居ります。私は在來の道徳習慣が其中に男子の爲のみでなく、男女を通じて共に人間としての生活を維持し發展させる上に役立つて居る或物を含んで居ることを認めますけれども、それが概して人間が人間を支配しよう、男が女を支配しようとする精神から出て居るのを見て、私達は出来るだけ人間の平等、男女の對等を実現する生活を營みたいと思ひ、最早私達が幸福と發展とに不用であり、有害である道徳習慣から解放されようとして望んで居ります。然るに老婦人達は

概してまだ子は親の所有物、嫁は良人及び舅姑の所有物と云ふ舊式な觀念に囚はれて、それを道徳として若い女に臨みつつあるのです。老婦人達が無智なために人間としての自己の自由を男子に蹂躪されて悲痛を感じないのは致方がないとしても、自己の精神的頹廢を若い女にも強要しようとするに到つては、其處に兩者の間に壓制と反抗との衝突を見るのは避け難い悲惨な事實です。殊に夫婦の愛が成立つたからと云つて直ぐに舅姑と嫁の間に親子の愛が生じるものとは限らないのですから、舅姑は確かな理性を以て自分達の感情を精練して舊式な道徳的觀念に曇らされないやうに力めなければなりません。我國では大抵の場合に、若い者は老人に自由を奪はれ、女は男に威壓され、嫁は良人と舅姑とに所有されて居るのですが、若し其様な、人を人と思はずに物として所有する觀念から出た奴隸道徳が破壊されて、個人の自由と個人同志の相愛とを基調とした生活状態に世間が改まつて居たなら、中根氏の姑も嫁も聰明恭謙な女として、何れが威壓することも、何れが盲従することもなく、また兩者の衝突もなく

て美しく健康すくやかにして協立することが出来たであらうと想はれます。今後の人間はさう云ふ時代を早く引寄せられるために男も女も幾多の苦くるい争闘を経験しなくてはなりません。

在來の道德習慣に何の省慮もなく無條件で従つて行く人は精神的頹廢に墮落しながら氣が附かないで居る人です。在來の道德習慣を以て嫁に迫る姑は鋭利な刃物にも優る怖ろしい武器を以て嫁の個性を虐殺しようとする人です。日本人が青年の頹廢だけを歎いて、あのやうに多數な老人の頹廢を咎めないのはそれを確かに片手落す。老人自身に匡正する聰明を缺いて居るのですから、私は一人前になつた子供が其老父母を慇懃しんしんに出来るだけ教育すべきだと思ひます。

我國では人間として姑と嫁と、又は男と女との差が非常なのですから、言ひ換へればどちらも後者が前者に殆ど人と物との關係で權利を無視されて居るのですから、兩者の間に何か問題が起れば大抵の場合兩者を對等に批判してはなりません。後者は常

に壓制され、凌辱され、常に卑下し、忍従して居るものであると云ふことを念頭に置いて、同じ過失と罪惡にしても、男を批難することは七分、女を批難することは三分と云ふ割合で對せねば公平を得られないでせう。後者には其れだけの斟酌をすべきいろいろの情狀があるのです。其情狀と云ふものは女自身の無智から、又は生理關係、心理關係に由るのもありますが、大部分は男子の横暴と、男子自身のために作つた道德習慣が勢力を張つて居る不完全な社會狀態とから餘儀なくされて居るのです。女の無智と云ふのも女の先天性ではなくて社會の習慣が女を教育しなかつたからです。

例へば姑が嫁の髪を掴んで打擲したり、焼火箸や刃物で傷害したり、毒を呑ませようと謀つたりする事實が昔から日本の家庭に存在して居ます。それは日本の道德習慣では大した罪惡と認められて居ません。さう云ふ事實があつても姑根性として寛假されず。それが假にも姑を離縁し若くは別居せしめる理由にはなつて居ません。姑は如何なる場合も尼將軍として若夫婦に臨む權利を持つて居ます。嫁に危害を加へ、又は

嫁と不折合のために親族會議が其姑を離別する決議を實行した例を知りません。之に反して嫁は姑の下にあつて常に實家の生母に對するよりも幾倍の柔順と忍従を餘儀なくされます。さうして姑の意を迎へないでする嫁の言行はそれが過失であり、不孝であり、罪惡であるらしく殆ど寸毫も假借されないのが普通です。其れが過失と云ふ程のものでなくても、姑の機嫌に逆へば、良人の愛の有無や良人の意見に頓着なく、また勿論嫁の辯解を取り上げること無しに、それを直ぐに離縁の理由として姑は息子に迫り、息子は已むを得ず其妻に離別を宣告する結果になります。姑が或理由を附して嫁を離別させるのはまだ好い方であつて、甚しきは理由が無いと唯だ無茶苦茶に苛め通した擧句、姑の一存で嫁を追ひ返してしまふ例さへ珍しくないのです。嫁がさう云ふ不法な姑に對して正當な自由を主張することは在來の道德習慣が全く許しません。まして反抗の態度にでも出たら姑からばかりでなく社會からも不貞不孝の惡名を着せられますから、大抵は嫁の方で生きた死骸になつて諦めてしまひます。

私は問ひたい、女に對する公平な批判と云ふものが日本の何處にあるのですか。私は今の場合、男を批難することは七分、女を批難することは三分の割合でせねば公平を得られないと思つて居ますが、かう云ふ意見を誰に同意して頂くことが出来るてせうか。姑と云ふものは女でありながら男の横暴を其同性の若い人間に加へる者です。さうして今日では第一に教育者が其姑の味方です。女學校の倫理は、妻は良人と姑に對して獨立しながら共に生活に協力せよと云ふので無くて、唯だ良人と姑に沒我的柔順——盲従を以て奴隸的、物的、器械的に役立つことを教へて居るばかりです。女もまた人間である以上個人の獨立自存に必要な權利を何人に向つても遠慮なく正當に主張せよと云ふ、近代生活の太切な根本義を教へることを忘れて居ります。かやうな學校の倫理で教育せられた多數の女は、他日また今の姑達の多數が平氣で若い嫁に加へて居るやうな暴虐を一廉の賢母振つて繰返すことになるてせう。

私はまた識者に問ひたい。例へば中根氏の舊夫人が姑に加へたやうなヒステリーの

な、狂的な及傷を同じやうな動機や事情から反對に姑が嫁に加へたとしたら、日本の裁判官は中根氏の舊夫人を罰したやうに八年と云ふ永い期間の體刑を其姑に宣告せられるてせうか。私は恐らく私の考へとは反對に、嫁を罰する場合には七分、姑を罰する場合には三分と云ふ割合で裁斷されることであらうと思ひます。私がかやうな想像をするのは法律もまた其保守的な性質から姑の味方であるらしく考へられるからです。もつとも日本の法律は近く作られたものだけに、世界で最も進歩した新思想をも含んで居ると云ふことであり、また近頃の法官達には政界、教育界、宗教界などよりも聰明正義の士に富んで居ると云ふことですから、保守思想に倣した判決を下されることなく、少くとも嫁の場合と同じだけの刑罰を加へられるかも知れませんが、若し其様な判決が下されたとして、一般の姑達はどうか考へるてせう。彼等は自分達を反省し悔悟する教訓としてそれに對するてせうか。私は恐らく善惡の觀念の固定して居る一般の姑達は其中心に、嫁が悪いから姑が狂的に及物沙汰を引起したのは、姑がそんな

に罰せられる譯はないと云ふ不満を感じることであらうと思ひます。私はさう云ふ無智な姑根性から脱することも、婦人が自己を解放して公明な天地に跳り出す具體事實の一つだと思ふのです。中根氏のやうな教育ある紳士は其母上に對して既往は問はず、此度の災厄を機會に、今後の内省と發憤とを勸告するを以て孝養の意義を全くせられるてせうが、之は決して中根氏一家の問題でなく、すべての教育ある子女が其母に向いて思ひ切つて自覺を促さねばならぬ問題だと思ひます。(一九一五年九月)

紫式部の事ども

古今に亘つて其高名な割に其眞價がまだ十分日本人に領解されて居ないのは紫式部です。私の觀察では、此人だけの自己充實と自己表現とを完成した婦人は我國に類例がありません。世人は單に女流文學者として傑出した人だ位に思つて居ますが、其れが第一の誤解です。學問、宗教、藝術、政治、其外何れの社會にも此人に對立するだ

けの天才婦人を發見することは困難です。まことに日本女性史上の唯一人だと思ひます。

世間ではよく紫式部、清少納言二家を並稱して、此二人が女流文學者の雙璧のやうに考へて居ります。それがまた非常に權衡を失した誤解です。文學界の天才として見る時、小説の紫式部、遙かに遅れて生れた戯曲の近松門左衛門、この二人は文學史上の最高位を占めて容易に他の追隨を許さない二つの太陽です。序に私は古來の迷信的評價を破るために押切つて次のことを斷言します。此二人に亞ぐべき文學者は全く見當りませんが、やや下つて人麻呂、清少納言、西鶴の三人があります。赤人、家持、貫之、和泉式部、西行、兼好、芭蕉、蕪村のやうな人達は更に其以下の階級に光つて居る昂星です。人麻呂を清少納言に配したり、西行や芭蕉を家持や貫之と並べたりすることは恐らく世人の常識に反することとせうが、私は此通りに信じて居ります。

久米博士は現代の史學者中で私の最も尊敬して居る見識家ですけれども、博士が源氏物語を紫式部の作でないと言はれたことは賛成が出来ません。源氏物語の文章は一讀した丈でも婦人の心理から書かれた文章であることが明白です。更に仔細に鑑賞して行けば、婦人でなくては到底及び難い觀察と感想とが到る處に發見されます。また紫式部日記をも紫式部の作でないと言ひ得ない以上、日記の上に源氏物語が明かに自分の作であることを記述して居ることを否定することは出来ません。

上中流の家庭で盛に小説や隨筆類を愛讀することも、また上中流の才分ある男女が小説其他を書くことも平安朝の流行でした。紫式部の時代には殊に女がよく短篇小説を書きました。紫式部以前の小説で今日にも傳はつて居るものは竹取物語、伊勢物語、うつぼ物語、落窪物語などですが、其他に幾多の小説があつて愛讀されたことは源氏物語の中に書かれたことからでも想像が出来ます。紫式部は勿論其等の小説を小娘の頃から讀んで居ました。位地こそ父の爲時も地方長官の人であり、良人の宣孝も少將

相當の右衛門佐に過ぎなかつたのですが、何れも學者肌の人で、今日の學者肌と違ひ、文學上の嗜みが深く、其藏書の中には國史、漢書、歌集、佛書と共に多くの小説類がありました。紫式部が自ら書いた中に、自分の居間に大きな二つの厨子があつて、一つには小説類、一つには漢書が入れてあつて、紫式部が良人の歿後徒然を慰めるために漢書の方を取出して讀むのを侍女が蔭口を言つたりする事實があります。

紫式部が小説を書くに到つたのは、今の青年が小説を書くのと同じく、文學流行の時代心理に其天分の發揮を促されたので、初めから源氏物語のやうな大作を成すだけの自信は無かつたてせうが、恐らく非常に早熟の人で、十五六歳から幾つかの短篇小説を書いて居た經驗があつて、源氏物語の大作に筆を着ける實力を養つて居たことてせう。

源氏物語が書かれたのは、紫式部日記の記事から推して、私は良人に死に別れて家

に籠つて居る三四年間のことだらうと思ひます。良人と結婚したのは二十歳前後で、寡婦となつたのは二十三歳の頃てせう。結婚したと云つても當時の風習として父の家に住んで居ました。一人の兄はあつても、一人娘として父に鍾愛されて育つたのですから、父の財産に由つて氣樂に生活して居たてせう。紫式部が中宮彰子の御用掛として仕へるやうになつたのは二十八九歳の頃だと斷定すべき理由がありますから、源氏物語は其以前に書かれ、さうして既に當時の縉紳貴女から非常な好評を博して居たに違ひありません。爲時の一人娘が才女であることは宣孝と結婚する以前から交際社會に知られ、また源氏物語以前に書いた小説に由つて其文才は多少認められて居たてせうが、源氏物語に由つて一躍高名な才女として知られるに到りました。道長が中宮の御用掛として迎へたのは勿論其文名が然らしめたので、貴女の侍女に學才ある婦人を聘することは其貴女の威嚴を添へるものとして當時の流行てしたから、少し以前道隆の女の中宮定子に清少納言其他の才女が仕へて居た如く、紫式部、和泉式部、赤染衛門

などが道長邸に出入したことは中宮の光輝を非常に加へたこととせう。

紫式部と云ふ女房名の由來に就て、初めは藤式部と云つて居たのが、藤の花のゆかりで「紫」と呼んだのであらうと云ふ在來の説に私は反對します。源姓、高階姓、清原姓、大江姓などの官人の娘で女房となる者は比較的少數でしたから、源式部、高内侍、清少納言、江侍従と云ふやうな名を附けられたてせうが、藤原氏の出である女房は無數でしたから決して紛らはしい藤式部などと云ふ名を附ける筈がありません。之は斷じて源氏物語の女主人公である「紫の上」の名を附けられたのだと思ひます。其人の有名な作物の中の名を附けられることは當時の常識から云つてさうあるべきことです。

源式物語は最初「帚木」の卷から書かれたものだと思ひます。「光源氏名のみことごとしく」と云ふ句の勢は一篇の小説の起首に適はしく、さうして「うつぼ物語」其他

當時の小説は、今の小説と同じく若い作者が若い男女の讀者を對象として書くのであつて、讀者の興味を刺戟する爲に若い男女のことを主として書くのですから、「帚木」の卷で雨夜のつれづれに若いみづみづしい公達が集つて女の批評を交換する所は、其の意味から云つて如何にも小説の首卷らしく想はれます。「桐壺」を首卷として桐壺の帝から書き出すと云ふことはどうも映えない趣向だと思ふのです。其れに「桐壺」はあのやうに完美した立派な文章ですが、次の「帚木」はまだ筆が暢達せず、幾分未熟な點が目につくのも私の想像を助ける一因です。私の考では「桐壺」は全部を書き終つた後に他から注意されて總序として源氏の君の生ひ立ちを書くために附け足したものであらうと思ひます。其れで他の卷の文章に比べて著しく一絲も亂れない圓熟を示して居るのでせう。また源氏物語に出る多數の人物の經歷には全く矛盾がないと云つてよいのですが、唯一つ六條の御息所が曾て桐壺の帝の皇弟で皇太子であつた人の御息所であつたと云ふことが、私の發見する所では年月の合はないことになるのです。それは「桐

壺」の巻がある爲に矛盾を生じるので、「帚木」から書き出したのでは其矛盾は無いのです。若し「桐壺」から書き出したとすれば、あの用意の周到な作者が主要な一人物である御息所にさう云ふ矛盾を生じさせる筈がありません。之は私の想像の如く後になつて「桐壺」を書き足した爲に、作者がうっかりして其處まで注意が届かなかつたのでせう。

源氏物語以前の小説は(以後の小説も)すべて大人のお伽噺と云ふべき不自然な分子が多くて、理想小説の域を脱しないものばかりであつたのに、初めて現代を題材として寫實風の小説を我國に創造した紫式部の卓見は偉大です。主人公たる光源氏其人の一生には猶理想小説の脈を幾分存して居ますが、全體の脈絡も細箇條も悉く寫實を以て一貫し、殊に心理描寫が精に入り徹を穿つて自然を得て居ることは、其叙景の妙筆と共に天衣無縫の大觀を示して居ります。

紫式部の學殖が博くして深く、其識見が偏せず、佞せず、何事に對しても傳習に盲従しないで、必ず透徹した一家の新意を出だし、婉曲な言辭の奥に毅然たる意氣を寓して居ることは宛ら大海を望む心地がします。此人の偉大に比べると、人麻呂、清少納言、西行、西鶴、芭蕉の如きは畢竟河流の大いなるものに過ぎません。此人の遺篇の何處からでも私達は今日に用ひて猶潑刺たる感情と見識とを汲み取ることが出來ます。源氏物語を佛教思想で書かれた小説などと昔から言ひますけれど、作者は佛教で云ふ因果などは無ささうだと云ふやうな大膽な告白をもして居ます。源氏物語は一面から見ても立派な文明批評です。

紫式部が貞操上の缺點のなかつたことは事實です。二十歳前に宣孝と結婚して一子を生み、宣孝が歿して後に一人位の戀人はあつたやうですが、中宮に仕へた頃道長其他の戀を斥けて應じなかつたのは其品性の修養が和泉式部や清少納言のやうな輕佻な

女と違つて居たからでせう。私の推斷では、此人は中宮に仕へて後四五年して三十四五歳で父爲時よりも早く歿してしまつたと想ひますから、長命した清少納言のやうな浮名の立つことも無くて済んだ點もありませう。當時の才女の年齢は紫式部に比べて赤染衛門と清少納言は十五六歳の年長、和泉式部は七八歳の年長で、清少納言が追憶を書いた枕草紙は源氏物語より六七年前に書かれた譯になります。紫式部が三十四五歳で歿したと思ふ理由は澤山にあります。其歌集に其れ以後の歌が載つて居らず、其後宮中初め貴族の祝賀の屏風に和泉式部、赤染衛門などは歌の詠進を命ぜられて居るのに、紫式部ほどの歌に於ても名高い人が生きて居る以上其選に洩れる筈はありません。また一條帝は父の爲時を學者として殊愛遊ばされた方で、また紫式部のためにも知己ておありになつたのですから、此人が生きて居たなら一條帝の崩御を哀悼し奉つた歌が必ず歌集の中に残つて居なければなりません。

紫式部が源氏物語以外に幾つかの短篇小説を書いて、其れが道長一門の貴女などに讀まれて居たことは日記に於て窺はれますが、其等の小説の傳はらないのは大部の源氏物語が傑出して居た爲に壓倒されてしまつたのでせう。

枕草紙は先輩の作として勿論紫式部が讀んで居ました。さうして日記の中で清少納言の半可通を紫式部は罵りました。清少納言も勿論源氏物語と紫式部日記とを讀んだてせうが、赤染衛門と共に非常に長壽であつた清少納言が、あの負け嫌ひの性質から紫式部の傑作と自分に對する批評とに發憤して大作を遺すことをしなかつたのは、争はれない天分の差が其處にあつたからだと思ひます。

紫式部日記は此人の自傳として非常に有益なものです。源氏物語に比べて其文章の精練されて居ないのは、日記だけにさう重く考へて書かなかつたからでせう。日記の方には此人の女性らしい弱點もまたよく現はれて居て、清少納言に對する批評にしても今少し寛大であつてもよからうと思はれないこともありません。源氏物語の作者

としての紫式部には接近し難く思ひますが、日記に現はれた此人には凡人の共通性も混つて居て親むことが出来ます。

紫式部が中宮彰子に仕へて居る時、道長初め其他の高官が此人に掛想して居ます。如何に此人の才を慕ふからと云つても、當時の常識から考へて三十四五歳になつた女に其等の人が掛想しようとは想はれません。殊に道長の長男の頼通は十八歳の青年ですが、其れが紫式部と今一人の女房との居る局へ遊びに来て、二人と若々しい談話を交換し、戯れに「女郎花多かる野邊に旅寝せば」と云つた風の歌を口誦んで歸つて行く所などが日記に書かれて居るのを見ると、紫式部はまだ三十を越さない女で、打見には若く見える容色を持つて居ましたから、頼通がそんな戯れを云つても不釣合ではなかつたのだと思ひます。其れなら二十歳そこそこの女であつたかと云ふと、其年頃ではまだ良人が生きて居たし、また源氏物語のやうな大作を成すだけの蘊蓄も出来て居

ない譯です、源氏物語は二十六七歳までに書かれ、其文名に由つて道長に聘せられたのですから、其時は二十八九歳の女であつたと私は推定するのです。

源氏物語が書かれて直ぐに縉紳貴女の間には非常な勢を以て傳寫されつつ愛讀されたことは明白ですが、それが數年の間に地方にまで普及した證據には、更科日記の著者である人は父の任地なる常陸國に住んで居て、十三歳の時から源氏物語の全部を讀みたいと思つて自ら等身の佛像を作つて祈禱したと書かれてあります。著者が十三歳の時は私の推定した紫式部の三十七八歳に當り、紫式部は既に歿して居る筈ですが、源氏物語が脱稿してからやつと十年を経過した位の時です。

紫式部の娘は一人だと私は斷定します。大貳三位、越後の辨の二人だとする説は一人の娘に附いた二つの名を二人の娘として間違へた説です。娘は母の歿後、母を愛し

ておいてになつた上東門院（中宮彰子）から其遺子である爲に特に召されて侍女の一人として仕へて居ました。其時の女房名が越後の辨です。辨は上東門院の従兄で、母の紫式部とも交際があつた、自身よりは十四五歳年長の兼隆左衛門督に愛されて一人の子を生みました。後冷泉帝がお生れになつて三日目に、御母の贈皇太后嬪子がお薨れになつたため、皇太弟の若宮とお呼ばれになつた帝は御祖母の上東門院にお養はれになることになつて、人選のあつたお乳母に辨が採用されたのでした。上東門院が紫式部をお愛しになつたことの深さは此結果にも見えます。辨の乳母と云ふ名は陽明門院のお乳母の中にもありまして、然も歌人ですから間違ひ易い。辨の乳母が三位になりましたのは若宮が二十年の後に御即位になつて、それから後五六年も経つてのことです。兼隆との縁は早く切れて居て、辨が良人として居たのは五歳違ひ位の高階成章です。「有馬山印南の笹原風吹けば」と云ふ作はまだ播磨守である良人は任地に、自分は太子の宮に居た頃の歌でせう。成章が九州の總長官（事實上の）の大貳になりました

たのはもう五十八九歳の頃のことです。そして其人は任地で病歿しました。これは後冷泉帝の御代の末の事ですから、在來の大貳三位は成章の妻で後一條帝のお乳母であると云ふ説は成立ちません。後一條帝御誕生の年に成章はまだ十五歳の少年です。紫式部が日記の初めに書いた同帝御誕生の記事には固より自身の娘がお乳母になつたやうなことは書いてありません。大貳三位も歌人として母の才分を傳へた才女でした。此人に母の死を悼む歌のないのを見ても、まだ此人が歌を詠む年頃に達しないで紫式部が早世したことが推定されます。此人と成章との間に設けた娘も後に後冷泉院の中宮章子に仕へて同じく大貳と稱し、祖母や母に恥ぢない歌を作りました。

（二九一五年十一月）

紫式部と其時代

一寸見ると宮廷と藤原氏一門との庇護で紫式部のやうな才女が一時に寛弘長保時代に輩出したやうであるけれども、實際は其等の才女が先づあつて當時の宮廷と藤原氏

一門とに多大の光輝を添へたのである。文華は突如として發せず、天才は偶然に生れない。上中流の婦人が學問、藝術及び宗教に熱中する風潮は遠く大化革新の古に淵源して居る。纔かに懷風藻と萬葉集とに遺された婦人の製作を見ても平安盛期の萌芽を想像することが出来るのである。

奈良朝までの文明は概ねまだ支那、印度、朝鮮諸國の模倣であつたが、平安奠都以後の日本人の生活には新しい要求が次第に勢力を示して來た。上中流の男女が漢書と歌集と佛典との外に日本文で書かれた小説類を讀まずに居られなくなり、盛に小説や日記を書いて自己表現の端を開いたことなどは顯著な變化である。

平安初期の才女に有智子内親王、小野小町、伊勢などがある。是等の急進婦人が新文藝の上に地歩を占める運動に身を挺して當つたためがに、當時の婦人界を刺戟したことは想像するに難くない。傳説の小野小町は「身を浮草に」なす婦人であるが、其歌集を透して見る小野小町は、感情の上に新刺戟を追求して終生煩悶した新しい女で

ある。口頭の自覺でなくて全人を投げ出して新生の憧憬に腕うでいた尊い婦人である。

婦人に文明教育を授けることは何時の世にもある一部保守主義者の反對を受けて居たが、最早平安朝に於ける上中流の重要な事實となつて行はれて居た。清少納言の仕へた中宮定子の生母高内侍の如きは當時一流の女流漢學者であつた。當時の婦人は盛に小説及び隨筆を書いた、文學史には紫式部外數人の女流文學者を傳へるに過ぎないけれども、其等以外の女流の作物は今日よりも多數であつた。

平安朝の生活は宗教、學問、藝術、戀愛、是等のものが不可分的に織込まれて居た。朝野の知識階級は男も女も其等のすべてを味解することが生活の内容であつた。道隆や道長を論ずる者は今日の政黨の領袖達を論じるやうに單に政治家としてのみは論じ難い。公任などを論ずる者は今日の文人を論じるやうに單に藝術家としてのみは論じ難い。我々は紫式部の源氏物語及び紫式部日記の中に此女流文學者の教育、政治、音樂、學問、社會、其他に對する獨自の見識を最も豊富に看取することが出来るのであ

る。

紫式部の如き天才も退嬰主義の室町以後に生れたなら其天才を發揮し得ずに荒木田麗子の程度で終つたであらう。平安奠都以前から日本人の間に久しく鬱蒸して居た文明主義が他の才女達と共に此人を平安朝に生んだのである。室町以前の上中流婦人には親の財産が男子と同じやうに、若くは男子以上に分配される習慣があつたから、經濟の保障があつて自由な生活を實行し得たと云ふことも女流文學者が其才分を伸ばし得た原因になつて居る。

清少納言、和泉式部などは權家に出入することを榮譽とした嫌ひを免れないが、紫式部は中宮彰子、一條帝等の知遇には感激しながらも、道長を見ることは清少納言が道隆を見たやうな從屬的態度ではなくて、道長の長所と短所とを大膽に批評した。此人の人格が其通りに高く且つ悠容として居たので源氏物語のやうな前人未發の傑作が完成されたのである。此人は官僚の家に生れたが、官僚らしくない學者肌の父に愛養さ

れて、婉雅の奥に毅然たる所のある自由思想家であつた。

自分の推定では、紫式部は中宮彰子に三四年の間奉仕して歿してしまつた。年は三十五六歳であつたであらう。此人は「この世をば我世とぞ思ふ望月の缺けたる事もあらじと思へば」と歌つた道長一門の全盛を見ずに終つた。藝術が人生を化すると云ふことが眞實なら藤原氏の榮華は源氏物語に負ふ所が多かつたに違ひない。(一九一五年十一月)

貞操は道德以上に尊貴である

私は貞操を最も尊重し、貞操を最も確實堅固な基礎の上に据ゑたいために此一文を書きます。

今年貞操と云ふことが問題になつて、女子の貞操ばかりでなく、男子の貞操と云ふやうなことまでが論ぜられるやうになりました。識者階級が斯う云ふ問題に眞面目な反省を取るに到つたことは勿論喜ばねばなりません、貞操を單に道德として維持

して行かうとすることの可否は容易に決定し難い宿題です。まだまだ之から討議を重ねて慎重に決定すべき事柄です。然るに何の新しい解釋も加へないで、之を昔の儘に道徳として強要しようとする態度の議論が多いのは甚だ宜しくないと思ひます。私達は貞操道徳に對して最も眞面目に幾多の疑惑を感じて居ます。

私達はあらゆる虚偽と、あらゆる壓制と、あらゆる不正と、あらゆる不幸とから脱れて、最も眞實な、最も自由な、最も正確な、併せて最も幸福な生活を實現したいと渴望して居ります。私達はこの實感を基礎として一切の問題を整調して行く外はありません。

たとひ昔は人間の生活に役立つたものでも、今の私達の情意を満足させないものは最早私達の生活の規律には適合せず、それを強ひて外から適合させようとするのは、虚偽を以て壓制するのですから、私達はさう云ふ無法な道徳を排斥して、私達自身に必要な道徳を新しく制定することに努力しようと思ひます。

道徳は私達の生活のために制定されるので、其れが不必要になり、または私達の生活に害するに到れば漸次に改廢すべきものであらうと思ひます。若し道徳のために人間が生存して居るのであるなら、私達は永久に道徳の奴隷となつて舊い權威の下に屈從せねばなりませんけれど、さう云ふことは飽迄も自由に生きようとする私達の實感が許容しないことです。さうして私達はあらゆる壓制から脱れ、不用な舊思想や舊道徳から自己を解放して行くことが私達の生活に意義あらしめる一つの重大條件だと考へて居ます。

私達が壓制から脱れると云ふ意味は假にも放縱無秩序の生活を送らうとするのではなく、私達の實際生活に必要である限り、聰明な批判商量を経た上で、あらゆる自制律——新道徳、新制度の類——を建設しようとするのです。私達が此に貞操道徳に對して幾多の疑義を挟み、其等の解決を明快に識者から示されるので無くては、貞操を現代の道徳として肯定することが出来ないと言ふ意味も、要するに眞實の道徳を建設し

て私達の道徳性を何物にも動搖されること無しに生きて行きたいと思ふからです。貞操を最も現代的に道徳として擁護したいからです。

貞操の起原や歴史に就て私達は深く研究する必要を感じて居りません。どうでもいい事だと思つて居ます。私達の知らうとする所は貞操に對する現代人の聰明な解釋と眞率な實行とです。

私の持つて居る疑惑の幾つかを順序無しに次に述べて見ませう。

貞操は女のみに必要な道徳でせうか。貞操は男にも女にも必要な道徳でせうか。

貞操は道徳としてどんな場合にも人間が守らねばならぬものでせうか。またどんな場合にも守り得られるものでせうか。

其人の境遇體質などの關係に由つて守り得る場合と守り得ない場合とがありはしま

せんか。また甲の人に守ることが出来ても、乙人には守ることが出来ないと云ふやうなことがありますませんか。何人にもそれを強要して守らせることが出来るのでせうか。

どんな場合にもそれを守ることが屹度人間生活をより眞實に、より自由に、より正確に、より幸福にするものでせうか。

私達の人間生活の持續と發展とに矛盾なくして役立つものなら新しい道徳として歓迎したいと思ひます。若し女には守らさねばならぬが、男には寛假されると云ふやうな矛盾のあるものなら、それは人間生活を破綻失調させる舊式道徳であつて、私達の信頼することの出来ないものだと思ひます。

また何人にも遍く強要することが出来ず、其人の境遇、體質等に由つて寛嚴の差があり、それを一律に何人にも強要しては却て大多數の人間が虚偽と、壓制と、不正と

不幸と泣かねばならぬと云ふやうなものなら、其れは私達の要求して居る新しい道徳として見ることが出来ません。

貞操は精神的のものですか、肉體的のものですか、愛情のものですか、性交のものですか、また精神的であると同時に肉體的のもの、謂ゆる靈肉一致的のものですか、かう云ふ區別もまだ鮮明になつて居ませんやうに思はれます。

若し精神的のものと云ふなら、他の婦を見て情を動かしたものは既に姦淫を犯したものだと云ふ論法通り、或男が或女を見、或女が或男を見て愛情を動かしたことは悉く精神的に純貞を破つたものになります。片戀と言ふのも、失戀と言ふのも、また其れまでに達しない程度の異性に對する淡い愛情も一切不貞不純の事實になります。さうして結婚前に何人の心的經驗にも此種の不貞不純を絶対に犯さないうで居られるものでせうか。

人が山中に孤棲でもして全く社會と隔離しない限り、かう云ふ意味に於ての貞操道徳を破らない者は一人も無い譯でありませんか。貞操が精神的のものであるなら其處まで徹底して考へねばならないと思ひますが、道徳が果してさう云ふ内心の機微までを制裁することが出来るてせうか。

其處までは追窮しないでもよい、貞操は結婚した男女の間に守る道徳であると云ふなら、結婚するまでの不品行などは一切寛假されることになるてせう。肉體的には關係したが、精神的には相許したのではないと云へば少しも貞操道徳に背いた人でなくなるてせう。

世間には夫婦として性交を續けながら精神的に冷淡な男女や、また性交も無く精神的にも憎み合ひながら夫婦として同居して居る男女が多數にあつて、其等は明かに精神的の貞操を破つて居る男女である筈ですが、不思議にも貞操道徳はそれを不貞の男

貞操は道徳以上に尊貴である

女として咎めないのみならず、表面さへ夫婦生活を一生續けて行けば却て貞婦のやうに目されて居るのは何う云ふ譯でせう。

若し肉體的のもととするなら、男も女も絶対に再婚してはならないことになるでせう。のみならず、女が他から暴力で身を汚されても、男が女の誘惑に由つて一時的の性交を遂げても、もう其男女の貞操は破壊されたことになつて、一生結婚は出来ないでせう。親兄弟のためとか、其他一身一家の餘儀ない事情のためとかで娼婦の境遇に在つた女などは永久に敗徳者として泣かねばならないでせう。精神的に悔ゆる者は其罪が除かれると云ふやうな美しくしい感情は敗徳者を曲庇するものとして許されないことになるでせう。また肉體さへ一人の異性を守つて居れば、愛情は他の異性に向つて居ても差支ないと云ふやうな矛盾したことになるでせう。

之に反して、貞操は靈肉一致のものとするなら、さう云ふ道徳が現在の社會制度のままて實現されるでせうか。精神的にも肉體的にも唯一を守る結婚と云ふものは戀愛結婚以外には遂げられない譯ですが、戀愛の自由を許されて居ないと共に、戀愛の自由を享得するだけの人格教育が施されて居ない現代に、靈肉一致の貞操を道徳として期待することは蒔かず刈らうとする類ではありませんか。

現代の結婚は大抵の場合男女の一方が一種の奴隸となり、一種の物質となつて、一方に買はれて居る状態です。男が富家の聲となることの外は、女の方が衣食の保障を得るために一種の賣淫を男に向つて行つて居るのが現在の結婚です。かう云ふ結婚から成立つた夫婦に向つて靈肉一致の貞操を期待するのは夫婦の何れに向つても苦痛を與へ、虚偽を強ひるものではないでせうか。

現在ではまだ奇蹟のやうに思はれて居る戀愛結婚が生活理想の急轉に由つて遍く實

行される時代が遠からず来るとしても、人の心は固定して居ないのですから、其戀愛が自然に解體する機會が生じないとも限りません。熱烈な愛情の上に結ばれた夫婦生活が必しも永久に一致を續けて居なかつた例は昔から少くないことです。さうすれば戀愛結婚もまた貞操道德の巢では無いやうに思はれます。

貞操に對する私の疑惑は大體右の通りです。

道德は如何なる場合にも矛盾のないものでなくてはなりません。また努力してそれを實踐することに多少の苦痛は伴つて居ても、其苦痛に勝るだけの快感を持ち來すものでなくてはなりません。なぜなら私達の要求して居る今後の道德が、人間各自の生活をより眞實に、より自由に、より正確に、より幸福にするための自制律であるからです。それゆゑに社會から之を個人に強要することも許されるのです。

併し貞操道德を徹底的に實踐しようとする、まだ貞操道德の解釋が前述のやうに

明確になつて居らず、曖昧な解釋のままに實踐しようとするれば幾多の矛盾が生じて徹底的であることが不可能になります。

再婚者も、また曾て性交を二三にした人も、甚しきは曾て醜業婦であつた人達も、現在の良人に對して唯一の愛情さへ捧げて居れば、過去に於ける他の異性との愛情も性交も現在の貞操を汚す所以でないと云ふ風に解釋されて居る夫婦生活が一方にあるかと思へば、結婚前に一たび性交を経験した女は、それが異性から誘惑されたのであると、暴力で犯されたのであると、自から招いたのであるとに論なく、貞操的に汚れた女として峻烈に責められる風が一方に勢力を張つて居ます。

それなら男も結婚前に性交を経験した者は不貞を以て問はれるかと云ふと、斯様な質問をするのが非常識である程それは全く道德上の問題となつて居りません。男は結婚後と雖も他の異性を抱擁することを公認されて居ります。男には貞操道德の自發的

要求も社會的強要も行はれて居ないので。その反對に女は一旦妻となつた以上、良人との愛情の交感がなくとも、唯だ良人との抱擁さへ續けて居ればそれが貞婦であつて、さう云ふ意味の貞婦たることを社會から強要されて居ります。甚しきは愛情も性行も斷えて居て、それに由來する絶大の苦悶を續けながら、幾十年の間良人と同棲して家政を取り、小兒を養育して居ると云ふ女が貞婦として稱讚され、或は愛情は他の男に向つて居ながら性交を良人以外に許さないと云ふだけで、貞操ある妻として世間から目されて居ると云ふやうな事實が無數にあります。

貞操は女にのみ守ることが出来る道德で、男には生理的關係がそれを許さないと云ふやうなことも聞きます。男に守れないと云ふことは貞操が人間共通のものであるべき道德としての資質を最初から備へて居ない一證ではないでせうか。

若し生理的關係を云ふなら、女にも性欲衝動のために危険な時期がないとは云へな

いてせう。また生理的關係ばかりでなく、男も女も愛情のためからは勿論、再婚して新しい境遇を開くと云ふやうな關係から却つて處女として寡婦としての貞操を守らないう方が幸福な場合も現に多いのです。

如何なる場合にも一律に實踐しようとするとな幾多の矛盾が生じます。實際生活と矛盾するのはそれが道德として現代の人間を律するだけの正確な基礎を持つて居ないからではないでせうか。其矛盾を補綴するために幾多の除外例を設けて、結婚前の不純不貞は問題ではない、再婚後の靈肉の純貞を要求するのであると云ひ、或は戀愛結婚は理想であるが、愛情のない夫婦生活の持續も貞操の一種として強要せねばならぬと云ふ風であれば、貞操道德の内容はど不純、不正、不自由、不安なものは無く、私達の生活を裏切つて不幸に導く在來の壓制道德から一步も出て居ないものになります。私達はさう云ふ曖昧なものを安心して自分の生活の自制律にしたくありません。

私達はまた在來の意味での結婚其物を疑つて居ます。儀式、同棲、戸籍上の届出と云ふやうな形式關係に重きを置かれる結婚にどれ丈の權威があるてせうか。結婚の前後を以て貞操を區劃し、結婚以前の不品行を寛假するのも道理のないことであり、結婚さへ續けて居れば貞徳の全まこといものであることも形式的な解釋です。

また今日までの社會では結婚して同じ家に住むことが出来ましたけれど、今後は經濟上または其他の事情から戸籍上の届もせず、同じ家にも住まないうて夫婦關係を結ぶ男女が次第に殖えて行くてせう。歐洲ではさう云ふ夫婦關係の人達がどの階級にも多數になつて行く傾向があります。之は學者の道德論などで制し難い社會事實です。さう云ふ夫婦關係に於ては結婚と云ふ形式的なものが何なんてもないものになります。愛情が合へば協同關係を結び、愛情が破裂すれば別れてしまふ外ありません。さう云ふ社會事實と貞操道德とは何うして一致されるてせうか。男女は必ず結婚すべきものと云ふ理想が動搖して居るのに、貞操の永久性と云ふものが何に由つて保證されるてせうか。

私は曩に「太陽」誌上で、私の貞操は道德でない、私の貞操は趣味である、信仰である、潔癖であると云ふ意味のことを述べました。趣味や信仰や潔癖は他に強要すべき性質のものでありません。さうして私が私の貞操を絶対に愛重して居るのは藝術の美を愛し學問の眞を愛するやうに道德以上の高く美しい或物——假りに趣味とも信仰とも名づくべきものだと思つて居ます。若し貞操を道德と云ふ名の下に實踐しようとするには、前述の疑惑を解決して何人に強要しても矛盾の無いことが徹底的に明白になつた上でなければ私は十分に満足が出来ません。重ねて申します、私は貞操を尊重することを何人にも譲らないために敢て此一文を書きました。(一九一五年十一月)

愛の生活

「私は」と云ふべき所を、誰でもよく「人は」と云つたりする。之はうつかりして云

ふのであつても、決して意義なくして云つて居るのではない。全人類と自分との間に「同感性」のあることを其「同感性」で直感して居るからである。この「同感性」を透して交響樂的の諧調を持つた世界的同胞主義の生活の可能なことが豫感されるからである。自分のことは確かに全人類のことだと理想されるからである。この無意識の直感が無かつたら誰も直接日常の用事以外には發言を欲しないであらう。

「同感性」はまた「愛」と同じ物につけた別の名である。「私は」と云ふべき所をうっかり「人は」と言ふ場合は「愛」が自分から他へ無意識に働き掛けて居る時である。

「愛は」無量壽である。永久に若い夏の女王としてずんずんと成長する。「愛」に育まれない思想は枯凋し、「愛」の血を吸はない感情は冷却する。そして「愛」の足りない生活は破綻する。其れは「愛」が男女の結婚問題若くは社會民衆の問題に働いた時に最も顯著に經驗される事實である。

人は「愛」を以て他と交感することの深いだけ自らの生活が深くなる。其れはやが

て自らの生活を最も深く愛して居ることである。個人の愛の生活の極限は全人類の愛の生活と交響諧和する。私達の生活の理想は常にこの音樂的境地にあらねばならぬ。併し眞に自己の愛すべきことを自覺した人でなければ其愛は他を光被するに到らないに違ひない。

在來の習慣、道德、および法律には此理想と背馳し、或は此理想の發展を妨げるやうな分子が多く混つて居る。のみならず、其等のものを改革しようとする人達の言論行爲にも却つて此理想を裏切るものが少からず混つて居る。

例へば尾崎行雄氏は政界に於ける廉潔聰明の士として久しく多數の青年に期待された人である。氏もまた常に政界の廓清を呼號し其急先鋒を以て自任した人であるのに、一旦大隈内閣の大臣となつて以後の氏は、其自愛の足らぬことが甚だしく見苦しい。増師案に對する厚顔な變説を初め、近頃の大浦事件に對する不條理な辯疏までが自愛を缺き、天下を愚にした言動である。先進を範として自ら勵まうとする青年は常に斯

様な先進の墮落のために失望させられ、未來の興奮を殺される。(一九一五年九月)

急進婦人の近状

日本に婦人運動の起つたのは政治、宗教の方面からであつて可成の時を経て居る。そして政治方面の運動は明治中期の國粹運動と云ふ逆流に遇つて沈滞してしまつたが其他は依然として持續し、最近五六年來は「新しい女」の名に由つて文藝方面から起つた婦人改造の運動が加はつて居る。私は平生其等の先覺婦人達を尊敬し、その一の言動に由り私自身の生活に新しい暗示を得たいと祈り、且つ其等の人達の言動は、私達のやうな無智無力な女に代つて婦人思想界の第一線に立ち、私達の愛の足らぬ所を先づ唱へ先づ實行せられるのであると思つて、遙かの後方に逡巡しながらも、其等の人達と苦痛を分かち、喜びを共にする心地で居る。

私は其等の優秀な人達の生活がまた動もすれば私達と同じく破綻に陥り易いことを

認めるけれども、成るべく破綻の少い進路を取られるやうにと祈つて居る。私達の過失よりも其等の人達の過失は社會的に影響する所が大きく、私達の理想はそれが爲に誤解せられ、社會的に無力な私達は言ひ譯の出来ない窮地にあつて周囲の凌辱を忍ばねばならない羽目になるからである。私達は先覺婦人の正しい言動に對しての一世の非難には聯帶責任を課せられても固より光榮とする者であるけれども、其破綻のすべてに對してそれを容認する態度をのみ取ることは私達の理想が許さない。私達は劣弱と云へども常に自らの愛を擁護せねばならぬ。

破綻は其人の不注意からばかりでなく、いろいろの餘儀ない自他の事情からも生じる。男ほど實世間からも讀書からも知識を得て居ない上に、保守思想の壓迫を最も多く受けねばならぬ境遇に居る婦人は、たまたま自己の生活の改造に急激であるだけ、周到な反省と豊富な計畫とを缺く嫌ひがあつて、其隙に思想と實行との破綻を生じるのは已むを得ないことかも知れぬ。さうして其破綻から受ける苦痛が其人を一層醇化

する機縁を開くかも知れず、私達の爲には嚴肅な反省を促す教訓となるかも知れないから、私達は一概に其破綻を責めようとは思はない。また其れを責める資格もない。それから破綻には其常人が懺悔すべきものもあると共に、其破綻の理由または経過を正直に告白して識者の批判に任せてよいものもある。さう云ふ場合に何よりも先覺婦人達に私の望む所は、専ら眞實を語つて欲しいことである。一時の衝動や氣分に起因した過失などに後から彼是と作爲した理論を附加して自己辯護をすることは、其過失を更に上塗りするもので、他から見て其不眞面目に赤面される。

世に新しい女として注目せられる婦人達は其すべてが新しい女でないかも知れぬ。また其等の人人がしばしば大膽な自己告白をされる其一事だけなら大多數の婦人は其及び難いことを必ずしも愧ぢないかも知れぬ。私達が其告白に敬意を拂ふのは筆者の生活の眞實が最も正直に書かれて居る時である。さうして更に私達の目を覺させる何がしかの暗示——新しい生活の暗示が自然に備つて居るなら最も珍重に價し、新らし

い女達の價値が其處に窺はれるのである。(一九一五年十月)

婦人の告白

眞實を書くことは浮華や疎慢では出来ることでない。識者は日本の自然主義が徹底するに到らないで早くも新しい名の藝術運動へ移つて行つたと云ひ、藝術上ばかりでなく、日本の生活はまだまだ自然主義の態度を學ばねばならぬと云ふのであるが、殊に久しい間無智であつた爲に自己を正視することが出来ず、内に確かな見識が無いために人前ていい加減な虚偽を語り慣れて居る日本の女は、それを自覺して非常な努力をしないと自分の眞實を告白することが困難である。

人生のことは理性のみの所産でなくて、大抵は複雑な氣分情緒の混合であるから辻褄の合はないことが多い。其れを描寫するには辻褄の合はないままの眞相を傳へようとするのが正直な態度である。勿論それには辻褄の合はない所のあることを意識して

居なければいけない。矛盾だらけの告白をして其れで論理が一貫して居る、自分の態度に統一があると思ふやうでは多数の無自覺な女と撰ぶ所がない。殊に諸種の婦人問題は新しく提出せられたものだけにまだ少しも討議されて居ないのであるから、乏しい経験と浅い思案とを以て結論を急ぐことは不真面目である。先覺婦人は自ら経験し實感しつつ傍ら其経過を述べて十分に討議を重ねて欲しい。近頃の貞操問題にしても其議論が十人十色であつて容易に歸一する所がない。それ程まだ十分に討議されて居ない問題を、一概に貞操は道徳であると云つて確定してしまはうとするのは大早計である。之に類した論法が老婦人間にも若い婦人間にも近頃少くない。(一九一五年十月)

輕躁な婦人

從來個人として内に何の誇るべきものを持つて居なかつた婦人は、偶々少しの所得があればそれで非常な誇りとして有頂天になる風が著しい。男の中學卒業程度の學識

すらあるか無いかの若い女が飯事いひごとの様にして藝術や思想問題の片端に觸れると、それを以て一廉ひとかたの新しい婦人を氣取る流行も識者に對して恥しい。其等の若い女が多数の娘達と同じやうに家庭生活を急いで、詰らぬ異性に未始終の見込の立たぬ安價な戀を許す傾向も、思へば其生活の調子が餘りに低い。平安朝の晩期以來、女が奴隸の位地に墮落したのは衣食の安定を求めるために娼婦の如く輕輕しく男子と相許すに到つたからである。現代の若い先覺婦人は一般女性の娼婦根性に反抗して立つた以上、たとひ非結婚同盟を作るとも、不聰明な家庭生活に奔つてはいけない。安きに就かうとする自己の弱さを理知と意志とで鍛へ鍛へして互により優れた生活を建てるまで深く自重自愛して欲しい。一時の衝動や氣分で一生涯を誤るやうな事をしては餘りに平凡である。

(一九一五年十月)

婦人と裁判沙汰

私は近年政界に於て裁判沙汰の頻りに起るのを苦いづ苦しく思つて居る。政界の正義が

司法官達に由らねば維持されないと云ふことは言語道斷である。今はまた思想界や新しい婦人の間にもそれに類したことの起りつつあるのは意外に感ぜられる。法律や道徳の改造を叫ぶ位地にある人達が其法律に裁判を仰がねば自分達の生活を整理し得ないと云ふことは大きな矛盾である。其處まで立ち到るには局外の私などに想像のつかない紛糾した理由があるのであらうとも想ふが、また世間普通の夫婦間でなら却て穩かに解決の附けられた事件を、世間普通の夫婦が持つて居るだけの情味の修養と意志の努力とすら足らなかつた爲に、大袈裟な問題が持ち上つたのではないかと想はれる。とにかく其等の人達に自重自愛の覺悟が不十分であつたことが此いたましい結果を生じたことは直感が出来る。私はそれを遺憾に思ふ。私は決して運命として諦めたくない。そして私達は是等のことを決して他人の事と考へてはならない。其人達の境遇に同情すると共に、何れも私達のやうな劣弱な女のために示された實際の難有い教訓として受取るべきであると思ふ。(一九二五年十月)

非常識な矯風運動

私は曩に本誌(太陽)に於て、矢島老女史達の基督教婦人矯風會が御即位式に際し、全国の藝妓に戸を閉ぢて謹慎せしめようとする運動しつつあるのを見て、一片の所感を述べたのに對し、其運動の機關である「婦人新報」「廓清」の二雜誌記者が開書を私に與へて長長と反駁せられた。併し其反駁が矢島老女史達の意見を代表するものとしては甚だしき野鄙であり、不徹底であり、非人情であり、低調であることを惜まねばならない。婦人が團體の勢力を以て社會的に運動するのは少數の孤立した若い新しい婦人達の言動に比べて其影響する所が大きい。私は其處にも自愛の足らない先覺婦人の集團を見るのである。

私が「藝妓も亦日本國民である、國家の慶典を祝する感情に我々と變りは無いてはないか」と云つたのに對し、記者の一人は藝妓を目して「道徳の振興は彼等の悲みて

あり、風教の頹廢は彼等の喜びである。國家の興隆は彼年の悲痛であり、國家の衰亡は彼等の喜悅で無くてはならぬ。——即ち平素反社會的の行爲をなし、家庭を蠱毒し、國運を衰運に導かんことをのみ念願しつつある彼等が、今回に限り國家の慶典なるが故に喜ばんとするは矛盾の餘りに甚だしきに呆れ、私の常識がそれを信用することを許さない」と云はれたが、之では藝妓と云ふ者は悉く非國民であり、亂臣賊子である。之が果して矢島老女史達の常識であらうか。

また私が「醜業婦としてでなく、藝妓として参加するのだから差支ない。表面は藝妓を業として居るものである。」と云つたのに對し、記者は「表面藝妓として出席すると云ふとも、裏面の醜業婦なる聯想はどうすることも出来ない」と云ひ、「泥棒と雖も表面は何か職業を有して居る、泥棒は泥棒職だと自らは言ひはしない」と言はれた。若し聯想に従つて藝妓を醜業婦と斷定することが正當であり、其藝妓が祝賀會に参加するのを「畏くも陛下の聖明を蔽ひ、萬民を盲目にした罪は免れない」と罪惡視するの

が正當であるなら、婦人矯風會の婦人達は何よりも先づ島田三郎氏初め朝野の政治家の一切を奉祝會なら驅逐する運動をなぜ爲ないのであらう。矢島老女史達は今日の政治家の多數が良心を黄金と權力に換へつつある醜業男子であることを聯想しない程おめてたい人達なのであらうか。藝妓は殆ど皆餘儀ない家庭の事情から心にもない賣笑の業を取つて居るのであるが、それを需要して已まないのはまた彼等政治家を初め紳商富豪の人達である。婦人矯風會が藝妓を祝賀會から排斥して彼等多數の敗徳男子に一言も及ばないのは強者に寛にして弱者に酷な所置と言はねばならない。記者の用ひた「泥棒」の比喻や、その他全體の文章に浮動して居る極端な輕佻野鄙の口氣は、このやうな野蠻人に由つて廓清されねばならない日本人こそ禍であると思はせるばかりである。

若し斯やうな論調が婦人矯風會を代表して居るものなら、基督教婦人の先覺者達の思想は此二十四五年間に驚く程退歩したのである。當年の基督教徒は他から誤つて非

國民と誤解せられた程に率直な精神を持つて居たのに、今は却て彼等が神聖なる皇室の御慶典を借り、政府の権力に縋つて、我々の姉妹の中の最も弱者である階級の婦人を苦しめ、冷酷無情にも非國民を以て凌辱するに到つた。彼等は肉に於て汚れた者はすべて靈までも汚れたものと妄断し、さうして「汝等のうち誰が第一の石を投げ得るや」と云つた基督の愛を忘れて居る。私は保守化し、官僚化し、俗衆化した基督教婦人矯風會自身から先づ矯正されるやうに望んで置く。

序に、御大典の日に花の會、旗の會等が催されるのは結構であるが、其花や旗の製造に女學生の貴重な時間を割かせることは「花より實を取れ」と唱道される嘉悦女史達の御一考を願ひたい。初めから貧民の婦女に造らせて其れを貴婦人其他の中流婦人が買ひ上げて賣るがよい。倫敦の花の日の造花などが此方法である。

また別に巴里の復活祭などのコンフェツチのやうに何人にも手軽く彩紙いろがみを切つて造ることの出来る、そして量の多い物を工夫して貧民の婦女に各自に造つて賣らせ、そ

れを御慶典の數日間に亘つて市民に途上で撤かせるもいいであらう。それだけでも御慶典を機として貧民の一部を賑すことである。若し許されることなら、今上の御一代に一度のめてたい大國祭日であるから、國民に一日の無禮講を歐洲大陸のカルナルワ祭やミカレエム祭の日のやうに與へて、軍人も、警察官も、司法官も惠比須顔をして國民と共に心から喜び合ふやうなことがあつて欲しい。御即位式に皇后陛下の御座をお設けになつたことは此大御代のめてたい御新例である。國民の奉祝にも最もめてたい新例を開くことが望ましい。(一九一五年十月)

平安朝の戀

平安朝の人の戀にも眞實の戀と、表面うはつらな遊戯的の戀とがあり、千差萬別よかなさけりすなまじりの深情薄情があることは云ふまでもありません。紫式部が日記で自身の朋輩達を評して、「あの人達は餘りに臆病である、男を恐がつて交際を避けるのが見苦しい、輕々しくないと云

はれたいことに腐心して、二十歳そこそこの女までが自身の態度を華やかにしないのが今日の有様であるから、それより年の上な人達がはしやいだことをすれば気が觸れたやうに云はれるであらう。自分はそんな人が朋輩の間に出来て欲しいとは思はないが、全體をもう少し人情に近づけたい。そのくせ少しく話しに来る人が出来、その人の相手を暫く續けてして居る人があると、もうちやんと肉體の關係が出来てしまふ。自分は女さへ確りとして居ればそんなことにはならないでもいい筈だと思ふ。そのために立派な女は寡いと云ふことが定義になつてしまふ」と云つて居ますが、今日の女性も猶此忠告に耳を假さなければなりません。ですから事實として現はれることも今日と其時代に變りはないのです。唯だ社會制度が違つて居て、今日では蔭に隠して置くことでも大きい顔をして居ますから、男も女も放埒であつたやうに思はれるのです。眞實の意味での賢妻良母も、唯だ良人のことだけを傍目わきめも振らずに思つて居る女も、戀人を一人より持たない男も無論あつたのです。中には惡徳のない、良人以外の

男を知らない女が少數で無かつたのです。併しながら奢侈の進んだ結果、萬壽、長元頃からの宮廷の侍女は衣服や身の廻りに多くの費用の掛るために、今日の藝者が旦那を持つのと同じやうな生活をしなければならなくなりましたから、其階級の戀愛に對する觀念が無茶になりました。宮方の女房などの晴の衣裳と云ふものは、帶地に使ひますやうな厚織物の服を七八枚から多いのは十五六枚、二十枚も重ねて着たものなのです。夏は羅らに刺繡なひをしたのをやはり重ねたのです。一年のうちにはさうした物が幾組となしに要るのですから富のある情人を持たない女達はみじめであると普通のことのやうに人も云ふやうになりました。堅氣な男は女房の中に美しく優しい女を見て、あれが人の家の娘であつたら妻にするものと歎息を洩すやうになりました。著聞集の書かれました時分になりますと梅毒をさへ病んで居る女房が出来ました。朝顔を合せて朋輩から、

「あら、あなたお鼻がなくなつて居てよ。」

こんなことを云はれて居ます。社會の一角が崩れたのですもの、全體に波動の及んで來ない理由もありません。平安朝末期の亂脈は男が戀を漁り過ぎた結果でなく、太古からある遊女と云ふ階級以外の女が肉を物に代へることを初めたからです。延久の天皇は女の服を五枚にお限りになり奢侈なことの多くをお禁じになりましたが、一度も墮落した女の思想ばかりは本へ戻りませんでした。長保、寛弘の、和泉式部や清少納言には放埒な怪しからんこともありますが、それも猶皆戀愛が原因になつて居て、娼婦の心で其れを行つたのではありません。平安朝末期の女の心には悲むべき蟲が巢くひました。娼婦の心になつたのですもの、財力、権力の少しでも多い男に寄らうとします。父と母との身分の懸隔の甚しい人が「尊卑分脈」を見ても其頃から殖えて居ます。其時分の男の手に成つた「無名草子」か何かにも、小式部のことを評して、「あの人はえらい、言ひ寄つた多くの男に目もくれないで關白家の次男の教道の妾になつて子を産んだ」と書いてあります。教道の妾である位置を捨てて公成と云ふ人と烈しい戀

をして同棲して子を産んで死んだ最後の小式部の心理状態は百年程後の男女にもう解らなくなつて居たのです。天祿の昔に藤原道隆の所へ行つた高内侍は妾になるために行つたのではありません。身分の違いはあつても二人は戀をして堅い結合を遂げたのです。枕草紙に中宮の御父母として處處に描寫されてあるこの二人にも猶若かつた時の幸福な戀愛の影が宿つて居ます。後にはこんなことも少くなつて來ました。娼婦のやうな女性と關係する一方では正妻と云ふ土偶のやうな女を必ず名家名流から求めて來ることになつたのです。

古今集の戀の部を賑はして居ますのは、批把大臣仲平と伊勢の贈答した歌です。大和守繼蔭の娘で、宇多天皇の後宮の温子の女御の侍女の伊勢が身分に懸隔のある戀をしたやうでもあります。仲平の大臣に任官したのはその頃から四十年も後のことです。二人は女の父の不同意を恐れて居ましたが、繼蔭はそのことを知つた時に、若い人は當てにならないのにと云つただけでした。さうして居るうちに、仲平は或一人

の大臣から所望されてその婿になつたのです。伊勢は先見の明のあつた父の繼蔭の手前を非常に恥しく思つたさうです。

人知れず絶えなましかば詫びつつも無き名をとだに云はましものを

霜枯の野邊とわが身を思ひせば萌えても春を待たましものを

わがごとや雲の中にも思ふらん雨も涙も降りもこそすれ

これはその頃の作だらうと思ひます。情人がもう足踏もすまいと思ふと、京に居ることが堪へ難くなつて伊勢は親の任國の大和へ行きました。其處では悲しい心を慰めるために名所見物などをして居ました。さうすると情人の姉で、そして懐かしい懐しい御主人である女御さんから、伊勢に出て来いと言ふ音信たよりがありました。父の繼蔭は是非京へ行け、自分はおまへに結婚などはして貰ひたくなかつた、立派な宮仕の女にするのが最初からの望みだつたと云ふものですから、伊勢は死ぬと思ふ程に煩悶しながら京へ歸つて來ました。仲平は伊勢を捨てようとは初めから思つて居なかつたので

すから、二人の仲を前に返さうと骨を折つて居ました。仲平の兄の時平もまた伊勢の心を自分の方へ引き附けようとしてました。

「弟の云ふことなんか皆嘘ですよ。眞實まことに受けてはひどい目に逢ひますよ。私があなたに持つて居るやうな純な愛をあれが持つものですか。」

こんなことを云つて誘惑に來るのでしたが、伊勢はその人に對しては冷笑して居るばかりでした。仲平には温い情を持たないのでは無いのですが、昔の夢をもう一度續けて見ようとはしませんでした。仲平は兄と伊勢との仲を疑つたりもしました。手紙の返事を呉れないのを恨んで、せめて見ましたとだけでも云つて下さいと云ひますから、伊勢からは見ましたとだけ云つて遣りました。男はそれを恨めしい女の仇名にしました。そして幾年か経ちました。伊勢を歌人として愛しておいてになりました宇多天皇が戀人としてその人を御覽になるやうな日が來ました。伊勢は皇子を一人生みました。其後女御さんはお后に立つて天皇は院におなりにになりました。伊勢の生んだ皇子が八

歳でお薨れになりました時に、仲平は悲しくてならない、慰めやうもないと云ふやうな歌を送つて居ます。院が御出家の後に伊勢はまた自身の才をお慕ひになつた陽成院の皇子と戀をしまして中務と云ふ娘を生みました。

閑院の左大將朝光は美貌な父よりも更に美しいと云はれた人です。野外の行幸の御供に水晶の入つた胡籙を負つて此人が参つた日の美しくさは形容のしやうも無かつたと云ふことです。この人の第一の妻は重明親王の王女で、これも綺麗な人だつたので、輝くやうに愛らしい顔をした姫様もその仲に出来て居ました。四人の子が出来てから朝光は第二の夫人に愛を分けるやうになりました。氣が合はぬと言つて全然離縁をしてしまつたと大鏡などには書いてありますが、實際は全然關係がなく無つて居た譯ではありませんでした。第二の夫人と云ふのは延光大納言と云ふ人の未亡人で年も朝光よりは少し上だつたのです。其夫人は、三十人の美装した侍女を朝光に附けて好遇しました。二十個の銀の器には何時も大將へ供する藥のいろいろが煮られてあ

り、大將の鬘を熨斗で温めるのに三人の侍女が掛つて居たと云ふことです。けれど額にひきつりのある髪は縮れた夫人自身の服装は何時も唯だ練色の綿の厚く入つた着物二枚に白袴と云ふ容貌相當なものより用ひて居なかつたと云ふことです。朝光大將は欲に迷つて第一の夫人を捨てたと諸書には書いてありますが私はそれを信じません。兼道關白の第一の愛子で、閑院と云ふ大内裏を模倣して造つた大邸宅を譲られて居ます上に、姉の後の宮の少からぬ御遺産もこの人が相續して居たのですから、單に利欲などと云ふことではないと思つて居ましたが、この間朝光の家集を讀まうとしますと、開卷第一に朝光の許嫁のことが書いてありました。自分の方では行末の日を待つて居るのに、相手の娘がもう外の人と結婚したと云ふ噂を聞いたので、煩悶した歌をその母親に當る人に送つたことが書いてあります。中納言敦忠の妻が娘にそんなことがあるでも無し無いても無しと云ふやうな返歌を送つたこともその次に載つて居ます。敦忠の娘は即ち延光の夫人ですから、その昔の許嫁の女が未亡人になつた時に再燃し

た朝光の戀であつたのかと私は初めて點頭うなづきました。朝光の歌に、病妻の涙は故人のために流れるのか、自分との死別を思つて泣くのか何方どちであるか知りたいと云ふやうながあります。第二の妻の思想の純一になることが欲求される一方では、第一の妻に對して濟まないいと云ふ煩悶と、第二の妻を偏愛して居るうちに第一の妻が新しい戀を覺えるやうなことはないかと疑つたりして居る跡がその人の作に見えて居ます。外から見た所では朝光の生活は華奢な點から華やかなものにも見え、二人の美醜きはだの際立つて居ることが滑稽にも見えたりせうが、朝光の戀は極めて深酷なものであつたのだと思ひます。花山院が御即位式たかみくらに高御座の上からお見初めになつたと云ふ美しい馬の内侍も朝光の情人だつた女です。誓紙を朝光が書いて送つた時に、

ちはやぶる加茂の社の神も聞け君忘れずばわれも忘れじ

と云ふ返事を内侍はしました。朝光が父の喪に籠つて居ますと、其忌中見舞に圓融院は馬の内侍をお遣しになりました。朝光は翌朝までお使を留めて置いたさうです。

いかてかは夢にも人の見えつらん物思ひ初めし後は寝なくに

之は其時の歌です。どんな事があつても別れないと約束した仲が昔の様でなくなつた時に、自分の所へ預つてあつた手箱を男が取りに寄越したと云つて、

玉くしげ身はよそよそになりぬともふたり契りしことな忘れそ

と詠んだ歌が馬の内侍集に載つて居ます。朝光にはもう一人有名な女歌人の小大の君や、また宣旨と云ふ名の情人もありました。朝光が四十五歳で病氣になつて死にました場所は閑院でもなく、三條の夫人の家でもなく、兵衛佐と云ひました頃から馴染の馬の内侍の處でもなく、延光大納言の舊邸の枇杷殿の一室だつたのです。頼にひきつりのある最愛の人に介抱されて死んだのです。(一九一五年十一月)

一九一五年の回顧

一九一五年は纔かに一ヶ月を餘すばかりになつた。われわれ人類の仲間仲間は歐洲の地

に於て曠古の大戦を繼續し、既に五百萬に近い死傷者を出しながらまだ最後の決戦期に入らないのみか、死の神の鎌は近東諸國までを流血の荒野に化せしめようとして、戦局はますます擴大し、平和が何時恢復せられるかの豫想も立たないで、世界は狂暴と凄慘と悲泣との中に暗憺たる再度の冬を迎へた。併し日本は交戦國の一であるとは云へ、極東に國して居るため、戦争に由つて受ける直接の慘禍は支那と共に甚しく輕微である。加ふるに白耳義の皇室や塞耳比亞の王室の蒙塵と反比例して、日本の皇室は御即位に關する大禮をめでたく擧げさせられ、日本人は皇室と其慶を共にして口口に奉祝の萬歳を高唱した。歐洲の地が日毎に殉難者の墓と傷ましい喪服の婦人とを増す時に、花と旗と燈火とを以て都鄙を飾る私達は何たる多幸の國民であらう。

この一年間に我國の表面に起つたいろいろの事實を回顧すると、其印象の濃厚なものは大抵不愉快な問題ばかりである。日本人の生活が是れだけ誠實と聰明と自由とを加へて、舊日本から解放されやうとして居ると云ふ顯著な事實を擧げることにはむづか

しい。それは世界の進歩に最も遅れた宗教界、婦人界、政界、教育界は云ふまでもなく、日本人中の先覺者を以て任じて居る藝術界、學界、操觚界に於ても共通の狀態である。私達の目が肥えて少少のことに驚かなくなつた點もあるであらうが、概してこの一年間の日本人は理想を缺いた妄動をして居たやうに見受けられる。私達に不愉快な印象を留めたと云ふ事實も悉く暗闇くらやみの恥を明るみへ出したと云ふに過ぎない。醜と惡とを暴露することは、それが人類の敬虔摯實な自覺、正しい道に就かうとする自覺から生じた懺悔の一種である場合にのみ價値を認めるが、他人の罪惡を許くことを目的とし又は自己の過失を誇示することを目的とする風潮のあるのに到つては、明るみへ出した爲めに醜は一層醜を増し、惡は一層惡を誇張するものである。私は風教のためと云ひ、自己擁護のためと云ふ口實の下に爲された事實と言論とが、概ね反對の影響を社會の多方面に及ぼして居ることを思はざるを得ない。それと同時に社會の要部にあつて人目に附く人達が、世界の慘禍から遠ざかつて居る多幸な國民の餘裕を善

用して、どれだけ真剣に自己及び社會の實際問題を省慮して居るか、私はそれを危ぶむ。

其等の人々の中には何程かの改造論を試み、また何程かの新しい具體的施設に着手して居る事實もあるが、或物は表面こそ改造であつても其精神は舊狀を盲目的に壓搾して一層頑硬ならしめようとする保守的運動であり、或物は形式のみ新理想主義若くは實用主義でありながら内容は空疎な凡人の叙情詩的氣分の發作であり、或はまた自己の浮動生活や放縱生活を辯護する一時的口實である。新日本主義、新軍國主義の提唱や軍隊式青年團の施設の如きは前者に屬し、之に反對する文界其他の急進派の言論は多く後者に屬する。婦人運動の如きも、大部分後者の所産であるかと想はれる。兩者ともいろいろに科學的及び社會的知識の色彩を帯びて來たことは進歩に違ひないが、要するにそれもまだ鍍金の程度であつて内から純金化したのでは無く、自大排他の東洋的因襲概念と直觀の美名を借する感傷主義の情感とは其等の科學的社會及び知

識を裏切つて居る。さうして全人を焼き焦す熱誠と、躬ら脰を折り足を爛らす苦行的努力と、他に告白する以前の嚴密な自己反省とを缺くことは兩者とも同一であつて、司令部の爐邊から電話で命令する人達でなければ、のんきらしく沙上に偶語して日の移るに任す人達である。私達の爲に血塗れにならうとする先覺者は何處にあるのか。

私は眞の保守主義者と、眞の急進主義者との根強い爭議と猛烈な戰鬥とを經た國でなければ眞の文明は開けて來くはないかと思つて居る。日本の現狀にはまだ「眞の」と形容すべき兩主義者が少い。彼等は何時でも利己主義的に妥協する。何時でも徹底を避けて安價な姑息に低徊する。少くも今の先覺者に對して私は此不安を持たずに居られない。

思想界で云つても、久しい以前から三宅(雄次郎)博士の議論が急進でも保守でもない煮え切らない態度に彷徨して居るのは今更惜んでも甲斐のないことであるが、私の尊敬して居る浮田、桑木兩博士の議論などにも近頃同様の遺憾を感じる點を發見する

のは意外である。それに比べると田中王堂氏の議論には堂堂とした論理の一貫がある。良人に勧められて常に氏の議論を読んで居る私はそれに由つて私の理性を開発されることは感謝するけれども、併し氏一流の新しい建築術を幾度も親切に教へられて居るだけで、まだ目のあたり其新しい建築を見せられたやうな情意の満足を受けないのはなぜであらう。其建築術も柱とか梁とかの位置だけで、其他の細箇條は閑却されて居る。氏の議論には氣魄があり、骨組があつて、まだ血も、肉も、藝術的情緒も、十分な科學的證驗も備つて居ない遺憾がある。氏はどの大先達さへさうであるから、其他の人達の議論に奥行と實行力との乏しいのは言ふまでもない。問題のために問題を作つて議論を玩具にして居る人達は論外として、多少眞剣になつて自己及び社會の生活改造を唱へる人達にも其日其日の氣まぐれて立てたやうな議論が多く、其人の私生活がどれだけ其議論と一致して居るかと云ふことを想像すると、其議論のすべてが滑稽に感ぜられる場合が多い。

それでは是等の微温な兩主義者はまだ眞の勢力を日本人の上に張つて居ない。多少保守主義は老人の内心に、急進主義は青年の内心に沈潜した勢力となつて居るとは思ふけれど、表面に現れた所は兩主義者とも妄動にあらざれば、空騒ぎである。例へば近年の二の宮宗の鼓吹や神社崇拜の教育はどうなつたか。首唱者である一木氏は現内閣にありながら最早其等の保守運動は音沙汰も無くなつて居る。また例へば私の尊敬する平塚明子氏はじめ「青鞥」一派の婦人達は當初の意氣の脱兎的であつたに關らず、今は大抵温健な妻となり、人並の母となることを急いでしまつた。其人達の共同生活の試験や母子の愛の實感はその人達自身に取つては幸福の獲得に違ひないが、眞の意味で日本に於ける婦人問題の最初の提供」(近刊新日本誌上平塚氏の語)を爲したことを以て自任する婦人達の過程として甚しく物足りない。さうした過程は在來多數の婦人の取つて來た謂ゆる順當な過程である。私なども嘗て結婚に先だつて父祖以來の家業を經營しつつ、尋常でない家運の逆境を支へ、また「單に女性としての結婚生活に入る

のみに満足せず、知識にはた藝術に憧れ、……生活の方便のために愛なくして結婚することを恥ぢながら父兄に叛いて東京に出て、愛人との共同生活を開いて數人の子女の母ともなつて居る。また私は職業婦人としても細細ながら自分だけの獨立を辛うじて十年來續けて居る。斯様な程過は必ずしも婦人運動の先驅者を待つて初めて創められた新事實でも何でもなく、少しく見識ある婦人の間に於ては人並の事實である。それなのに平塚氏は、「私達は極端に反社會的若くは非社會的になつた結果として却て内省的になり、退いて自分自身の教養に心を潜めると同時に、その思想を筆にし、口にすのみならず、自分自身の實生活の上に實現することに、そして第一に自分達と到底相容れない今迄の境遇から脱却するために實行上の色々な努力をしました。例へば總てが舊思想舊形式の上に立てられて居る親の家を出て獨立の生活を始めたもの、新に戀愛を経験し、戀愛それ自身の主張によつて、自由な結婚生活乃至共同生活に入つたもの、または戀愛の創造である子供を挙げ、母親としての經驗を初めてしたものなども

ありました。是等のことが原因となつて、私達の思想は次第に婦人問題のものと内容的な、實質的な、具體的な方面に進んで行つたと述べ、「過去四年間の青糝は……我邦の婦人問題の上に多少貢獻したことも認めねばなりません」と云つて、私達から見れば、常人の過程であることに早くも自讃の口氣を洩して居られるのは遺憾である。平塚氏はまた「私達の中の破壊的な又は反抗的な態度」とか「極端に反社會的若くは非社會的な結果」とか云つて、其初期の行爲を非常に大袈裟に考へて居られるらしいけれども、私から云へば其初期の行爲が常人以上に破壊的にも非社會的にもなつて居ない。もつと幾倍かの聰明を以て、もつと幾倍かの因習打破を徹底せられたのなら、社會は五色の酒が新しい女の附物であるやうな輕浮な取扱をする間隙を與へられないで、平塚氏等の謂ゆる「神聖な仕事」に、最も手應へのある重大な壓迫を加へたであらう。歐洲に於ける十八世紀以來の婦人革命家が受けた壓迫は新聞記者の低級な嘲笑や、機關雜誌の發賣禁止ぐらゐのこととなく、其徒は追放と禁獄と死刑にさへしばしば遇つて居

る。私は決して日本の新婦人に歐洲に於けるやうな狂暴な運動を望まない。寧ろ以前から堅實な言動に由つて目的を達することを期待して居る者であるけれども、世間の嘲笑や官憲の發賣禁止を重大な威歴だと思つたり「卑俗な流行問題であるかのやうに輕浮な取扱」を受けねばならぬ程度に自己反省の乏しい輕佻な言行をも敢てして置きながら、其れを「極端に反社會的な若しくは非社會的な」態度として自ら大袈裟に是認せられるやうなことは餘りにお嬢様的である。私はそれを以て世間の識者を反省せしめると共に、凡俗の集團である社會の方から却て狂暴な反抗を受けても悔いなく、最も徹底した最も堅實な改造運動が新しい優越な婦人の間から起ることを望み、ただ少しも其程度に達しないで陳腐な形式の夫婦母子の生活に妥協して行く風のあるのを甚だ嫌らず思ふ者である。

今年の社會事象の中で私の嬉しく思ふことは文部省の學制改革案に婦人の大學教育

を是認したことである。案の前途はまだ不安であるけれども、之に對する社會の反對の微弱なることは兎に角、人としての婦人の位地を向上せしめる希望が識者階級に行き互つて居る證據として感謝せねばならない。私は近く本誌で述べたやうな理由から、小中學より大學に到るまで男女の混合教育を出来るだけ實施して欲しく思ふけれど、其れが尙早いと云ふことなら女子高等師範を初め全國の有力な女學校に大學部を置き、津田女史の女子英學塾、三谷民子氏等の女子學院、吉岡彌生女史の女學校などは率先して女子大學に改めることにして欲しい。反對論者は婦人自ら高等教育を希望して居ないのに女子大學の施設は無用だと云ふかも知れないが、文明事業は何時でも銳感明識な少數者の未來を見透した意見に導かれるのであつて、最初から民衆の大多數が同時に内から要求すると云ふものでない以上、それが有用な施設なら目下の事情はそれを許すに困難であつても、其困難を排して實施を急ぎ、渠ほらを設けて水を招くべきである。國民の要求に先だつて憲法政治を布いた明治の急進政治家は既に耄癡の境にある

が、かの急進的精神は何時の世にも急進政治家の理想でなくてはならない。

世界の實狀に迂濶な常識家は學校の過多と云ひ、中學の増加したことを高等遊民の激増した原因などに數へるが、歐洲諸國に比較すれば男子の大學すら我國には少な過ぎる。五六箇所的女子大學が出来たからと云つて、日本の人口に比例して決して多くはない。併し名實の伴はない大學なら無い方がいい。私は男子に對しても、菊地案の低級な大學が不賛成であるばかりでなく、女子に對しても米國あたりに多い低級な大學は好ましくない。其不可なる理由は從來唯一の女子大學が名ばかりの粗末なものであるため、其卒業生が男子の私立大學ほどにも實力を備へて居ないので明白である。私は大學教育を萬能なものとは思はないが、飽迄も知識に於て最高の學府たる實を示すのでなくては、其名は女子中學でも差支ない譯であると思ふ。

序に、小中學から無用な學科を省けば二三年の短縮を見ると云ふ論者のあるのは、私が近く本誌で同様のことを述べた所感に對する有力な聲援である。高田文相と教育

調査會の人達とが是等の點にも英斷を施されるやうに望んで置く。

生田花世氏の或告白が動機となつて貞操問題が盛に論議せられたことも、今年の特色であつた。之はあながち新聞記者に操られた流行問題であるとはかりは決められない。流行問題であるにしても一時の出水が地味を肥すやうに何程かの眞面目な反省を世人に與へて居る。引いて男子の貞操と云ふやうな問題までが誘導された。私は可成久しく自分の體驗して居る實感から貞操は自分に取つて道德でなく、道德以上の或物——潔癖、趣味、信仰の類であると述べた。それに對して丁酉倫理會雜誌に中島徳藏(?)氏が駁文を惠まれたと云ふことであるが、其雜誌を買ひそこねた爲にまだ讀まずに居る。中島氏の論旨は知らぬが、此問題に對して偶々私と論旨を同じくして居る人達に松本梧郎、安部磯雄二氏があるばかり、他は道德として貞操を維持しようとする議論が多數である。私達の解釋では貞操は個人の嗜好する美の一種である。之があるが

爲に其人の品性を美しくし且つ其人の幸福感を増しはするが、之が無くとも其人の生活には差支ないものである。若し之を道徳として未來にも維持しようとするには幾多の疑義と矛盾とがあるから、それを先づ解決した上でなければ肯定が出来ない。私達の新道徳は自ら考へて情理の上に不安のない自制律を要求するのであるから、盲従を強ひる神權的道徳や感傷的道徳の調子があつてはならない。(一九一五年十二月)

妻の意義

同じ「妻」と云ふ語で代表される境遇に居ても、近頃の若い婦人の間には其妻としての意義が従來のそれと多少變化して居ると思ひます。私自身の生活にしても従來の「妻」と云ふ語が持つて居る意味の外に出て居ります。之は結婚した最初から十五年後の今日迄一貫して居る實感ですが、私は未だ單に妻としてばかり生活して居ると思つて居ません。

私共の結婚は媒酌人が先に立つて居ない、二人の愛の交感と思想上の理解が先になり基礎になつて居ります。雙方の靈と肉を愛重し合ひ愛重され合ふ關係に由つて對等に協力して生きて行かうとするのが私共の實行して居る結婚生活です。愛の交感も思想上の理解もない男女が、男は女を見くびり、女は男に頼り過ぎて屈從しながら、^三それにて良人であり妻であると云ふことは私共の堪へ得ない所です。

私が良人に對する時は、良人の戀人として、良人の一種特別な親友として對して居ります。「妻」でなくて佛蘭西語の「アミイ」と云ふ語の意味で生活して居ります。私も時に自分を妻として書きますが、其場合の「妻」は「アミイ」の意味なのです。

従來の「妻」には娼婦と婢との意味があり、弱者と隷屬者の意味があり、或は盲目の愛と無智の柔順との意味があります。それは一人前の女が正しく主張すべき個性の尊嚴も生活の自由も無い世界です。保守思想の教育者が如何に其意味の良妻を作らうとしても、今後の聰明な女は男と對等の實力と位置とを備へた結婚生活の方が自身の爲に

も良人の爲にも乃至社會の爲にもより幸福であることを悟るてせう。

男と對等の實力と云ふのは思想の獨立と共に職業婦人としても自活して行かれる丈の勞働的實力の伴ふことです。思想が健實であれば貞操上の不徳などは勿論起る筈がありません。自身で衣食することが出来れば賣淫的の結婚をする筈がありません。

(一九二四年五月)

男に對して

題を頂いて歌を詠む氣がします。自分は今全く斯様な題の下に書くべき何物をも持つて居ません。自分は近頃ますます男性が端睨すべからざるものになつて來ました。唯だ眩まぼろしく思つて仰ぎ觀る計りです。

世界は男子の世界で、女子は之に使役せられて居るに過ぎないと云ふのが實際である。古くから男子が斯かる優勢の地歩を占め、女子が遅延として附隨して居ると云ふ

には、諸種の深い原因があるてせう。必ず生理學者や心理學者の猶一層の研究を經ねばならないてせう。女子の歴史が常に弱者の歴史であるのは云ふまでもない。之には何か斯くまで弱者にならねばならぬ悲しい原因が女性の上に運命づけられて居るのでは無いてせうか。すべての生物の女性が何れも男性に比して弱者であり、人間も同じく其例に洩れないと云ふ事實に對する精緻な研究の結果を知りたいものです。

「我も人である」と云ふ自覺が近頃の女子の間に起つて來たのは甚だ結構な現象ですが、其「人」と云ふのには今の處は勿論、猶永久に亘つても、男子のそれに比べて非常な割引をし幾多の條件を附けねばならないのでは無いてせうか。自分は進歩してゐると云はれる歐洲の婦人を見ても此疑感を消すことが出来ませんでした。

併し斯う云ふ根深い疑感がある一方に、男子と對等の教育を受けたい、男子と對等の知識や感情を養ひ、同じく男子の事功と合奏し得る丈の事功を建てて自分の「生」を豊富にしたいと云ふ自分が年來の欲望は毫も頓挫する譯でなく、彌いよいよ増に募るばかりで

す。それで自分に對し、自分の幼い娘等に對し、引いて一般の日本婦人に對して新しく希望する處は澤山あるのですが、男子の爲めにと云つては何事をも要求しようと思ふ希望がありません。たとひ希望があるにして自分等が註文する程の事は男子同志の間で百も承知の筈です。自分とても政治がどうの、日本人の海外發展がどうのと云ふ様な問題には少からず興味を有つてゐますから、自然いろんな感想も湧いて参ります。が、それは知識の貧弱な女の差出口を待たなくても男子の間で男子の問題として現に攻究されもし、次第に處理もされて行くのです。

自分は今の女性が男子に對して何の註文をも提出すべき資格が無いと信じて居ります。自分は固より古い女ですけれど、猶日に新しくなれと祈り且つ自ら實行を勵んで居るのは、男子に匹敵する丈の内生活の充實緊張と經濟上の獨立とを得たいと思ふからです。此自分の覺悟は之を押擴めて一般の婦人にも勸めることが出来やうと思ひます。低級な男子も少し心ある者はしないやうな輕佻と賤劣とを極めた言動を敢てし

て一時を快しとするのが謂ゆる新しい婦人であるなら、それはサハラの僭王とひとしく自分の尊敬する所ではありません。現代に於て眞に聰明にならうとする謙抑な女は何よりも自分を修めるために専心に勵むてせう。男子と對等の生活は營めないにしても、せめて男子の手足まといにはなるまい、出来るだけ男子の負擔を軽くしようとする力するであらう。世上既にさう云ふ婦人が續續殖えて行くのに對して近來の男子が甚だ寛大であるのを切に嬉しく思つて居ります。(一九一四年五月)

現代人らしく

「女らしく」といふ言葉が常に女に對する批評の標準に用ひられて居る。女を誨へる者は「女らしくせよ」と誨へ、女を咎める者は「女らしくない」と咎める。其意味は「女らしく」と云ふことを女の最善最善な理想的標準として居るのである。之が果して其様な結構な標準として今後の女に當てはまるものであらうか。抑も此言葉の含んで居

る思想は、女は内氣であれ、謙遜であれ、遠慮がちであれ、貞淑であれ、慎しやかであれ、優美であれ、弱弱しい者であれ、従ふ者、頼る者であれ、先に立たずに第二第三の者であれ、高く叫ばずに低語く者であれ、走らずに徘徊する者であれ、創める者でなく守る者であれ、憤る者でなく泣く者であれ、笑はずして微笑む者であれ、知る者でなく働く者であれ、と云ふのである。女の個性の發現を靜的な、消極的な、陰の世界の範圍にのみ留めて置かうとする思想である。

昔の男女の位地は主従の關係であつたから、多數の女は此思想に従つて男に支配されながら控へ目な生活を營んで居た、また社會の表立つた事はすべて男の仕事であり、衣食住の事はすべて男から養つて呉れるのが原則であつたから、女は進んで積極的な活動を試みる必要が無く、甘んじて男の手足になつて居ることが出来た。其れが女に取つて安全な世渡りの道であつた。また昔の女とても全く其れに甘んじて居た譯では無かつたが、學問に由つて理性や感情を高めたり鋭くしたりすることを許されな

かつたから、其陰の世界の消極的な生活が自己に取つて半分の生活しかして居ないと云ふこと、畸形な生活だと云ふことを知るまでに心の眼が開かなかつた。併し今や人間の生活は一變した。男も女も古風な生活の様式にばかり絶つて居られぬ時代となつた。曾て「文明開化」や「四民同權」などの文字を旗印として、世界の新知識を集めた生活を開創出した第一の新人である今の祖父達や親達が、大正の世に「個人の解放」を叫ぶ第二の新人を子孫として持つに到つたのは順當な世態の進歩では無いか。

祖父達や親達が明治の生活の改革者であつたやうに、我々は大正の生活の改革者でなくてはならぬ。時と共に改めて行く新しい生活でなくては最早我々の生活とは云はれない。進歩せぬ生活は死んだ日送りである。そして祖父達や親達の改革は概ね外面的であることを免れなかつたから、現に日本の文明は形の上で略ぼ歐米の文明と並行して居ながら、其實質は遙かに歐米のそれに劣つて居る。我々の改革は更に内へ向いて、自分自分の個性を舊い不用な習慣の繫縛から解き放つことを旨とせねばならぬ。

之が今日の若い男も女も、道徳を初めとして學問、藝術、宗教、教育、あらゆる精神的の生活に「新」の字を加へねば已まぬ理由、嚴肅な、且つ必要な理由である。既に形に現れた生活の上に「維新」を實行して世界の文明に倣ひながら、内心の「維新」に向ひつつある今の青年を咎める親達のあるべき筈がない。

今日どんな片田舎へ行つても外面の生活に歐米の匂ひのせぬ所がない。燐寸一本でも、リボン一筋でも歐米の文明の影響である。如何に頑固な保守主義の家にも新聞がある、時計がある、洋杯がある、靴がある。學校に子女を學ばせるのも歐米の風である。誰れも皆歐米に範を取つた法律に支配せられて居る。我々の親達は此様に世界の文明を形式の上に愛重して居ながら、その子女が世界の文明を内心に取入れようとする「個人の發展」を拒む理由があらうか。斯う考へて來ると、かの「女らしく」と云ふ言葉は最早今日の女を律する標準にはならない。女は更に他の半分の生活、動的な、積極的な、陽ひなたの世界の生活のあることに氣が付き出した。それは「教育」が女の心を久し

い眠ねむから覺して、第二第三の者でなく生活する自由な世界のあることを教へて呉れた爲めでもあるが、更に他の理由は、社會の經濟状態が女を解き放つて、餘儀なく男と對等に競争し、生活の獨立を計らねばならぬ境遇に押出し初めたからである。

從來の女は男に嫁しさへすれば衣食住の保障が備つて居た。謂ゆる「女らしく」して男に縋つて居れば無難であつた、併し今は多數の男が其一身の衣食住をさへ持て餘して居る時代であるから、知識に於ても財力に於ても、男より幾段か貧しい日本の女は、以前のやうに結婚を唯一の目的とすることは出来ない。結婚が必ずしも容易でないとするれば、經濟上の獨立を計らねばならぬ。それには知識の修養が必要になつて來る。たとひ又結婚が出来ても財力が備はつて居ても、男子から從屬物扱にせられ、共に語るに足らぬ者とせられる、謂ゆる「女らしく」の畸形な生活に甘んじて居る程最早今の女は無自覺でないから、精神的にも男の相談相手となり得る丈に「自己」を造り上げようとするのである。従つて知識をも感情をも出来る限り男と對等に修養することが必

妻になつて来た。それで今の女に望むことは「女らしく」でなくて、男にも女にも共通な「現代人らしく」と云ふことである。(一九一四年七月)

夏

自分には夏をどう暮すなどと云ふ決つたこともありません、偶に旅行することがありますが、一晩か二晩のことですから避暑にも何にもなりません。行水を使つて浴衣を着る、それだけでも夏は嬉しいのです。冬などとは比べものではない位に思つて居ます。花屋の店を見るだけでも嬉しう御座います。私は暑い故郷の夏さへも好きだつたのですから、東京の夏に満足して居ます。併し大體はさうでも、利那利那に氣分の變る私ですから、今日のやうに暑い日が續いたらまた何と思ふかも知れません。

どんな家作りが好きかとはつまり私に空想をお話させることになるのですか。百萬圓のお金があれば私は日本風の家を建ててせう。拾萬圓のお金があれば西洋風の家を建て

るてせう。もつともつとお金持であればいろんな家をいくつも持つてせう。京の智恵院のやうな家の一つはあつても宜しう御座います。私の嫌ひなのは三階建などの宿屋の建築です。

近年夏はモスリンの浴衣ばかりを着て居ます。肌觸りが一番好いからです。あまり模様の好いのがありませんので、それだけは困ります。

夏は鮎の焼いたのや鱧はらの吸物で御飯を食べるのが好きです。日本酒は飲みません。葡萄酒などは少しぐらゐ頂きます。夏は冷たい水をよく飲みます。(一九一四年六月)

婦人改造と高等教育

婦人教育の推移

我國の婦人界は人の視聽を引く鮮かな現象に乏しいので毎年同し程の平調な経過を取つて行くやうに想はれますけれど、七八年前の婦人界を顧みて比較すると其變化の

非常なのに驚かれます。例へば小松原英太郎氏が文部大臣であつた頃と今日との教育主義の推移はどうでせう。あの頃は世界の大勢に逆行し併せて我我若い婦人の内部要求を無視した舊式な賢母良妻主義が一般女子教育家の聰明を脅かして、近く叙勳された女流教育家達などが倉皇して「女學生可からず訓十箇條」を制定するやうな状態であつたのです。さう云ふ保守的逆潮に對して微力の許す限り不承認の意向を述べた私などは大分厭な批難を舊い人達から受けたやうでしたが、それが今日ではどの有力な教育家も賢母良妻主義以上の教育を主張しない者は殆ど無く、文部大臣自ら學制改革案で女子大學の必要を公認し、また途中で遇ふ男子に目も觸れるなど教へた當年の「可からず訓」制定者達が若い婦人を指揮して街頭に立ち、通行の男子を呼び掛けて花を賣ると云ふ有様にまで變つて居ります。

また其頃に比べると、婦人問題に關する男子側の言論が非常に殖えました。單に婦人の爲の問題として丈で無く、男子自身に係り、社會と交渉し、國民の消長に關する

大事として論ぜられることが多くなりました。人類の半數以上は婦人であるのに、男子だけが舊思想や舊制度から解放されて自由な眞人間の生活を營み、依然として婦人を第二位に置かうとするのは矢張男子の我儘を通さうとする舊思想の維持であつて、さう云ふ偏頗な生活は決して全人類の幸福を齎すもので無く、結局男子自身に取つても不幸の本であることが豫感される所から、在來は婦人の獨立問題を一種のハイカラ思想とし歐米の模倣として反感を持つて居る學者新聞記者達までが、兎に角婦人の向上を計る運動の正當なことを是認し、進んで婦人界改造の獎勵者擁護者となる傾向の加はりつつあることは感謝すべき事實です。同時に若い婦人の間にも幾人かの自由思想家を出だし、其等諸氏の言論が男子側の言論と待つて、直接間接に世人の婦人觀を動搖させて居ることは想像するに難くありません。之は確に日本人の進歩だと思ひます。

婦人の自由思想

第一婦人自身を改造する問題である以上、之に對する婦人の言論が盛になり、其言

論の裏書として婦人の實際生活が改造されねばならない筈ですが、今の婦人界の表面には極めて少数の自由思想家があるばかりで、それに味方し、若くは反対する優勢な婦人思想家の續出する様子がありません。其少数の自由思想家と云ふ人達も謂ゆる「新しい女」の名に由つて喧傳せられ、其言論は比較的世人の注意を引いて居るやうですけれど、思想としては最も大切な個人的自發の力に乏しく、さればと云つて社會的及び科學的知識の體系を備へて男子側の思想家と論理的に太刀打の出来る程度に達して居るものでも無いのです。其等の言論が多少でも世人の注意を惹くのは、兎に角其人達の半透明な自覺と、大膽な發言とが因となり、男子側の識者が歐米から得た新知識に由つて婦人運動に厚意を持つつのと、一般の若い男女が舊思想に對する反動として無自覺に新しいものを歓迎する心理とが縁となつて居るからだと思ひます。また其人達の言論に現れた思想がどれだけ其人達の實際生活を改造して居るかと云ふと、却て其思想に背馳した経過を取つて居るやうに見受けられるのが遺憾です。

謂ゆる中流婦人

私はまた自由思想に目の開きかけた新しい婦人が中流階級の諸所に黙つて分布されて居ることを知つて居ます。世に「新しい女」を以て目されて居る婦人達よりも教育あり、見識あり、徳操あり、社會的經驗ある人達を其中に發見します。其等の婦人達が團體的勢力を作つて先頭に立たれたなら其結果は謂ゆる「新しい女」達の運動に幾倍するであらうと思ふのですが、さう云ふ人達は既に家庭の人になつて居て社會的に活動する勇氣を持つて居ません。衣食の生活に憂ひが無いのですから活動の餘裕はあるのですが、良人や親戚に對する氣兼ねから引込思案になつて仕舞ふのです。それなら肝腎の家庭だけには其人達の理想が實現されて居るかと云ふと、それはどうも曖昧です。矢張在來の習慣に妥協し、また世間普通の主婦がするやうに時時の流行に従つたりして無反省に日を送つて行くと云ふ風です。例へば其人達が子供を育てるにしても、食物や服装などに注意が届くだけで、精神的の教育に就ては自分の意見を基礎にした方

針と云ふやうなものが決つて居ません。殊に女の子を育てるには一己の見識があり相なものですけれど、他の家庭で琴が流行れば琴を習はせ、舞が流行れば舞を習はせると云ふ有様です。學校教育の外に幼い時から遊藝を學ばせると云ふ事が好いか悪いか、遊藝と云ふものの將來の價値は如何、さう云ふ餘技に精力を消費させると云ふことが昔から女子を知識から遠ざからしめた一因になつては居ないか、かう云ふ點に就て深い反省が拂はれて居ないのを見ると在來の無智な類型的婦人と異らないことになります。また眞劍に子女の教育を思ふ家庭の婦人なら今の小學初め他の中等程度の學校教育に對して幾多の不滿が無ければなりません、其人達は學校の爲すが儘に放任して居ます。例へば小學で作文を教へるのを見ると、大抵の教師が或題の下に豫め斯う云ふ風に作れと云つて舊套的な概念を授けて書かせます。其れてどの生徒の作つた文章も其内容は同じ物で、唯だ文字の末節が少し異なるばかり、生徒自身が頭腦を働かせて個性の新味を示した物は殆ど現はれて居りません。さう云ふ教育法は人間の個性を殺

すものですから母たる者は學校に向つて抗議するのが當然ですけれど、竊に聰明を以て任じて居る其等の新主婦達は全くかう云ふ事實を等閑に附して居ります。

私は突飛な、また過激な言動が必ずしも改革者の言動であるとは思ひませんが、かう云ふ平穩な、悪く云へば煮え切らない婦人界の進歩的傾向を齒痒く感じます。

生きたい意欲

茲に私の希望を述べます。私達日本婦人は遅蒔ながら今こそ一齊に目を覺して自身を反省せねばならない時です。何が爲に生きて居るのかを知らずに盲目的な日送りをして居た私達は何よりも先づ自分の生きて行きたいと望む意欲が人生の基礎であり、其意欲を實現することが人生の目的であることを徹底して知るのが第一です。自己の絶對的尊嚴の意味もそれと領解されます。何時でも自己が主で、家庭生活も社會生活も自己の幸福の爲に人間の作爲するものであると云ふことを知るのが同時に必要です。目の開いた人間の意欲は狭い利己主義の自己にのみ停滯して居ません。其等の

機關を善用して家庭生活、社會生活、國家生活及び世界的生活までを自己の内容に入れ、最初は五尺大であつた自己を宇宙大の自己にまで延長する爲に必要な自由を欲し、自己以外の權威に壓制されることを欲しません。

私は生きようと望む意欲を愛其物だと考へて居ます。愛は徹頭徹尾自己の生に執着する心ですが、利己主義の愛から始まつて宇宙を包容する愛にまで擴大されねば愛自身満足を得ないものだと思つて居ます。従つて愛は自由を要求します。其自由は何に由つて得られるかと云ふと智力に富むことが必要です。

私共は此智力の點に最も無力であることを知ると同時に、其れの開發に非常な勤勉を拂はねばなりません。いつの昔にか婦人が男子の下風に立つて侮蔑を受ける端緒を開いた最大原因は智力を鈍らせたからだと思ひます。智力は人生の眼です、之が無ければ愛も盲目の愛であり、生活も蛇に怖ぢない盲人の妄動になつてしまひます。

婦人と智力

野蠻時代には人間の強弱を主として腕力で測りました。また腕力の變形である武力で測りました。けれど今では強弱の意味が精神的のものに移り、主として智力の多少が人類を強くも弱くもすることになりました。腕力や武力を以て優越の地位を占めようとすることは野蠻の遺風であり、それが今日にも猶役立つことのあるのは文明の矛盾だとせられて居ります。此度の大戦争などは何う考へても一時の變調であつて、將來の生活に對しては時代遅れの武斷主義者を除く外何人も武力を拒否する豫感を持つて居ない者はありません。また已むを得ず維持されて居る現今の武力も其裏面には智力が支配して居て、單獨に役立つ武力と云ふものは無くなつて居ります。それですから今後の強弱は男も女も智力の多少が最大要素です。

女の無智は今更のことと無く、昔から其れが爲に女自身も苦痛と侮蔑を受け、男も多大の迷惑を被つて居ます。女が饒舌だと云ふのも、一は物事を正視して其大體と中樞とを掴むことが出來ず、枝葉に走つて筋の通らぬ感情的な發言をくだくだしく並べ

るからであり、一は靜かに内省し默想する所がない爲に充實し精練された言語で簡明に述べる丈の何等の深奥な思想や的確な意見を持つて居ないからで、要するに原因は無智にあります。また女が感情に偏すると云はれ、氣分に左右されると云はれる程僅の事にも喜怒哀樂の變化が著しく、男をして女子と小人は養ひ難しとまで歎せしめたのも感情を調整するに必要な智力を缺いて居るからです。また女が専ら愛情の世界に住まうとするのも無智の弱點を無意識に掩蔽しようとするからであつて、女が特に男子よりも愛の深い先天性を備へて居ると云ふ譯では無さ相です。其愛と云ふのも智力に介添されない盲目の愛ですから大抵利己主義的の愛に停まつて居ます。ワイニングルが「女は我子に對しては母であるが、他人の子に對しては全く繼母である」と云ふ意味の事を云つて居る通り、自分に親しい戀人や子に對しては絶對服従をも厭はぬ位に犠牲的な愛情を捧げながら、自分に叛いて少しでも厚意を持たない者に對しては忽ち冷酷な態度を以て對し、愛する者の言ふことは一も二もなく盲從しながら、反對な者

の言行は悉く猜疑の目を向けます。殊に同性に對しては意識無意識に敵視する感が附き纏ひ、相手の弱點を發見せねば已まず、表面では褒めそやしながら時を置かずに陰口を利く風があつて、男同志が偽らず飾らずに心と心を照し合ふやうな女同志の親友と云ふものは殆ど無いと云つて宜しい。是等も公平な智力の判断を缺いて居て他人の長所を尊敬することが出来ない爲であり、みづから内に恃む所が乏しいので動もすれば我が弱點に乗ぜられはしないかと思つて出来るだけ自己を隠蔽し、却て他人の弱點を摘發して無意識に自分の慰安にしようとする爲であると思ひます。また女のヒステリイと云ふものも生理的に原因する所と無智から起す感情の我儘とが相半してゐるのであつて、若し理性的に自制することに力めたならヒステリイに由つて自他の苦痛を作ることとは屹度半減するに至るでせう。女が自分の見識や立案で自分を整調し外界を改造する征服性を缺いて、他人の意匠や指導に従つて安易な路に就かうとする順應性に長じて居るのも、要するに無智が然らしめた第二の性癖だと思ひます。

智力的對等

それで私共は何よりも智力の優强者とならねばなりません。私共が男子と對等の地位に進みたいと主張するのも一概に男子と職業を同じくしよう、其實力も無いのに男子と政治上や民法上の同権を得ようと云ふ意味では無く、先づ智力に於て對等の強さを得ようとするのです。之は婦人が物質的から精神的に進み、依頼主義を取つて男子の足手まとひになつて居た者が一人前の獨立を遂げようとするので、男子の側から考へて頂いても眞の伴侶が出来ることですから當然歡迎されるべき性質のものだと思ひます。私共は男子側が私共の希望を容れて高い智力の教養を許されるなら、決して男子に反抗するやうな不遜な態度を取らうとする者ではありません。私共は今日の場合、智力に於ても何に於ても明かに男子の優越を認めて、私共婦人が遙に劣弱な位地にあることを愧ぢ、敬虔な心から事毎に男子の教に聞いて、大急ぎで男子と對等な處まで智力の充實を計りたいと思つて居ます。男女の智力の不權衡が人生の調子をどれた

け狂はせて居るか知れないことに氣が附いて居る聰明な男子、眞の聰明な男子なら屹度私共に對し厚意の助勢を惜まれないだらうと信じます。

婦人と大學教育

此意味に於て私共は大隈内閣の文部省が女子大學の必要を公認したことを感謝します。また成るべくどの男子の大學でも婦人の聽講生を許すに至ることを希望します。また世の父兄が高等女學校乃至現在の女子大學程度の授業を以て女子に高等教育を授けたかの如く誤解されないやうに希望します。男子の大學とても皆が皆今の状態では高等の智力を鍛へる處とは限つて居りませんが、まして高等女學校は夙はるかに男子の中學に及ばず、女子大學は到底男子の高等學校に比較し難いものです。其等の卒業程度を以て父兄が女子の高等教育を打切るのも早計ですし、其等の卒業生の社會に出た後の成績を以て女子の高等教育を是非するのも輕率です。併し如何に高級な女子大學が多數に設けられ、男子の大學が女子の共學を許すにしても、現在の家庭の經濟事情と

現在の女子の知識状態では大學教育まで受け得る婦人が極めて少数であることは明白です。また女子の高等教育を一般に是認させる必要から特に大學教育を云云しませうけれど、智力の充實は必ず大學教育に限つた譯でもありませんから、日本人は此意味をよく領解して大學過重の弊に陥らないやうにし、父兄と女子自身との心掛次第で如何なる高度の智力でも修養し得るものであることを知つて、女學生は勿論、既に人の妻たり母たる生活に入つた若い婦人までが、讀書と社會的接觸とに由つて出来るだけ各自の智力を高く且博くするやうに努力して欲しいと思ひます。

私の言ふ智力とは學識の量を云ふので無く、物事に對する理解力を意味するのです。學識の量を云ふのなら到底専門學者に及ばない譯ですが、理解力は學者的態度を取るに及ばず、實際生活の直接經驗と書物に現れた學者先覺者の議論の過程及び結論とを以て常に自分の常識を新しく補充しながら、何事に對しても部分に偏せず、表面に停滯せず、全體と核心とに正しく透徹した理解味到を持たうと注意さへすれば自然に花の

綻ぶやうに内から開けて來る直覺作用です。

婦人と讀物

私の度度述べることですが、特に「女の讀物」として書かれた底級な物許りを讀むのは、大人が子供のお伽話を讀み耽るのと同じく、自分をわざわざ低能化しつつあるのだと思ひます。私共は婦人に關する或特殊の必要な書物の外は成るだけ男の讀物を讀む習慣を附けて、現代人として知るべきことを男と對等に知識しようと努力せねばなりません。女の中に歡迎される種種の婦人雜誌などは何れも女の感情に媚びて編輯された甘たるい分子が多く、男の世界では既に常識になつて居る程の科學的及び社會的知識すら供給しない物です。私共は最早娛樂の爲に物を讀むやうな呑氣な生活をして居られないのですから、出来るだけ自分の力以上の讀物を研究的に讀まうと心掛けねばなりません。

今日では教育があると云はれる若い婦人さへ若い男子の讀む十分の一の讀書をもし

ない有様です。近頃の新聞や男子の讀む雑誌には可成有益な學說が掲載され、また現代人として眞面目に考へて見ねばならぬ個人及び社會の問題が幾つも記載されて居るのですけれど、婦人はさう云ふ大切な點に目を着けず、唯だ自分に解り易い感情的凡俗的の記事許りを愛讀して居ります。それですから男子の前で話が少しでも智力を要する問題に及ぶと厚顔ましく支離滅裂な冗辯を並べるか、謙遜して口を噤んで仕舞ふかの外ありません。偶ま若い婦人で思想論などをする知名な人があつても、それが多くは婦人の發言である所から世の注意を惹くだけで、大抵の男子には出来る議論であり、男子の議論としてなら一顧の價もない程度のものです。例へば日本民族の將來とか、日本政界の近状とか云ふことを質問されて、即座に一應の論理と實感味とを備へた明快な解答の出来る婦人が幾人あるてせう。此一事でも婦人が國民として又は社會の一員としての生活に平生何の省慮も持つて居ないことが明白です。またさう云ふ公人的の問題でなくて、現に母として子を教育して居る人に「教育の目的」を問ひ

久しく妻たる境遇にある人に「結婚の意義」を問うた場合、人前に出せるだけの情理を一貫した意見を述べ得る婦人が幾人あるてせう。婦人自身に最も切實なさう云ふ問題に對してさへ一定の見識が無く、それに就て是非解決せねばならぬ程の強烈な疑惑煩悶も無いのが我我婦人の實狀です。

讀書と家政

婦人に讀書を勧めることに對して、婦人を家政から遠ざからしめるものだと批難があるかも知れませんが、近頃米國で婦人の參政權を許した各州の成績を男子側から公式に報告せられた所では、どの州の婦人も一齊に豫期以上の良好な成績を舉げて居て、家政を疎かにした婦人は選舉の時にさへ一人も無かつたと云ひます。智力の優つた米國婦人の行爲を私共が一足飛びに學ぶことは困難でせうが、屋外行動の伴ふ政治に關係するので無く、私共は家庭内にあつて讀書の時間を得ようとするのですから、心掛次第で十分家事と並行させることが出来ると確信して居ます。日本婦人の平生は

家政以外のくだらない事で随分だらだらと無駄な時間を費して居ます。其家政と云ふのも少し努力すれば簡易に済ますことの出来る餘地が幾らもあります。また茶の湯とか、插花とか、遊藝とかの稽古事で過當な時間と精力を費して居るのも非現代的だと考へます。私共は倫敦の婦人が少しの暇さへあれば家庭でも電車の中でも書物を披いて居る熱心と聰明とを學ばねばなりません。

それから私共婦人の互に戒めねばならぬことは、どんなに讀書をしても、またどんな物事に理解が出来初めても、其れを誇るべきことのやうに思つてはならないことです。私共は飽迄も謙讓と慎重とで終始しなくてはなりません。さなきだに婦人の性情には少し學問でもすると半可通を振廻したがる悪習が潜んで居ります。さう云ふ女性の悪習を一掃することも私共が智力を養ふ理由の一つであることを自覺して掛りたいと思ひます。佛蘭西未來派のサンボワン女史が三四年來、婦人自ら内にある女性を絶滅せねばならぬと叫んで居るのも、女性の一切を不純不良な物として誇張した嫌はあり

ますが、婦人が兎角見て見ぬ振をして居た自分の最大缺點を暴露してそれを絶滅しようとする誠意と勇氣とは私共の學ぶべき所です。

高度の智力は婦人をして自重と謙讓と貞淑との必要を明かに理解させますから、家庭及び社會が其程度にまで婦人みづから教育しようとする氣風を奨勵擁護して頂きたいと思ひます。其程度にまで達しない粗末至極な教育を施して置きながら、學問が一概に婦人を生意氣にし徳操的に墮落させる物のやうに臆斷する世人の多いのは心外です。低級な學問をした者が輕舉妄動し諸種の誘惑に身を誤り易いのは男も同じ事です。婦人の智力の向上は婦人自身の發奮が何より太切ですけれど、周圍もまた男女に由つて教育の待遇を分つ悪習を自ら反省して頂かねばなりません。(一九一五年十二月)

髪

わたしは真中で前髪を分けた少女の頭を、無駄な消費者を見るやうな心細さで眺め

て居る。それ程以前からの流行でもないから、六歳七歳より十三四歳に至る其少女達の髪に分目はまだ太抵白く底青くていかにも美しい。わたしはそれを無駄だと思ふのである。人の顔は七分三分に分けて額を角かくに作るよりは、真中で分けて菱額ひしぎのにした方が優しく見える。て西洋の若い女の八分迄が前髪を真中で分けて居る。六歳七歳はもとより、十四五の子までは皆角額である。彼方わがちの親は娘が妙齡になるまで白い底青い髪に分目を保たせるために、子供の間はどうしてもいいことにしてあるのである。いかに毛の厚い濃い人でも何時も變らない處で髪を分けて居ると、七八年、永くて十年もすると黄色になり赤茶けて來て終には禿げる。佛蘭西の詩人は若い戀人を讚めて、君はまだ髪に分目が廣くなつて居ないと云つて居る。此頃のやうな頭をしたままで大人になつた時、日本の令嬢はそんな讚辭の受けられないことをわたしは悲觀するのである。日本の女のやうな丸前髪に歐洲の人のするのは、それは分目がもう廣く禿げて來て分前髪に出來ない人が重にするのである。て、そんな髪かみの結むすひ様をした女を見ると

凋落の寒さが感じられるのである。わたしはもう七八年経つた時、日本の若い女が誰も真中で前髪を分けることが出來なくなつて居ることが目に見えて悲しいのである。

(一九二四年九月)

母性偏重を排す

トルストイ翁に従へば、女は自身の上に必然に置かれて居る使命、即ち勞働に適した子供を出來るだけ澤山生んで是れを哺育し且つ教育することの天賦の使命に自己を捧げねばならぬと教へられ、またエレン・ケイ女史に従つても女の生活の中心要素は母となることであると説かれる。さうしてトルストイ翁では男の勞働に對しては餘力ある女の助力が非常に貴いものであるとして許容せられるに反し、ケイ女史では女が男と共にする勞働を女自身の天賦の制限を越えた權利の濫用だとして排斥せられる相異がある。またトルストイ翁では男女の生活の形式は異つて居ても一般の天賦に於ては全く平等であると見られるのに反し、ケイ女史では自然が不平等に作つた男女の

生活を人間が平等にしようとするのは放縱であると見られる相異がある。併し體的勞働と心的勞働が男に屬する天賦の使命であつて、女にはそれが第二義の事件であると云ふ思想は二家共に一致して居る。

かう云ふ二家の主張と、之を繼承し、または期せずして之と同調の思想を述べる主張が世に謂ふ母性中心説である。私は此説に對して疑感がある。

誤解を惹かないために豫め斷つて置く。私は母たることを拒みもしなければ悔いもしない、寧ろ私が母としての私をも實現し得たことに其れ相應の満足を實感して居る。誇示して云ふので無く、私の上に現存して居る眞實を有りの儘に語る態度で私は之れを述べる。私は一人または二人の子供を生み、育て、且つ教へて居る婦人達に比べて其れ以上の母たる勞苦を経験して居る。此事實は、此に書かうとする私の感想が母の權利を棄て、若くは母の義務から逃れようとする手前勝手から出發して居ないことを證明するであらう。

女が世の中に生きて行くのに、なぜ母となることばかりを中心要素とせねばならないか、さう云ふ決定的使命が何に由つて決定されたか。私の意識には此疑問が先づ浮ぶ。さうしてトルストイ翁の之に對する答は「人類の本務は二つに分れる。即ち一は人類の幸福の増加、他は種族の存續。男は後者を履行することが出来ないやうにされて居るので、主として前者にまで召命されて居る。女は彼等のみがそれに適して居るので、全然その後者に召命される。……其本務は人間に由つて發明されたもので無く、物事の本性的にあるのである（加藤一夫さんの新譯「我等何を爲すべきか」に據る）と言はれる。

此答を得て却て私の疑感は一層繁くなつた。それは恐らく私の思慮の足りないせいであらうが、私にはトルストイ翁の此答の中に重大な誤謬が含まれて居るやうに想はれない。翁は男女の本務が物事の本性的の中で豫定されて居ると云はれる。「物事の本性」とは男性は男性の本質、女性は女性の本質の意味であらう。私は其れを考察してみ

た。さうして私は「物事の本性」が男性女性と云ふ外面的差別の奥に「人間性」と云ふもので全く内面的に平等であることを見た。さうして人類の本務はトルストイ翁の説かれるやうに二つを大別されて居ない。唯だ一つ「人類の幸福の増加」言ひ換れば、より好く生きて行かうとする根本欲求の實現の外に何も無いのを見た。之が人間性の全部である。

私の考察が間違つて居ないなら、此唯一の根本欲求には人間の萬事が含まれて居る。トルストイ翁の言はれた「種族の存続」も其萬事の内の重要な一大事として私には見られる。さうして人類の本務——人類の幸福の増加——には總ての人間が平等に参加し、男女の性に由つて外面の状態に差別はあつても、本質的には男も女も平等の人間として人間性の完成に力を協せて居るやうに私には見られる。勿論世の中には男女の協力が不權衡になり、中には殆ど男女何れかの力の加はらない事實さへ存在して居る。平等を缺いた其等の事實は總て「人類の幸福の増加」のために無用または有害な事實

ばかりであり、それに由つて世界の調子を失ひ、進歩を遲滞し、悲惨を簇生して居る。例へば男性ばかりで計畫された戦争と云ふ殺人事業のやうなものがそれである。

人間の萬事は男も女も人間として平等に履行することが出来る。其れを男性女性と云ふ形式の方面から見れば、其二つの異つた形式に従つていろいろの異つた状態が履行の上に或は生じたり生じなかつたりするだけである。具體的に言へばトルストイ翁は男は種族の存続を履行することに與り得ないやうに言はれたが、其れは何人にも明白な誤謬である。人間は單性生殖を爲し得ない。男は常に種族の存続に女と協力して居る。この場合に唯だ男と女とは状態が異なるだけである。男は産をしない、飲ますべき乳を持たないと云ふ形式の方面ばかりを見て、男は種族の存続を履行し得ず、女のみがそれに特命されて居ると斷ずるのは淺い。性情の圓滿な發達を遂げた父母の間に子に對する愛が差別の無いのを考へても内面的には男女の協力が平等であることが想はれる。

私は斯うしてトルストイ翁の謂ゆる「物事の本性」を私の力の及ぶ限り透察した。さうして私は人間が其生きて行く状態を一人一人に異にして居るのを知つた。其差別は男性女性と云ふ風な大掴みな分け方を以て表示され得るもので無くて、正確を期するなら一一の状態に一一の名を附けて行かねばならず、さうして幾千萬の名を附けて行つても、差別は更に新しい差別を生んで表示し盡すことの出来ないものである。なぜなら人間性の實現せられる状態は個個の人に由つて異つて居る。それが個性と云はれるものである。健全な個性は靜かに停まつて居ない、斷えず流轉し、進化し、成長する。私は其處に何が男性の生活の中心要素であり、女性の生活の中心要素であると決定せられて居るのを見ない。同じ人でも賦性と、年齢と、境遇と、教育とに由つて刻々に生活の状態が變化する。もつと嚴正に言へば同じ人でも一日の中にさへ幾度と無く生活状態が變化して其中心が移動する。之は實證に困難な問題で無くて、各自にちよつと自己と周囲の人人とを省みれば解ることである。周囲の人人を見た丈でも性格を

同じくした人間は一人も見當らない。まして無數の人類が個個に其性格を異にして居るのは言ふ迄もない。

一日の中の自己に就てもさうである。食膳に向つた時は食べることを自分の生活の中心として居る。或小説を読む時は藝術を自分の生活の中心として居る。一事を行ふ度に自分の全人格は其現前の一事に焦點を集めて居る。此事は誰も自身の上に實驗する心理的事實である。

このやうに、絶對の中心要素と云ふものが固定して居ないのが人間生活の真相である。それでは人間生活に統一が無いやうに思はれるけれども、それは外面の差別であつて、内面には人間の根本欲求である「人類の幸福の増加」に由つて意識的または無意識的に統一されて居る。食へることも、讀むことも、働くことも、子を産むことも、すべてより好く生きようとする人間性の實現に外ならない。

或一事を行ふ度に生活の中心が其一事に移動して焦點を作り、他の萬事は縁暈とし

てそれを圍繞して居る。かうして人間性が無限無數に其中心を新しく變へて行けばこそ人間の生活が活氣を帯び、機勢はきみを生じ、昨日に異つた意義と價値を創造して進むことが出来る。之が人間生活の堅實な状態である。さうして人間には之と齟齬する病的な状態がある。即ち物を食べて居ながら此事に熱中し難くて食べて居る物の味を享樂することが出来ないやうな状態である。何事も沈滞して居て中心となるまでに焦點を作らない状態である。それが人間の根本欲求と分裂して居る病的な状態であることは人間が其状態に満足しないのみか、それを不純、怠惰、卑怯、姑息、頹廢、墮落と云ふやうな自覺を以て自ら憎惡し、自ら愧ぢ、自ら苦み、自ら出来るだけそれを脱しようとして焦燥あせるので明かである。

今一つの病的な状態がある。屢々無用または有害な或一事に生活の中心が集まり易いことである。例へば女が低級な榮譽心——榮譽心——を中心として常に行動するやうな場合は決してそれが女自身の上に眞實の幸福を持ち來さない。却て女自身の生活を

人間の根本欲求に反して不幸に導くものである。かう云ふ場合には人間の本務を標準として其悪性な中心要素を批判し、それを一掃して、他の必要有益な中心要素の起伏する堅實な生活状態に就かねばならない。

私は母となつた時に初めて母としての實際生活が私の上に新しく創造されて來たのを經驗した。さうして自分の子供を育てることに私の注意が集る度毎に其處に母性が私の生活の中心要素となり、私の自我の全部を統率して居るのを經驗した。私の子供が私の外に無くて私の自我の中に愛を以て抱かれて居るのを明かに見た。全く私の子供は私の内に浸透して不可分の關係になつて居る。私は私のやうに子供のある女に取つて母性が重要なものであることを、子供を持つ他の婦人達と共に實感することが出來た。

併し私が母となつたことは決して絶對的ではなかつた。子供の母となつた後にも、私は或一人の男の妻であり、或人人の友であり、世界人類の一人であり、日本臣民の

一人である。また思索し、歌ひ、原稿を書き、衣と食とを工夫し、其他あらゆる心的労働と體的労働とに服する一人の人間である。私は其等の一事一事を交代に私の生活の中心として必要である限り其れにじつと面して専心することを私の生活の自然な状態として居る。

私は母性ばかりで生きて居ない。母性を中心として生きて居るやうに見える時にも私の自我には前に挙げたやうな私の他の諸性が、丁度人が現に見守つて居る一つの星を繞つて無数の星が群を成して居るやうに廻轉して居る。さうして其等の諸性の一つが次の時には現在の中心である母性に代つて私の生活の中心となり、更にまた他のものが次ぎ次ぎに代つて行く。其等の無数に起伏して異つた中心を作る諸性が互に輔け合ひ、埋め合せ、若くは互に撥ね返し、闘争して、不斷の流轉を續けることに由つて私の自我は成長し、私の生活は開展する。

若し私が自分の生活状態に一一名を附けるなら無数の名が要るであらう。母性中心、

友性中心、妻性中心、労働性中心、藝術性中心、國民性中心、世界性中心……其れは煩雜に堪へない上に殆ど無用の命名である程に私の生活の中心は相對的無限なものであつて常に起伏し變轉して居る。私は假に一日二十四時間と雖も一つの生活状態に専らて在り得ない、まして絶対に母性中心を以て生涯を終始することは私が絶対に藝術性中心を以て生涯を終始するのと同じやうに不可能である。さうして此不可能は私ばかりでなく一切の女の上に言ひ得ることである。例へば私が自分の子供に乳を呑ませようと注意した時に私の現在は母性を中心として生きて居るが、次の刹那にまだ自分の乳房を子供の口に含ませて居るに關らず、最早私の生活の中心は移動して、私は或一篇の詩の構想に熱中して居ることである。前の私が母性中心の状態にあることは其時私の子供の哺育のために必要である。其必要に用立つた後に私の母性が中心の位地を次に登つて來た藝術性に譲り、其藝術性の無数な背景の一つとなつて私の意識の奥に遠かつてしまふのは當然である。二つの物は同時に同じ位地を占め得ない。子供を

哺育する時に専ら母性中心であり、詩を作る時に専ら藝術性中心であるからこそ哺育と詩作の二つの事が私の生活に遂げられるのである。私はどうしても絶対的母性中心の生活を営み得る状態を想像することが出来ない。若し一刹那も子供から外に心を移さずに居て生涯をそれで貫徹することの出来る女があるなら知らぬこと、人間性は無限の欲求を生み、其欲求の一つ一つをそれが自分の成長に貢献するものである限り、尊重して忠實に履行するのが人間生活の自然であるとするなら、誰も一つの欲求に偏しては居られない筈である。

世間には自分の生活に公と私、主と客、眞實と方便、本務と餘技、第一義と第二義と云ふ風な差等を設けて居る人達が少く無い。私も近頃までは漫然とさう云ふ二元的な物の見方を模倣して居た。けれども眞に現在に生きようとする自覺が明確の度を増して行くに従ひ、「人類の幸福の増加」と云ふ人間の本務——私の本務——に役立つ限り、萬事が一樣に自分の眞實の生活であり、第一義の生活であるやうに感ぜられて來

た。以前は戀愛や、藝術や、學問や、宗教や、社會改良事業などと云ふものばかりを人間の第一必需品のやうに思ひ、みづから衣食住の實際問題に困つて居ながら、却て逃避的な支那賢人の虚偽な告白などに欺だまされて、其衣食住などを第二義の問題のやうに誤解して居たのであつたが、近頃はどれも私に取つて同じく第一義の價值を持つやうになつて來た。エレン・ケイ女史などが生活の表面に起伏して中心要素となる無量の欲求が永遠に對立して居る此見易い事實を知つて居ながら、其欲求の中の母性ばかりを特に擁立して絶対の支配權を與へ、謂ゆる絶対的母性中心説を以て我々婦人に教へられるのは、對等であるべき無数の欲求に第一義第二義の褒貶を加へる非現實的な舊い概念から脱しきらない議論のやうに私には見える。

人が親となることは、親となる資格を備へて居る人と云ふ制限を越えない範圍で望ましいことである。未成年の男女、不健康な男女、無智な男女、全く經濟的自活力のない男女、其等は結婚するのさへ不幸の本である。まして其等が親となることは一層

の不幸が豫知せられる。其場合男には父性の生活を、女には母性の生活を經驗せしめない方が却てよい人達である。また結婚して親となる資格を備へて居ても、失戀とか孤獨を好む性質とかに由つて結婚を好まず、職業の關係から學者、宗教家、探検家、教育家、飛行機家、看護婦などのやうに結婚を避ける人達がある。其人達は結婚して親となることにみづから一種の不幸が豫知せられ、それを豫防する摯實な必要からそれを避けて居るのであり、或は結婚もせず親ともならない方が却て他の事に由つて人間の本務——人類の幸福の増加——をより自由に、より猛烈に實現し得る所以からわざと夫妻父母の生活を避けて居るのである。また夫婦生活を開きながら生理的に親となり得ない男女がある。それは親となることを避けて居るのでは無いが、餘儀なく男は父性から、女は母性から遠ざけられて居るのである。其等の夫婦は必ずしも不幸を感じて居ない。子供の無いことに由つて知らず識らず親としての生活以外に豊富な生活を送つて居る男女も多い。却て澤山の子供を持つた爲めに他の活動を侵害せられて、

子供の無いのを不幸と感じて居る夫婦よりも幾倍かの不幸に陥つて居る男女もある。

親となる多數の男女があると共に、前述のやうに親とならないで一生を送る男女も寡くないのが人間の實狀である。母性中心説の第二の誤謬は此實狀を看過して居ることであるやうに想はれる。若し一切の男女が悉く健康で、教育があつて、經濟的能力を備へて居て、夫婦としての堅實な愛が容易に成り立つて、自由と幸福の豫想せられる境遇が與へられて、夫婦が必ず子供を持つことが出来て、さうして親となることを最上の生活と信じてそればかりを望んで居るなら、男は父性中心の生活を、女は母性中心の生活を營むことに専心し、それを以てケイ女史の謂ゆる「生れつきの制限」と自信して父性母性以外の無數無限な人間の活動を第二義とし、方便とし、さうして子供を持つことばかりをケイ女史のやうに人間の愛の眞の目的とすることが出来るであらう。人生が空想小説で無くて嚴肅な目の前の一大事實である限り、人間は一人一人の性情と境遇とに従つて各自の生活方針を變化して行かねばならない。トルストイ翁の言

はれる「天賦の使命」とか、ケイ女史の言はれる「個人の権利の生れつきの制限」とか云ふやうなものが私達の爲めに、さうして私達の外に豫め一樣に決定されて居やうとはどうしても考へられない。人間は一人一人の生きて行く必要から一人一人の権利と義務を——生れつきの制限ではなく——各自が個別に其時其時の必要を制限として自由に伸張しながら履行して行く外はないやうに私には見える。白耳義の首府の看護婦學校長であつた英國婦人エジス・カエル女史が去年獨逸軍の爲めに捕へられて従容として死刑に就いたやうなことは、母性中心説から見れば當然批難せらるべきことであらう。女史は未婚で終り、母性を實現せず國難に殉じてしまつたから。併し女史自身の最後の微笑は自分の権利と義務を世界人類の爲めに正しく履行したことの満足を示して居る。女史は人の子を生まなかつたけれども其代りに人道の母となつた。女史の此事蹟に尊敬を惜まない人なら、女の生活として母性のみが絶體に尊嚴なもので無く、母性も貴重であるけれども、人間の本務を發揮する尊嚴な生活は其外にも無

限にあつて、それは個人個人の性情と境遇とに由つて別別に定まるものであることを私と共に同感せられるであらう。

私は澤山に子供を生み且つ育てて居る。さうして多年の経験から、子供は両親が揃つて居てこそ完全に育つものであることや、子供を乳母、女中、保姆、里親などに任せるのは太抵の場合両親の罪惡であり、子供の一大不幸であることを切實に感じて居る。トルストイ翁もケイ女史も何故か特に母性ばかりを子供の爲めに尊重せられるけれど、子供を育て且つ教へるには父性の愛もまた母性の愛と同じ程度に必要である。殊に現在のやうにまだ無智な母の多い時代には出来るだけ父性の協力が無いと子供の受ける損害は多大である。母親だけが子供を育てることは良人が歿したとか、夫婦が別居して居るとか云ふ已むを得ざる事情の外は許し難いことである。併し是れくらゐ自分の子供の教育を重大に考へて取扱つて居る私さへ、前に述べたやうに母態としてのみは生きて居ない。私のやうに遅鈍な女の上にもさう云ふ生き方を求めるのは甚だ

しい不自然である。まして無数の異つた性情と異つた境遇を備へて居る一切の女を母性中心の型に入れやうとする主張は肯定することが出来ないやうに想はれる。

かう云つても私は、健康な婦人が良人との間に少くも一人の子供を養ひ得るだけの経済的自活力を持ちながら、容貌の美を失つたり、産褥の苦痛に逡巡したり、性交の快樂を減じたりする理由から妊娠を厭ひ、又は生兒の養育を他人に託するやうなことを辯護する者では斷じて無い。其女の生活が絶對的母性中心から遠ざかつて居ると云ふ根據から無く、其女みづからがより好く生きるのに必要な誠實と、聰明と、勇氣とを缺いて居るのが私には不満なからである。豊富な性情と健康な體質とを持つた女は子供も産むがよい、社會的事業にも従事するがよい、其他能ふかぎり何事に向つても多々益々辨じて欲しいと私は思つて居る。また私は其女の生活として價値が乏しいので避け得られる限り避けた方が好く、さうして避けようとするれば避けることが出来た過度の勞働を避けなかつた爲めに自分の體力を弱くし、妊娠不能となり、又は虚弱

不具な子供を生むやうな女に對しても、同じ理由から不満である。併し學者、女權論者、女優、藝術家、教育家、看護婦等に従事して居る婦人の内の或人達が、其道と其職業とに忠實であり、熱心である爲めに結婚を避け、従つて母性の權利と義務を履行しないのは、男の側の其等の道と職業を以て人類の幸福の増加に熱中して居る人達の中の或人人が一生娶らず且つ父とならないのと同じく、全く其婦人達の自由に任すべきものであると私には考へられる。さう云ふ婦人達に對してケイ女史のやうに一概に「絶對の手前勝手」を以て攻撃するのは酷である。

若し母性を實現しない女が悉く「絶對の手前勝手」であるなら、前に挙げた不健康其他の理由から結婚を避けしめねばならない女や、良縁を得ない爲め、又は婚資の無い爲めに餘儀なく獨身生活を送る女や、結婚して母たる資格を具備して居ながら肝腎の子供の無い女などをも不徳の婦人として批難せねばならないことになる。それは實際に不合理なことである。さうして現實の世界には性情と境遇を異にした無数の女が

存在して居て、絶対に母性中心説を適用することの不可能なことが此にも暗示されて居るやうに想はれる。

我國の婦人の大多數は盛に子供を生んで毎年六七十萬づつの人口を増して居る。或は國力に比べて増し過ぎると云ふ議論さへある。私達は寧ろ此多産の事實に就て嚴肅に反省せねばならない時に臨んで居る。舊式な賢母良妻主義に人間の活動を束縛する不自然な母性中心説を加味して此上人口の増殖を奨励するやうな輕佻な流行を見ないやうにしたいものである。(一九一六年二月)

先進老婦人の饒舌

無智で併せて病的に残忍である姑と、低能兒かと想はれる程に薄志弱行な良人とから虐待せられ離縁せられて、二歳になる子供を抱きながら去年の十二月攝津國の海に身を投げて死んだ若い良家の娘さんがあつた。其娘さんは二三年前に大阪の夕日丘女

學校を卒業し、文章の書ける人であつた爲めに幾通かの長い哀れな遺書を留めた。それが新聞に出て世人の感動を引き、今年になつてまた姑と嫁の問題を論じる人が其處此處に現れた。

其等の論者は太抵教育界の中老婦人達である。何れも姑となつて居る婦人達と同じ年輩の人達である。私は現に嫁となつて姑の下にある若い婦人達の感想を聞きたいのであるけれども、姑持ちの婦人達が姑に就いて語ることの困難は江戸時代の史家が徳川家康に就いて嚴正に論じることの不可能と同じである。投身して亡くなつた娘さんにしても死を覺悟したればこそ姑に就いて言ひたいことを云ふことが出来た。恐らく生きて居る限りは習慣の權威の下に悲痛な沈黙を續けて居る外は無かつたであらう。姑と嫁との問題を論ぜられる中老婦人達は若い嫁の境遇と心理とに此事の透察と同情とを缺いて居ないであらうか。

私の最も奇怪に感じたのは、吉岡彌生女史が「讀賣」紙上で書かれた感想の中に、

「嫁は姑に對して絶対服従を守るべきものである」と述べられたことである。さう云ふことが何を根據にして斷言せられるのであらうか。人間日常の實感を基礎としては勿論、近代の學問思想を基礎としてもさう云ふ怖ろしい結論は出て來ない。其れは獨斷である、迷信である。以前に無智な僧侶などが述べたことを教育者である中老婦人達が今更臆面もなく尤もらしく述べられるのに私は驚く。女史は其様な無意義な傳習的發言をする代りに、なぜ人間の眞實を見ようとせられないのか。それとも女史みづから其様な獨斷說に迷信的信任を拂ふことの出来る程非現代的な生活を送つて居られるのであらうか。

鳩山春子女史が自身の經驗から姑と嫁が同居して圓満に治つて行くことを述べられたのは吉岡女史のやうに獨斷では無いが、併し女史と同居しておいてになる若い夫人は女史の姪にお當りになると云ふことである。それを以て一般の姑と嫁を批判する根柢とせられたのは間違つて居るであらう。

姑と嫁の問題に關してでは無いけれども、嘉悦孝子女史は近く「讀賣」紙上で絶対犠牲の精神を以て自分の生活方針として居ることを述べられた。さうして其絶対犠牲の精神の發現した一つが花の日會の慈善的事業であるやうに述べられた。自我の權威と自由との力説せられる現代に、吉岡女史の絶対服従と云ひ、女史の絶対犠牲と云ひ、どうして女子教育界の先輩達はさう云ふ非實感的な發言を弄ばれるのであらう。

其等の發言は言ふ人の位地に由つて世人を誤ることが多く、摯實に人生を研究する若い婦人の心を攪亂すると共に、世に現存する害惡に媚びてそれを曲庇し維持するのに役立つやうに想はれる。心臓も頭腦も弱くなつて居る老婦人達が唯だ饒舌を以て自己の健康を示さうとせられるのは禍である。(一九一六年二月)

川上愛子さんの遺書を読み

舊臘二十一日の午前九時半に攝津國須磨の漁夫が附近の海上で一人の若い婦人の死

川上愛子さんの遺書を読み

體を發見しました。間もなくそれは播磨國美囊郡の富豪土居氏の令嬢あい子さんの死體であることが解りました。あい子さんは前日の午前三時頃、攝津國兵庫から淡路國の岩屋に向ふ汽船豊浦丸が和田の岬の沖を航行して居る時に、其船から二歳になるよしゑと云ふ女の兒を抱いたまま投身されたのでした。さうしてよしゑさんの死體は母を離れて和泉國堺沖に漂流して居たのを廿三日に其地の漁夫が發見しました。

あい子さんは二十歳でした。何故の自殺であるかは其遺書に由つて明かになりました。遺書は幾篇もあります。あい子さんが入水前に身を寄せて居た大阪市清水谷の叔父土居三郎氏方に遺されたものが四篇、また入水の前々日頃に脱稿して「自殺」と云ふ匿名で「淡路新聞」に大阪から投書されたものが一篇、さうして本誌(淑女畫報)の記者が此號に採録されたものは「淡路新聞」に投書されたものと同一です。

私は平生讀んで居る「大阪毎日」の紙上で舊臘あい子さんに關する記事を見た時、其自殺が我國によくある姑と嫁との不調和に原因して居ることを知つて、不幸なあい子

さんに同情しながら、引いているいろいろのことを考へました。曩に中根工學士夫人の澄子さんが姑を斬つた事件があつて世間の注意を惹きました。一は躁暴性のヒステリーの突發に遇つて姑を斬り、一は陰鬱性なヒステリーに陥つて自殺し、あれと此れと外面に現れた状態は異つて居ますけれども、共に各自の生活を破滅させるに至つた原因は似て居ります。さうして之は見ず知らずの他人である二人の若い婦人の上に起つた悲劇として離れて眺めて居られる事件ではなく、普通の同情以上に、戦慄と、悲痛と、併せて沈靜な批判とを以て對せねばならない事件だと私は感じました。なぜなら此問題に姑と嫁との同棲して居る家庭の大部分に伏在して居る最も悲惨な現實であると共に、婚期に入つた子女のある家庭に於て、子女自身にも、子女の父母にも考察を要する重大な實際問題であるからです。

私はあい子さんの事件があつてから三週間を経た今日に其遺書を讀んで、再び此問題を考へて筆を執らうとすると、最早あい子さんに對する同情や姑である人に對する

反感などを述べて居ることが出来なくなりました。其等の同情や反感の奥に更に深く考へねばならぬことのあるのを明かに自覺します。

姑の酷薄と云ふものは特に精神病理から判断せねばならぬものを除く外は、大抵姑の無教育に由来して居ます。姑も我と同じ人間です、決して悪人と決つて居るものではないとは言ふ迄ありませんが、それが生來の悪人であるかのやうに見えるまで専ら酷薄な性情を嫁に對して表現するのは自己を反省するだけの智慧が缺けて居るかたらず。無智な人間の生きようとする意欲は狭義の自己を生かすことに専念します。即ち何事にも狭い意味の自己を愛する利己主義の愛に固定します。利己主義の愛には眞の同情も、眞の寛容も、眞の謙讓も、眞の愛撫も含まれて居ませんから、自分に奴隸的服従を捧げるものを偏愛する代りに、其他のものに向つては動もすれば輕侮、猜疑、嫉妬、憎惡、壓制、虐待等を以て對しようとしませす。利己主義者の專制的な此心持は何人の内心にも潜在して居るのですけれど、多數の男子は教育に由つて多少とも自分を廣い

意味の自我の世界——家族我、社會我、人類我——へ解放しようとする智慧を備へて、意識的、若くは無意識的に他人を愛することに由つて自己の愛を完成しようとして居ますから、姑が嫁に對するやうな酷薄な専制主義を家庭の中で發揮する者は珍しいのですが、在來の女は特別に聰明慈悲な天性を備へて居る少數者の外は、悉く男子だけの教育を學問的にも社會的にも受けて居ませんから、一旦姑の位置に就けば大抵嫁を奴隸として虐待するやうな愚劣な女に墮落してしまふ伏能性を持つて居るのです。

あい子さんの嫁して居た淡路國志筑村の川上四九郎氏の母である人が、「今度五十日の忌日に實家に歸つたら小使金を貰つておいて。今の内に貰つて置なかいと貰ふ時が無いから……叔父さん達が後見をなさると又やかましいから」と云つて、嫁の實家の父の死後その遺産の分配を嫁に求めさせたのは、富家の主婦にも似つかはしくないさもしい心術であり、それが果されないのを最後の動機として嫁のあい子さんを放逐するに到つたのは簡単な嫁苛めて無くて、普通の姑根性の上に陋劣な利欲の念の加はつ

たものとして全く愛想が盡きるのですが、併し内面の原因をいろいろ考へて見ると、一概に川上氏の母を憎むことも出来ないのです。現代の教育から最も遠ざかつた位地に置かれて居る川上氏の母としては、さう云ふ利己主義的な生き方をするのが自然な経過だと思ひます。我子に對する愛の競争者として嫁を嫉視し虐待するのも、嫁の實家から財産の分け前を得て我家を富ませうとするのも、すべて無智な爲めに狭い意味の自己本位から一步も自己を延長することを知らないのに原因して居ます。さう思ふと、責任は女に今日程の教育をも授けなかつた——川上氏の母の娘時代の——社會にあります。時代と境遇とに由つて悪性な姑根性に墮落せざるを得なかつた川上氏の母を寧ろ氣の毒に思はねばなりません。

私は姑よりも良人の四九郎氏に對して多大の不満を感じます。二十九歳にもなつて居る男子が妻に對する無智な母の虐待を制することが出来ず、却て母の過失を助長させたやうな形跡のあるのは、餘りに不甲斐ないと思ひます。私は平生日本の現状から

考へて、良人は結婚後その妻を教育するだけの資格が必要だと思つて居るのですが、此見地から云へばあい子さんの良人は全くまだ人の良人たる資格の無い人らしく想はれます。此人も卑劣な利己主義に踟躇して居て、妻に對する積極的の愛が解らず、自分の爲めの妻を母の爲めの妻のやうに取扱つて平氣で居られるのです。一方に母を諫めて反省させ、一方に妻を自分の熱愛の下に擁護すると云ふ風な聰明な態度に出ることが出来なかつたのです。あい子さんの遺書に、「良人に申上ぐるも母上のお言葉は何事も聞き給ふ方なれば相談にも乗り給はず」と云ひ、「意志弱くとも男一匹、殊に日本男子ともあるべき身が心にもなき振舞などして、それで我心が満足に候やらん。心賤しき人を良人とかしづきしことの悔まれ候」と云つてあるのは、温順貞淑な若い妻がよくよく思ひ迫つた上の怨み言でせう。

併し多數の男子の中ですから低能的な男子も勿論あります。川上氏の若主人が其母とは反對に現代の教育に接近して居ながら、母と共に無智な世界を脱し得ずに居るか

らと云つて甚だしく咎めることも出来ません。寧ろ其母以上に氣の毒な一人の人間として私の眼に映じます。

かう考へて來ると、私は更に眼を轉じて、最初あい子さんの實家の御兩親が最愛の一人娘に對する省慮の足らなかつたことを遺憾に思はずに居られません。遺書に由れば、亡くなられたあい子さんの父上は川上氏の母と反對に慈愛に富んだ人であり、又口吉川銀行の頭取として郡中の名望家であつた所や、あい子さんを比較的進歩主義な大阪の夕陽丘女學校に學ばせたりした所などから想像して、保守的、利己主義的な川上氏などと異ひ、多少とも文明主義的な思想を持つた紳士であつたに關らず、愛嬢の結婚に就て矢張在來の因習結婚に盲從し、仲人口を信じて直接良人たる人の性格を精査せず、常人同志の間に性格の理解も愛情の一致も無い若夫婦を作るべく急いでしまはれたのが此度の悲劇の一大原因だと思ひます。尤も此縁談は最初から父上の心に満たないものであつたので一度は斷然と斷られたが、川上氏の母の熱心な望みに^{是れ}糾され

て終に再び話が折れ合つたのだと云ひます。運命主義者に言はせたら不可抗力の惡運に司配されて居たのだと云ふかも知れませんが、私の考では先方の情誼に絆されて父上がうつかり我子に對する愛情を曇たものにせられたのが最大過失です。曇つたものと云ふのは其愛情に理知の聰明が伴はなかつたことを言ふのです。父上が今少し省慮を拂はれたなら此悲劇は容易に避け得られたに違ひありません。

次に私はまた、大阪に住んで居るあい子さんの叔父さんと云ふ人は何う云ふ人か知りませんが、其人の不注意を甚だしく遺憾に思ひます。或は不注意と云ふ以上に、其人のあい子さんに對する叔父としての愛情を疑はねばならないかも知れません。叔父さんには川上氏の母子とあい子さんとの陰鬱な關係が十分に解つて居ながら、なぜ其中へ入つて^{はよ}きと解決を附けることに努力せられなかつたのでせうか。此場合にあい子さんを救ひ且つ擁護する適任者は叔父さん以外に無いのは明白です。また解決を附けることは容易でなかつたにしても、良人の家をいびり出されて實家へも歸ら

ぬあい子さんを可成久しい間自分の家に留めて置きながら、なぜ其憐れな姪に同情して力を添へ、出来るだけ其悲歎を緩和すると云ふ態度に出られなかつたのでせうか。遺書に、「二十歳とは云へ箱の中にて大きう成りしことなれば、まだ子供の如き考にて涙拭く手も急がはしげに暮れ申し候」とある通り、あい子さんは叔父の家に居ながら、誰に救はれ、誰に擁護される當ても無く、日に日に孤獨の窮地に陥つて行かれたのです。さうしてまだ自身の見識も立たない若い女の心では、死に由つてせつば詰た現つ實から脱するより外に道が無いと信じ、涙の中から長い遺書を幾通も書いて居たのでした。其處まで頂點クライマックスに達して居たあい子さんの傷ましい決心は、恐らく包み切れないてそれとなく素振にも現はれて居たてせうが、どうしてそれが朝夕に顔を合す叔父さんの注意に觸れなかつたてせうか。私は叔父さんと云ふ人に對して多大の遺憾を感じると共に、日本の家庭で父を亡くした娘の頼り無さは、富家の子も私達の階級の子と同じであるのを悲しく思ひます。それは在來の母が知力に於ても智力に於ても我子の幸

福に對して無能力者であるからです。

私は最後にあい子さんを卒業させた夕陽丘女學校の教育に最大の遺憾があります。學校は人生の意義や結婚の意義に就て慎重な考察を取るだけの自覺をなぜあい子さんに促して置かなかつたのでせうか。例へば愛情に就ても社會的知識に就ても堅實な理解を得るにはまだ早いと思はれる十七八歳で結婚することの危険、殊に仲人口に盲從する結婚の危険と云ふ様な一大事をなぜあい子さんに徹底させて置かなかつたのでせうか。また如何なる悲痛をも恥辱をも突破して生きようとする所に尊嚴な人生の意義のあることを、なぜ近代的生活の實際的魅力を以てあい子さんの生命に焼きつけて置かなかつたのでせうか。私はさう云ふ最も重要な教育が少しもあい子さんの上に働いて居ないのを腹立たしく思ひます。夕陽丘女學校の教育が若し其處まで眞劍な、併せて其處まで親切な人生味に富んで居たなら、あい子さんの實家の土居氏が因習結婚を強ひたにしても、川上氏の姑が如何に無智非情の舊式婦人であり、良人の四九郎氏が

如何に無氣力な男子であるにしても、其女學校の教育が屹度、あい子さんを其死地から救はずには置かなかつたであらうと思ひます。

現代の教育に最も遠ざかつて居る姑も氣の毒ですが、現代の教育に最も接近して居た温順貞淑なあい子さんが此悲惨な最後を取るに到つたのは更に幾倍か氣の毒です。私は夕陽丘女學校に限らず一般女子教育の缺陷を痛切に歎息しないで居られません。此に到つてあい子さんを破滅させた重大責任は誰よりも先づ形式主義な今日の女子教育家が負ふべきだらうと思ひます。(一九一六年一月)

婦人の飛躍

米國から來た冒險飛行家ナイルス氏の青山に於ける巧妙自在なS字飛行が新聞の評判になつて居る。ナ氏一人の渡來がどれだけ日本の飛行家を激勵したか知れないと共に、どれだけ飛行機に對し一般日本の人意を強くさせたか知れないであらう。

未來派の詩人が飛行機を以て現代生活の象徴と見るのは私にも同感される。一刹那も放心と無智とて居られない動搖と不安とを征服しつつ、更に新しい動搖と不安とを乗り切らうとする不斷の緊張と、直觀と、飛躍と、之が現代に於ける優强者の生活の真相である。之を等閑にする者は現代生活の墜落者とならねばならぬ。なぜなら、現代に生きて居る人間は男も女もすべてが現代の飛行家である。飛行の精神と技術とを等閑にする飛行家の運命は言はずとも明かである。

われわれ婦人の過去は弱者としての生活であつた、男子に比べて第二位に置かるべきさまさまの理由を備へた生活であつた。併し今は婦人の復興期が到來しつつある。われわれは最早これまでのやうな弱者の位地にあるに堪へない。男子と共に人生の第一線に跳り出して飛行を共にしたい。われわれは好奇心からでも、雷同心からでも無く、最も真劍な、最も謙虚な、併せて最も謹厚な心を以て之を望んで居る。さうして世界の婦人界には既に幾多のナイルス氏が先頭に立つてわれわれの冒險の可能を暗示

し、兎角引込思案に陥り易いわれわれを勇氣づけて居る。(一九一六年一月)

既成宗教より脱せよ

私は自分の生活を深化し擴大することに役立つものなら何物をでも包容しようとするが、その代り不用若くは有害になつたものなら何物をでも棄てようとする。

之は中年時代に入つた私のやうな女の順當な経過でもあらうが、また科學主義を経験した現代精神に刺激されたからでもあらう。私は形式よりも中身を重んじ、外觀の如何よりも内部の眞實を求める。粉飾と、無智と、虚偽とはどうしても堪へられな

50

この意味から私は既成宗教の何れをも排斥する。それには動體である人間性から絶縁した固定的教義を以て時代遅れの迷信を強要する以外に何物も無いことが洞察されるからである。其以外に若し何かがあれば僭して宗教家と稱する俗人達の私欲と醜行

とが教會や寺院に附隨して居るだけである。

私は大多數の婦人が猶昔の儘の迷信に心を引かれて、其等の既成宗教及び淫祠のために擁護者の位地にあるのを齒痒く思ふ。例へば兩本願寺のやうな俗僧の集團を維持して居るのは八九分まで婦人の迷信力ではないか。

新聞を見ると九星其他に由る運命判断が載つて居る。また種種の非醫者が出す病氣治療の廣告のやうなものが載つて居る。是等も其需要者は主として婦人である。方位、家相、卜占、祈禱、加持、お守、禁厭の類がまだ非常な勢力を婦人の間に持つて居るのは言ふまでも無い。婦人はなぜ何時までもこんなに無智なのであらう。

それが全く無教育であるべく餘儀なくされた階級の婦人達のみであるなら已むを得ないが、常に社會の耳目を引いて公共事業に其名を列ねる上中流の婦人達が或は怪行者某の信者であつたり、或は墮落門跡の崇拜者であつたりするのは餘りに愚劣である。多少にせよ現代の科學的教育を受けた婦人が在來の宗教に疑惑を挾んで其等の迷

信から脱する運動を起すのなら兎に角、時代と逆行する現代の僧侶、牧師、行者、神職の徒から何事を教へられようとするのであらう。

殊に寺院及び教會の中に於て説かれる基督教が歐洲の文明階級に於て早く既に何等の精神的權威を持つて居ないに關らず、日本の基督教婦人達が其形骸的基督教に籍を置くことに由つて文明婦人らしい顔色を装ひ、教徒ならぬ他の婦人を非人間の如く蔑視しつつあるのは無反省も甚だしい。

西本願寺の管長代理六雄某と言ふ老僧が子まである事實上の妻を一朝の名譽心から棄てて某華族の娘と再婚した爲に見苦しい訴訟事件を引起して居る。老僧が其前妻に與へた離別の一書が新聞に出たのを見ると、自己の無情な行爲を掩ふに佛教家慣用の「因縁」を以てし、頻に説教的口吻と共に空涙そらなみだを流して來世の再會を約したりして居る。さう云ふ無恥破戒の墮落僧を一宗の長者として居る事實を見た丈でも教育ある婦人は現在の寺院的佛教を速かに見限らねばならぬ筈でないか。

私は其等の婦人が既成宗教に對する迷信と、若くは信仰者らしく装ふ矯飾心とから、と多大の心力と財力とを費し、併せてそれだけ日本文明の進歩を沮害しつつあるのを口惜しく思ふ。私は近年歐洲の諸寺院を其祭日に訪うて、其處に集る者が殆ど老人と小兒に限られて居る事實を目撃し、また歐洲の識者達から積極的に現代の各社會に行動しつつある青年と壯年が舊式の宗教から事實上超越して居ることを聞いて、歐洲人の生活が如何に眞剣で、自由で、聰明であるかを羨ましく思つた。(一九一六年一月)

間違つた婦人の趣味

私は婦人の趣味に就ても反省せねばならぬ點の多いのを感じる。趣味と云ふ語を盛に用ひる割に趣味に對する鑑識の低いのは現代婦人である。相應に地位のある婦人、中等教育に關係して居る婦人などが新聞雜誌の上や教壇の上で頻に趣味を口にしながら、其人達が新しい特色を備へた独自の趣味を持つて居るかと云へば、其人達は無教

育な女と太差のない程因習的の趣味でなければ世間並な流行の趣味に盲従して居る場合が多い。

例へば近く御即位式に當つて婦人の日本の正装に袴姿と云ふ一様式が公に定められたが、平安朝時代と異つて今は禁色禁紋の掟が非常に寛であるから、其れを着けて参列する貴婦人達は如何やうにも自分の審美的個性を基礎にして、地色をも紋様をも自分の容貌、年齢、風采と調和するやうに撰定することが出来た筈である。寛弘長保の貴婦人等は其等の晴れの場合に各自の趣味を競争して、當日まで衣裳其他裝飾品の新しい意匠を一切秘密にした程であり、其意匠も成るだけ婦人みづから家人と共に工夫に力めたが、及ばない者は一流の藝術家に内内相談して其意匠を用ひるのであつた。八九百年前の其等の貴婦人に比べて現代の貴婦人は何たる無理想であらう。其出来上つた袴は殆ど同一の紋様と類似の色彩とから成り立つて居る。それを着ける本人の意匠は少しも加へられないで、全部が装束師高田某のお仕着せの儘に従つて居る

のである。色彩に就て云つても平安朝の婦人はあれだけ多数の襲の色目を工夫して、出来るだけメリカアな間色の配合に就て心にくい用意があつたのに、此度の袴は何れも簡單至極な鮮色の配合である。私は唯だ唯だ其無反省に驚く。口の悪い清少納言が居たらどんなにか罵るであらうと思ふのであるが、却て其れを着けて参列した山脇女史の如き教育家の口から此度の袴姿が最上の美を示して居たやうに讚美されたに到つては批評の語もない。私にはそれが過去及び現代のどの精鍊された趣味から云つても決して最上の美では無かつたらうと直感される。男子側の参列者で東西の藝術に鑑識の深い人達の批評も私と同感のやうである。

また同じ女史は、御大典當日に東宮の召された御袍の黄丹色を誤つて「柑子色であつた」と新聞記者に語つて居た。一つの新聞ならば私はそれを豫備知識のない記者の聞き損じてあらうと思つて看過してしまつたであらうが、山脇女史は二三社の記者に何れも柑子色として書かせて居る。初め宮内省で袴其他の制を發表した時に、特に

柑子色を用ひることを禁ずる旨が附記されて居た。宮内官は貴婦人階級の無智を慮つて、日本の古文學の素養の少しでもある人なら柑子色が喪服に限つて用ひられる色であることぐらゐ知つて居る筈のことをわざわざ注意したらしいのであるが、山脇女史は斯かることにも氣が附かなかつたのである。

桂袴は突然のことて已むを得ないとも言へる。併し上中流の婦人が舊趣味の反覆に甘んじて、現代の生活と交渉の切實な新趣味をみづから建てよう、若くは其等の新趣味に移らうとする自覺的要求の萎靡して居ることは、在來の日本畫、芝居、舞踊、能樂、俗曲等の外に新しい藝術に注意する婦人の非常に少いのも想像される。また其等の舊藝術にも、發展は無いが保存の程度で重んずべきもの、到底今後の生活に役立つたないと共に廢滅に歸して惜しくないもの、また趣味の墮落として斷然排斥すべきもの等種種の別があるのに、其等の見分けも無く唯だ盲目的に溺愛して居る婦人が多いやうである。他から見て、教育ある婦人達が形式ばかり仰山で中身の眞實と美との乏

しい、非現代的に香氣な、此様な舊趣味になぜ多大の興味を持つのであらう、加之に大切な時間を費してそれをなぜ幾度も繰返して觀たり聽いたりするのであらうと怪まれるのであるが、其等の婦人達は徳川期の婦人と同じく今猶藝術を實生活から隔離して我を忘れる遊山場だと考へて居るらしいのである。

近く嘉悦孝子女史のために卒業生が首唱者となつて或劇場で催した音樂舞踊會の番組に「北州千歳壽」のあるのを見て私は驚いた。「北州」は其曲名の示す通り其唄は全篇吉原の讚美であり、其歌詞の淫靡さは到底女學生の前で説明し難い程極端なものである。もつとも此程度のもものは外にも少からず行はれて居るので、普通の場合には知らぬ振も出来るのであるが、常に風教の上に注意を拂つて意見を述べられる嘉悦女史の如き教育家の會合としては、女史達の趣味に知識的及び徳性的の反省が加へられて居ないことを暴露したものととして私は遺憾を感ぜずに居られない。(一九一六年一月)

婦人自ら反省せよ

近く「青鞥」誌上で伊藤野枝氏が慈善、矯風、軍隊慰問などの公共事業にたづさはる上中流婦人の傲慢、狭量、不徹底に就て厳正な批判を下されたのは私も同感である。もともと婦人問題は婦人みづから率先して解決すべきものであるとする自覚から、私は日本婦人の現状に對し、婦人相互に反省し合ふことが何よりも急務だと思つて居る。それがためには伊藤氏のやうに同性に向ひ最上の厚意を籠めた辛辣な刺戟を投げて目醒草とする婦人の現れることも必要である。それにかう云ふ態度の批評は決して他に對する警告としてのみ役立つので無く、批評者自身の生活がどの程度まで深化され、擴大されたか、併せて批評者が如何に其自分自身の生活を自覺して居るかと云ふことの反省資料として第一其批評者自身のために役立つのである。此意味の批評で無くては無責任な放言に止まり、それが先づ自分の實生活を震動して出て來たもので無い

のに他人の生活を動搖させる筈も無い。「太陽」記者の洪量に任せて過分の仕事と知りながら此欄に筆を執る私も此意味に於て先づ自己を鞭撻したいと思ふからである。

此欄で私の所感を述べる題目は主として婦人自身の改造にある。日本の現状では婦人問題に就て大抵の場合、男子側に向ひ婦人が反抗し若くは挑戦する必要をまだ認めない。また婦人自身に其れ程の實力も準備されて居ない。男子側の無智な階級の婦人問題に對する言動は男子側の優秀な階級の力て其蒙を啓くことが出来る。私達に比べて優越な位地にある男子は必ずそれが出来なければならない。それよりも婦人は婦人みづからの無智を啓發するために勵むことが急務である。

私達は婦人の現状を知ることには於て最も聰明で、また最も謙虚でなくてはならない。今日までの婦人の歴史に男子に比べて何の誇るべき所があるか。男女の對等は未來の理想に屬し、悠遠な過去から現代にかけては明かに婦人が第二位に落ちて居る。六七

年前に伊太利の非女權論者である某夫人が「婦人には直接の偉大な創造が無い。婦人は基督、メケル・アンセロ、ベエトフエン、ゲエテを生むが、婦人みづから其等の偉人には成り得ない」と云ふ意味のことを述べたのは、婦人の歴史を説明するものとして抹殺することの出来ない眞實である。過去にも現代にも婦人の中の抜群な秀才は稀にある。併し男子の中の偉人に比べると、其數に於ても其質に於ても甚だしく劣つて居る。男子であるなら斗筭の才であるのに婦人である爲に過當な名譽を博して居る者さへある。さうして何時の世にも人類の半數を占める婦人が知識に於て男子と懸隔し、其無智から餘儀なくされる偏頗な感情とヒステリーの非常識とに由つて、どれだけ婦人自身の生活を愚昧にし、淺薄にし、不幸にして居るか知れない。同時にそれがどれだけ男子に迷惑を掛け、我子を誤らせ、人類の進歩と諧調とをどれだけ溢滞させて居るか知れない。

それを思ふと私は唯だ愧ぢ入るばかりである。男子が久しく婦人を厄介視し、威壓を

以て第二位に置いたことを専ら男子の横暴に歸するのは我身を知らないも甚だしい。それは八分まで婦人みづからの招いた禍である。「女子と小人とは養ひ難し」と云つたのは、今こそ知れ、不法な罵言でなくて、婦人の無智に懲りた男子の已むを得ない歎息であつた。私達はあらゆる因習的迷執を脱して赤裸裸に自己の無智無力を反省せねばならない。

この最も重要な婦人みづからの反省が足りない爲に、今日の如く女子教育の機關は不完全にせよ設けられて居ながら、それがまだ婦人改造の實質を幾分でも備へるに到らないのである。高等教育を受けたと云ふ婦人までが其實生活を點檢すると、依然として私達の母や祖母時代の女に變らぬ舊觀念、舊感情、舊趣味に停滯して、外觀は兎も角、其實質は何程も現代的に改造されて居ないのである。可成り女子教育の必要を認めて居る今日の父兄が猶「女子に學問をさせると放縱になる」と云つて躊躇の色を見せるのも、中學卒業程度の男子にすら及ばない程度の教育を受けた女が臆面もなく非

實際的の言説を並べて父兄に反抗し、其素行に就てまで自分自身を輕んずるやうな不快な現象が改まらないからである。私の考では少しばかりの教育を鼻に掛けるやうな女は昔にもざらにあつた。其上に素行を亂して愧ぢないに到つては徳川期の女にも劣る最も古い女である。私達の謂ふ教育は女性の内に潜むあらゆる悪質を排除して古い女の反對に立つ聰明堅實の生活を建つべく精鍊するので無くてはならない。或は厚意ある世の識者は其等の教育ある最も古い女を過渡期の女と呼んで寛容するであらう。併し私達は再びし難い貴重な私達の一生を過渡期の女として散漫に生きるに堪へないのである。

世にはまた教育ある婦人で「女は要するに女だ」と云ふ風に諦め、若くは「自分の力には及び相にない」と云つて逡巡して居る人達がある。私は婦人の現状を知るには最も謙虚でありたいと思ふが、さう云ふ自負を缺いた態度には反對である。さう云ふ人達

には、自分の生活に對して何と云ふ生温い欲求しか持たない婦人だらうと云ひたい。とは云へ、私にも正直なところ他に誇示する程立派に充實した大きな自負はまだ實感して居ない。私の友人達の知られる通り、私は氣の弱い、引込思案な、人前で物數を言ひ得ない程含羞性の女である。私が外出を嫌ふのは子供達のため、時間を持たないため、無駄な訪問や散歩を好まないためもあるが、一つは私の天性が然らしめて居る。どちらかと云へば沈黙の中に讀書したり、物を縫つたり、じつと考へ込んだりすることの好きな女である。之は天性だと思つて居るが、幾分は私の結婚前の境遇から由來して居るかも知れない。父母の監督の厳し過ぎる、さうして無教育な使用人の多い舊式な田舎の家庭に育つて、幼い時から何方を向いても非文明な空氣に取巻かれて居る氣がしながら、成るだけ清く獨を守らうと力めたことが第二の性癖となつたかも知れない。中にも私の含羞性は天性の上に自分の無學無識を自覺して居る所から由來して居ることが明かに意識される。

併し私は女性の劣弱を以て永久に移すことの出来ない不動性だとも、女性の全體だとも考へて居ない。多数の男子は云ふまでもなく、識者階級の男子の間にも其内心を叩けば婦人は第二位のもの、男子より劣弱なものとして運命づけられたもの、従つて或程度までは教育の力で改造することが出来ても、到底その程度以上には濟度し難いものと云ふ觀念が浸潤して居て、特に婦人の境遇に同情して助勢と激勵とを惜まない優秀な男子でも動もすれば其觀念を素振に現はすのであるが、それを我我婦人が眞似る譯はない。其觀念の間違つて居ることは既に男子みづからも理解して居る。唯だ餘りに無智な婦人の現状に對して男子は感情の上に其先入觀念の影を棄てかねるのであらう。

例へば人は純然たる利己主義に始終し得られる者で無い。他人に對してどんなに冷淡なやうに見える人でも、其人の生活には家族、友人、社會、國家、人類と云ふ分子が屹度少しづつ加つて居る。それで最も嚴正に云へば利己主義に徹底した人は一人も

地上に存在しないし、またさう云ふ利己主義に偏する人生は一刹那でも成立し得るものでない。世間で私利私欲の權化のやうに見える人間が偶々天下國家を口にして憂民慨世の人らしく振舞ふことがあると、私達の常識はそれを一概に全く虚偽の言動として侮蔑する。併しそれは實際の人間心理に對し洞察力の乏しいことである。無から有は生じない。其人は他から虚偽と見え、純利己主義と見える程度に小規模の自我に平生止まつて居るだけであつて、小規模の自我にも本來大規模の自我の芽は胚胎して居る。それが外面的には勿論、内面的にも意識される程に濃密な姿を現はさないために、人は誤つてあの人は純利己主義者だとか、悪人だとか云ふ固定した批判を下すのである。

それと同じやうに、婦人の自我にも男子と對等の生活素質を藏めて居るのであるが、種々の歴史的事情から自我發展の歩度を鈍らせた爲に、婦人は久しいあひだ男子との協同生活から落伍して居たに過ぎない。近代文明の刺戟に由つて目覺めた婦人が

眞に其無智無力を愧ぢて發憤し、淺劣な自我を深化し擴大しようと力めるなら、地上幾千年の禍であつた男女の不平均を改めることは不可能でないと私は豫想する。

引込思案な私も此頃自覺に由つて勇氣づけられた。婦人改造は他人の事て無い、私自身を改造することに由つて婦人改造の實證を示さねばならないとまで思ふ。併し實際にまだ私は無力を愧ぢる。私の四方には底知らぬ天淵がある。私はそれをどう乗り切るか、私は動搖しつつある。不安に居る。併し私は既に冒險に向つて出發した。最早見苦しい逡巡の時は後になつた。(一九一六年一月)

私の現状

私は自我を開きつつある。利己的と見える膚淺な「我」を越えて、既に家族我を可成り濃く容れた上に、今は私の自我が微かながら社會我、民族我、人類我の境まで延びようとして居るのを覺える。其處まで延びるのでなければ私の生甲斐が無いやうに想

はれてならない。或識者が「婦人が政權を獲ようとするまでにならねば婦人運動も眞實のもので無い」と云つた語に對して私が同感されるのも此心境からである。また私が此欄で婦人問題の外に涉つた所感を述べることもあるのも同じ要求からである。

併し私はまだ日本の政治と政治家とを混同し、後者に對する反感から前者を侮蔑するやうな凡俗の感情を免れずに居る。従つて政治はまだ直接私の要求とならない。婦人參政權の問題も歐米のそれには自分の問題であるかのやうに興味を持つて居るが、日本の政界と日本婦人との現状を考へて私はまだ急ぐこととてないと思つて居る。

私は一面に母としての生活の必要から斷えず教育に注意が向く。教科書の劃一主義打破が高田文相の下で實現されようとして居ることなどは近頃の喜びである。その編纂者を廣く實際の學校教師に募るのも好く、現に幾人かの子を教育して居る父兄側の識者に求めるのも好い。さうして特色を異にした種種の教科書が現れて學校當事者の自由選擇に任せるのが何より好い。小學讀本には從來のより程度の高いものもあつ

て欲しい。教科書の文章を簡易にするのは結構であるが、内容まで平凡化したものや、聲に出して読んで調子の卑いものなどは避けて欲しい。趣味教育を穿き違へて、木に竹を繼いだやうに厭味な修辭の多い雅文脈などを讀本に用ひるのは却て悪趣味である。傳説として書くのは好いが、史實として虚偽を書くことは止めて欲しい。出来るだけ科學主義の記述の多いことを望む。感傷的な趣味は家庭にも、社會にも、子女の讀物にも、あらゆる藝術にも彌蔓して日本人を毒して居る。せめて學校ではそれを除きたい。唱歌だけは反對に廣く募集することを止めて文學者に依頼しないと在來のやうな非藝術的な物が出來上る。小學校の唱歌が面白くない所から自然子供は市井の子守唄や鞠唄に引き附けられる。其等の中には淫靡な徳川晩期の作が多く混つて居て、少し心ある父母はひやひやする。例へば東京の子供の歌ふ「坊さん坊さん何處へ行く」と云ふ唄や「とつびんしやん」と云ふ拍子のある唄などは、若し一語でも其意味が子供に解つて見れば全篇悉く帳中秘戯の譬喩である。かう云ふ點をも親切に顧慮して欲しい

と思ふ。歐洲の小學唱歌が大人も共に歌ひ得る程度に立派な詩的に満ちて居るのは羨ましい。一體に唱歌ばかりで無く教科書の文章の選擇を文學者でもない明治大正の國文學者達に一任して置くのは國民が間違つて居る。(一九一六年一月)

小賣商の暴利

戰爭の影響が時時刻刻最も具體的な苦痛を齎して第三階級にある我々の家庭に肉迫するやうになつた。日一日と物價の暴騰することである。

金利に由つて座食し、織らず、耕さず、肉體虐使の勞働を経験しないで生活して居る上中流の人達に取つては、物價の騰貴は却て至大の慶福である。物價の騰貴に由つて暴利を享得するのは結局其等上中流の階級に屬する人人に外ならない。さればこそ其等の人人は皆一樣に戰爭の長引くことを望んで居る。露骨に云ふならば、幾千萬の歐洲人が死傷しやうとも世界幾十億の第三階級が餓ゑ且つ癯せて肉體と精神を憔悴させ

やうとも、そんなことに構つて居られない、此度の戦争の永續こそ日本を富強ならしめる千載一遇の機會であると信じて居るのが其等の人人の心の内である。——之が仁義を主とすると云ふ武士道國に於て、其武士道の精神を擁護すると云はれる上中流の人人の現に實行して居る國際道德、商業道德である。併し私は其矛盾に驚かない。私は武士道と云ふものを一度も信用したことが無かつた。平安中期以後の不逞不臣な地方官が朝廷に叛いて任地に土着し、私利を營み暴威を振ふために私兵を養ふに到つたのが武士道の起原であることを私は最初から知つて居た。日本人が朝も、野も、學者も、實業家も、操觚者も、宗教家も凡て軍人を中心として回轉することは明治大正に始まつたことと無く、遠く八百年來のことである。——

要するに物價の騰貴に眞實の苦痛を感じるのは人類の大多數を占める我々第三階級の家庭に外ならない。我我はそれが體的勞働であるにせよ、心的勞働であるにせよ、全く身一つを資力として勞働して居る階級である。我我は盜人と、高利貸と、投機師

と、僥倖期待者との心を排斥し、出来るだけ自分の勞働に由つて一家の生存と發展とを計らうとする。我我は贅澤を望まない、何よりも一家の生存と發展とに役立つ第一必需品である衣食住、教育及び醫藥の資だけを自分の勞力に由つて收得しようとする。併し平時に於てさへ其第一必需品の資だけを得ることが困難であつたのに、戦時に入つて以來其第一必需品の代價が頻りに騰貴して行くために、我我の勞働は到底其れと平行することが出来なくなつて來た。我我の勞働には限りがあり、其れに對して支拂はれる所は一割や二割を増額されるにしても、物價の騰貴は五割、十割、二三十割にも及んで居るのである。到底收支相償ふ見込が立たない。

殊に私達の從事して居る文筆の勞働は日本に於て決してまだ確實な職業となつて居ない。私達は肉體の苦痛を避けないで勞働して居ながら、之が果して勞働の代價即ち金錢に由つて報酬せられるか何うかと云へば甚だ心細い。外の人工品なら捨賣にすることも出来るが、文筆上の作品は日本の習慣として一錢も支拂はれない場合が多く、

其場合に全く金銭と無關係の勞働に終るのである。かういふ不安定な職業に従事して居る私達が多勢の子供を抱へて平時にすら家庭生活の資に困難して居るのは或は自業自得かも知れない。私達の勞働に對する報酬は戦時に入つて何等の増額を得ないばかりか、却て出版界の不振のために私達は職業を減じ、勞働したくても其餘地を發見することが不可能にさへなつて居る。

世の識者達は我我のために簡易生活を鼓吹し、また戦時婦人と家政、戦時婦人と經濟に就て幾多の教を垂れられる。併し私は識者達の御厚意を感謝するが、其御意見の大部分には不満の意を表するものである。其理由は識者達の御意見と云ふ物が少くも我我第三階級の家庭生活の現狀を救済し改造する方法としては最も迂濶だからである。識者達の御意見を煎じ詰むれば凡て「勤儉貯蓄」の四字を出ない。之が果して戦時及び戦後の經濟的激變に處する唯一の方法であらうか。

明治大正の家庭が一般に物質的奢侈に流れて居ることは識者達の指摘せられる通り

である。私は家庭ばかりでなく、國家が先づ陸海軍費に就て民力不相應な奢侈を行つて居るものであると思つて居る。陸海軍人と其れに附隨する御用商人とが富貴顯榮の範を示す以上、一般の上中流が其奢侈に倣ふのは怪むに足らない。従つて第三階級の國民も上中流の氣風に促されて瘦我慢を張るに到るのである。富裕な佛蘭西の田舎てさへ時計を持つて居る農民は少く、さうして太抵木靴たぢぎを穿いて居る程であるのに、貧しい我國の田舎では小作民の子弟までが縮緬の兵兒帶を締めて、時計を其れに巻き付け、靴を穿いて居る有様である。之に對して識者達が簡易生活を鼓吹されるのは或は救濟の一方法であるかも知れない。それならまたトルストイ翁の「我等何を爲すべし」かに示された程の徹底した道理上及び實驗上の根據と、眞摯熱烈な同情とから出發した簡易生活の宣言であつて欲しい。識者達自身にも實行することの出来ないやうな勸告では要するに實感味の無い空言そらごとである。識者達が他人の奢侈を心配せられる心持は理解されるにしても、識者達自身の奢侈には無反省であるのが遺憾に堪へない。

併し戦時に入つて後、殊に近頃の第三階級の家庭に對して簡易生活の勧告は無用である。私は其勧告を待つ間もなく既に實際社會の經濟狀態が自然に簡易生活の必要を我我に迫つて自覺させ、且つ其れを我我に餘儀なく實行させて居ると云ひたい。詳しく云へば物價の暴騰に由つて我我は日日の家庭生活に是非無くてならぬ第一必要品を買ひ調へる資力にのみ追はれて居る。其第一必要品すら急がないものは延ばし、不自由を忍び得るものである限りは廢し、減じ得るだけは減じる方針を取つて居る以上、今日我我の欲望が全く一切の贅澤品に向つて目を閉ぢて居るのは言ふまでもない。其れであるのに、識者達の御意見に従つて猶此上の簡易生活が實行出来るであらうか。

我我は今日のやうに全力を緊張して勤勞と儉素とを勵行して居るに關らず、日一日と遞加する物價騰貴のためにまだまだ其第一必要品を買ひ調へることの困難に惱まねばならないことが豫感される。我我はどうすれば好いのであらう。此上の簡易生活は恐らく死より外に無い。物價が現狀の儘に停滯して持續してさへ我我の肉體は營養不

良と神經衰弱に陥り、我我の精神はさもしい一部の物質的欲望に荒廢しなければならぬやうに想はれる。

實例を私達の家庭の目前に取つて言ふことを許して頂きたい。私が今夜此一文を書いて居る時、良人も、私も、四男の四歳になるアウギユストも流行感冒に罹つて發熱して居る。お醫者から貰つた粉藥や水藥では私達の發熱を頓挫させることの出来ないのを私は知つて居る。私はアスピリンを頓服したくてならない。併し何時か一オンス三十幾錢かて買つて置いた舶來のアスピリンは今朝良人とアウギユストが服用したので無くなつてしまつた。或人から聞いたのでは一オンスのアスピリンが十日前の値段で參圓七拾錢した相である。十倍の暴騰である。參圓七十錢あれば中學に居る長男の靴が一足買はれる。——靴もまた五割の暴騰である——其れを若し食物に用ひれば私達の一家拾一人の口を四日間糊することが出来る。若し之を以て將に生れようとして居る赤子のために必要な衣類を作るなら最下等のメリンスの綿入を二枚新調すること

が出来る。——メリンスもまた四五割の暴騰である。——さうして其參圓七拾錢を臨時に私が勞働に由つて得ようとしても其勞働して書いた物を右左みぎひだりに買つて呉れる當てがあるのて無い。私は斯様なことを一方に考へながら熱のある中で此感想の筆を執つて居るのである。

自分の肉體に無用の苦痛を與へることを最も野蠻愚劣な行爲であるとして擯斥して居る私が、今夜避け得べき自分の發熱を避けなくて我慢して居ることは、識者達の御意見に従つたからでも無く、自分の他の一層大切な必要からでも無く、或額の藥價を持合せない所から餘儀なく自覺した簡易生活である。随分と禁欲的な、反人情的な簡易生活である。之はほんの一例に過ぎない。私達は現にアスピリン以上に必要な食物其他の日用品をどれだけ不自然に節減せずに居られなくなつて居るか知れない。

私達の収入は減りこそすれ、増さない。反對に物價が——特に日常の第一必要品の物價が日増しに暴騰する。さうして其物價に比例して行く私達の簡易生活のどん底は

營養不良と死……識者よ、第三階級の家庭にある我我主婦が今日に處する方法として猶此上の簡易生活があるてせうか。猶此上の家庭經濟があるてせうか。

著眼は一轉せられねばならない。方法は更に選ばねばならない。さうして其れは最早私達個人のみ力だけではどうも出来ないことである。また第三階級にあつて其日の衣食に追はれて居る私達のみ力だけをどれだけ集めても不可能なことである。

我我の階級の人間が家庭生活の經濟方面に悩んで居るのは平時に於ても決して我我の怠惰と奢侈とから計りてはない。戦時の今日に於ては特に其れを斷言することが出来る。重要な原因は外にある。

其れは我我を顧客として居る幾多の小賣商である。我我の生存に無くてならぬ第一必要品を供給する小賣商である。米屋、酒屋、魚屋、肉屋、荒物屋、干物屋、八百屋、呉服屋、洋風雜貨店、菓子屋、藥屋、文房具屋……是等の小賣商は其商品に由つて原産地又は製造元から直接に買ひ入れて我我に取次ぐ物もあるが、大抵は原産地又は製

造元から數箇所の商家を經過して來た物を最後に我我に取次ぐのである。原產地又は製造元から數箇所の商家を經過する度に關稅を收められて居るから、其物が最後の小賣商の手に移つた時には原價に比べて驚くべき高價に上つて居る。其れを更に我我が買ひ取る時には物に由つては原價の二倍三倍にもなるのである。其中で最も暴利を課するのは最後の小賣商である。

小賣商は大抵三割から五割の利益を收めて居る。彼等は其物に對して原價以外に純益、金利、店費、營業稅、缺損(俗に倒れ)の五種を課して我我に賣るのである。金利と云つても銀行利子ばかりで無く、高利を借りて居るものは其高利をも我我に遠慮なく支拂はせる。店費と云つても質素な昔の店とちがひ、電燈、電話、自轉車等の費用、使用人の俸給、賞與、家に由つては、家賃、其他合せて少からぬ高である。營業稅は止むを得ないとしても、貸し倒れを見込んで其等の缺損を課するに到つては最も無法である。貸し倒した者の不徳と倒された者の不明とが其責を負ふのが正當である。其れ迄

を他の購買者が支拂はねばならぬ義務が何處にあらう。正直に支拂ふ者が却て最も高價な物を買ふやうな結果になつて居るのは戰慄すべき事實である。

小賣商の種類に由つては多くて四五百圓、少くて百圓以下の資金で四五人の家族が大道に向つた家に住みながら營業して居るのを無數に見受ける。少くも五拾圓以上の利益が無くては家賃を支拂つて一家四五人が生活することは出来ない筈である。百圓の資金で毎月五拾圓の利を收めるのは勿論、五百圓の資金にしても毎月一割の利を收めるのは法外の暴利である。

第三階級の我我を直接に衰瘦させる害蟲は此小賣商である。此殘忍な供給者の方面が改造されない以上、我我がどれだけ簡易生活を營み、又どれだけ勤勉な生活を續けて行つても我我の家庭の幸福は期待されない。我我が現に従事して居る毎月の勤勞は悉く無數の其等小賣商人を養ふ機關として働いて居るやうなものである。

日本の商業は精神も外形もまた封建時代の儘であつて文明國の商業程度に達して居

ない。一町毎に一戸獨立した酒屋があり米屋があると云ふ有様である。若し大資本制度であつたら、大工場の職工となり、大商館の賣子や番頭となるであらうと想はれる人人が、さうで無いために僅かの資本で各町に割據して小賣商の主人となつて居る。近頃或人が歐洲では銀行の本店が十軒位あるのに、日本には貳千軒もあると言はれたが、すべての商家が其様に小さく分裂して居て、其れが自營の必要から我我を誅求することになるのである。

私は米以下の第一必需品に限り小賣商は一割以上の利益を課してはならないと云ふ法律を作つて欲しいと思ふのであるが、併し其れも今日のやうな原産地又は製造元と我我購買者との間に澤山の仲次を経過するやうでは結局高い値段を我我が支拂ふことになる。其れよりも第一必需品を初め其他の必需品を原産地又は製造元との間に立つて全くの實費で直接我我に供給する中央大雜貨店と云ふやうなものが出来、其支店を市内の各區に幾つも置くやうな事になつたら、どんなに我我大多數の國民を幸する

ことであらう。さう云ふ大事業こそ上中流の婦人達が眞剣に計畫せらるべき實際問題であつて、矯風會、愛國婦人會其他のやうな迂濶な又は遊戯的な在來の婦人運動と違ひ、直接人間の幸福を實現する神聖事業である。

私は心的にも體的にも勞働せず、専ら金利に由つて座食して居る上中流の階級をトルスイト翁のやうに冷酷に批評しようとは思はない。上中流の人人も大多數は自ら好んで其様な他人の勞働を偷む位地を擇んだので無く、我我の大多數が勞働を生命とする第三階級に置かれたやうに偶然に金利を生命とする階級に置かれたのである。其金利の内から自分一家の生活費を差引き、其餘をあらゆる公益事業に一切還附するだけの愛と聰明と勇氣とがあるなら、第一第二の階級の存在に初めて理由と光明とを生ずるものである。其金利の内から差引かれた一家の生活費に就いても國民は其愛と聰明と勇氣に對する報酬として寛容するであらう。其れは物質を精神化する善行である。何はあれ、我我は在來の法律制度からよりも、形式道徳からよりも、第一に此不法な

小賣商から解放されることを計らねばならない。さうして恒産の無い我我の悲しさは自分の破滅を知りつつ掛拂かひばらひと云ふ彼等の罪に罹いやくつて厭厭ながら彼等に引きずられて行く。たとへ我我が多少の現金を以て買物をしたからと云つて彼等の害悪から逃れることは出来なくされて居る。(一九一六年二月)

感想の断片

わたしは未熟を嫌はない、却て圓熟を嫌ふ。どうぞわたしの藝術が、わたしの戀が、わたしの全生活が、何時までも伊呂波の「い」の字から出直す程、不器用に、眞剣に、純に、みづみづしく初心こころであつて欲しい。どうぞ其時其時に生れ更かつた新しい自己を描きたい。心の中に固定して居る觀念や概念を書きたくない。

書物は其れが讀む度に新しい何がしかの價值を持つて居るものならば、幾度取り出

して讀んでもいい。併し太抵の書物は讀んだきりて巻を措いて遺憾のないものである。それから、どの書物も讀んで直ぐに忘れてしまふべきものである。決して記憶を目的とすべきものではない。

人の心を第一に鈍らすものは記憶である。記憶のよいと云ふことは受験者と統計家とに役立つばかりて其他の人人には太抵有害である。

記憶のよい人は過去の經驗——即ち記憶を頼りにして眼前の直接な新經驗を粗略にする。東洋の畫家が寫生を輕んずるやうなものである。記憶を頼りにする人では人生の新しい味が解らない。

食物は其時きりて後は何を食べたか忘れて居る。食物は其滋味が食べた人の養料として自然に血となり肉となつて役立つて居ればよいのである。精神の食物である書物もまた其書物の含んで居る思想が自然に讀者の營養となればよい。其思想を一一記憶

して居ることは、却て其思想に自己を支配せられるやうな悪結果を來すものである。

あなたは未だそんなに生なまぬ温い態度や思想を持つて、思想したり實行したりしておいでになるのですか。

あなたは未だ、昔から有り來つた思想や感情、また現代の他人が發表した思想や感情を澤山に取り入れて、其れを消化せず、其思想や感情を透して人生と自然を觀ておいてになります。其れは他人の生活の摸倣です。それですから、あなたあなたの生活があなたのお考へになつて居る程新味に満ちたものになつて居ません。直言しますと、まだあなたあなたの全人格を露む出した生活が營まれて居ません。

あなたには未だ自分自身を疑惑し、侮蔑し、さうして眞實に自分を熱愛することの出来るまでに、純全な生地きぢの儘の自己を磨き出さうとする力が足りません。

かう云ふ詰問を、わたしは絶えず世間の何處からか受けて居る氣がしてならぬ。わ

たしは此詰問に對して慄然として恐れ且つ愧ぢて居る。

あなたは未だ「戀愛」に頼り過ぎて居る。思ひ切つて一度孤立の愛目うきめを経験なすつてはどうですか。凜烈たる吹雪の中に素裸でお立ちなさい。ほんとうに我身の可愛いことの解るのは無援の窮地に孤立した時ですから。

また人生のどん底から非常な勢を以て新らしい要求が噴火するものです。謂ゆる窮して後に通じるものです。

新しい要求が断えず噴火する人にして初めて新しい生活が持續されるのです。あなたは一生に幾遍でも新しいノラにおなりなさい。幾遍でも蘇生フエッコクする不死鳥におなりなさい。

かう云ふ忠告をもまた、わたしは断えず世間の何處からか受けて居る氣がする。わたしは此忠告に對して同じく慄然として恐れ且つ愧ぢて居る。

日本人の生活意志は男も女も生温い。殊に女は生温いことを以て貞淑の徳に叶つたものとさへして居る。わたしは過去の日本人に純粹な生地きぢの儘の自己を磨き出すやうな生活を遂行した人を知らない。妥協は日本人の生温い生活意志から案出された生活様式であつて、其れは近代に至つて始まつたものとも思はれない。

誰も日本の問題は、悉く日本人の財力の貧しさに歸着する。併しわたしは日本人の貧乏な原因を更に日本人の生活意志の微弱であつたことに歸して考へる。

家屋を見た丈でも日本人の生活意志の微弱であつたことが領かれる。歐洲人の家屋は自然と戦ひ、若くは自然を征服して居る。石造は古くから歐洲の建築の原則である。日本の家屋は自然と妥協し、若くは自然から蹂躪されて居る。木造は古くから日本の建築の原則である。

わたしは其れが何であらうとも關はない。日本人を刺戟して久しく眠つて居る生活

意志を目覺めさせ、深く、博く、猛烈に生きようとする要求を起させるものならばすべて歓迎したい。

わたしは戦争を出来るだけ避けたい。人間の生活意志を壓抑すること戦争より甚しいものは無いからである。

日本人は政府も國民も何か事があれば外國に對して劍を抜きたがる。其れに反對する者が纔に學者藝術家の中の更に其一部に過ぎないのはなさけない。

戦争ばかりが強くて、何事も戦争のみで解決を附けようとするのは、日本が戦争以外の萬事に向つて弱いと云ふ證明である。(一九一五年五月)

日本婦人の頹廢的體質

新聞で見ると、女子高等師範學校で催された女子體操講習會の席で、高田文相が一般女子の體質に就て其不良を警告せられたと云ふことである。其れは非常に大切な警

告として私も同感を表したい。併し高田氏は其不良な原因として何を挙げられたであらうか。若し體育の不足して居ることを第一の原因とし、其れを以て體操を奨励する理由とせられたのなら私は不満である。

近年の旅行で直接に歐洲諸國の婦人を見て、かねて想像して居たよりも其體質の強健なものに驚かされて以來、私は日本の女の體質の弱弱しさが丁度歐洲の建築と日本の建築との甚だしい差程に目に附いて常に心細く感ぜられる。男子の體質も歐洲の男子に比べたら概して劣つて居るであらうが、女は一層其れが著しく感ぜられる。近頃私は東京の或大病院へ行つて婦人科の待合室を覗いた時、其處に充満いっぱんになつて居る若い婦人達の氣力の衰へた目附と、色艶いろつやの悪い顔と、憂鬱的な姿態との痛痛いたたくしさに思はず伏目にならずには居られなかつた。私は灰色の悲哀に打たれて直ぐに其處を立去つた。それから病院を出て宅まで歸る途中、私と行き違ひに出會ふ婦人達が多くは今しがた病院の待合室で見たと同じやうな表情と顔色と姿とをして居るのに氣が附いて私は慄

然とした。私達の若い姉妹の多數は病人も病人でない女も其體質に大した相異は無いらしく見受けられるのである。

私は以前風にも堪へぬ柳のやうな姿を女の體からだの理想として、浮世繪に現れた徳川期の婦人などを可成美しく思つて居た。併し英佛の婦人が細腰楚楚とした風姿の中に健實な體質を包んで居るのを見て以來、浮世繪の麗人は反對に纖弱な頽廢期の體質を示すものであることを知つて、私は我國で現に美人と稱せられる女の型が浮世繪の麗人を最上級の標準にして居るのを慄らなく思ふやうになつた。

今の多數の若い姉妹が貧弱な體質をして居るのは、さう云ふ美人となりたい爲にわざと頽廢期の美を模倣して居るやうな氣樂な譯からではない。私は其原因として體育の不足をも數へるが、其れよりも更に根本的な重大な原因が二つあると思ふ。

一つは粗食の習慣である。上流にある少數の婦人のことは私に直接の經驗が無いから解らないが、概して中流以下の婦人は男子よりも粗食をして居る。其れには男尊女

卑の思想から由来して居るのと、經濟的事情から由来して居るのとある。父、長男、良人には三四品の副食物を添へるが、母、娘、妻は一品で済ませ、若くは男子の食べ餘した副食物を分け合ふと云つた風の習慣は太抵の家庭に行はれて居る。男は君主、女は臣隸、男は完成の人間、女は未完成の人間と云ふやうな迷信から、男は比較的美食し、女は甘んじて（實は内心で厭厭ながらも）粗食を取つて居るのは馬鹿馬鹿しいことである。又その馬鹿馬鹿しいことに氣が附いて居る家庭でも、家族全體が平等な食事を取るやうにするには貧しい家計が許さない所から、已むを得ず、現在一家の働き者である父や、將來の働き者になつて貰はねばならない男の兒の健康の爲にだけ滋味を供へて、母と女の兒は命さへ繋いで行かれるならよいと云ふ程度の粗食に辛抱して居るのは悲惨である。其上男は外出して贅澤な食事を料理屋其他で取る機會も多いが、反對に女は家の内を守つて居るのが職分になつて居て、さう云ふ機會も少い。——それで女が偶々芝居へても行けば飢ゑたる動物のやうにして幕間に物を食べる。劇場にいる

いろの飲食店が見苦しく設けられて、それが女客で埋まつて居るやうなことは日本を措いて何處にあらう。耻しいことである。——

今一つの重大な原因に制欲的保守道德の壓迫を數へたい。在來の道德は欲望を抑へて其れを靜かに且つ卑屈に固定させ、億兆をして少數の權家の奴隸たらしめて居た道德である。男子も久しく之が爲に自由と獨立と發展とを阻害されて居たが、女は其れが幾倍甚だしく、此道德の壓迫に由つて殆ど個性を殺されて居た。女は何事にも消極的の心掛を持つて控へ目にせねばならなかつた。粗衣、粗食、寡言、柔順、服従、之が女の生活律として決定せられたものであつた。女も時に男の其れに勝る美衣を着けることを許された。其れは一種の賣物として又は貢物みつぎものとして他人の家に嫁せしめられる時か、男子の逸樂の玩具となつて男子の命ずる儘に媚を呈せねばならない時かに限られて居た。女には奴隸としての義務と勞苦とがある許りて人間としての權利が奪はれて居た。其れて男から使役せられる丈で、男の暴横に對し正義を口にして争ふこと

は許されなかつた。かうして久しい時の間に女は鞭の下に慣された曲馬の馬のやうに制欲道徳に慣されて本然の性質を萎縮させてしまつた。此不吉な習慣は今も多数の家庭に染み附いて居る。従つて女自身に獨立、自由、發展の欲望が旺盛でない。まだどの女も男に縋つて寄生して行かれるだけ行きたいと云ふ卑屈と臆病と妥協との氣分に浸つて、其尊貴な個性の本然を眠らせて居る。

粗食と制欲道徳の壓迫、この二つが錯綜して婦人の體質を劣弱にする原因になつて居る。粗食に養はれた體質であるから制欲道徳に反抗するだけの熱烈な生活欲が自發しないとも言へる。制欲道徳に餘り生活欲を殺がれたから粗食に堪へるやうな卑屈な習性が出来たとも言へる。

この重大な二つの原因を考へないで女の體育を奨励する人があるなら皮相の見識である。女自身の内にまだ其だけの覺悟と活力と體質とが準備されて居ないのに、體操其他の體的運動を外から課しても體育として効果の擧る筈がない、却て劣弱な女の

體質を今より一層不良にする位のものであらう。言ひ換れば、先づ女自身に體育を積極的に要求する精神と、體育に堪へるだけの體力とを準備させなければ體育の奨励は無駄であり、若くは有害であらうと想はれる。

福澤諭吉先生は曾て十數年の前に其「新女大學」等の著述に於て、何人よりも先きに口を極めて男女同權を力説せられ、「兩親は其子の哺育に男女の差を設けてはならな」と云ひ、女の子が少しく成長した上は男子と等しく體育を專一にし、怪我をしない限りは荒い事をも許して遊戯させよ」と云ひ、「さて學問の教育に至りては女子も男子も相違あること無し。第一物理學を土臺にして夫れより諸科専門の研究に及ぶべし。…極端を論ずれば兵學の外に女子に限りて無用の學無しと云ふべし」と云ひ、「殊に我輩が日本女子に限りて是非とも其智識を開發せんと欲する所は、社會上の經濟思想と法律思想と此二者にあり。女子に經濟法律とは甚だ異なる如くなれども、其思想の皆無なるこそ女子社會の無力なる原因中の一大原因なれば、何はさて置き、普通の學識

を得たる上は同時に經濟法律の大意を知らしむること最も必要なるべし」と云ひ、「元來兩者（夫婦）の身の有様を云へば、家事經營に内外の別こそあれ、相互に尊卑の階級あるにあらざれば一切萬事對等の心得を以て自ら屈すべからず」と云ひ、「柔順とは言語舉動の柔順にして卑屈の意味にあらず。大節に臨んでは父母の命を拒み、良人の所業を争ふことあるべし……飽迄も議論して之を争ひ、時としては之が爲めに凡俗の耳目を驚かすことあるも憚るに足らざるなり」と云ひ、「女子の身の上に就き、父母たる者が其行末を案じて爲めに安身立命の法を講ずるは親子天然の至情ならずや、即ち女子のために文明教育の太切なる所以なり。たとひ博識の大學者たらざるも、人事の大概に通曉して、先づ自身の何物たるを知り、其男子に對する輕重を測り、男女平等、不輕不重の原則を明かにし、内に深く身權を持重して自尊自重、敢て動搖せざるまでの見識を得せしむるは子を愛する父母の義務なるべし」と云ひ、「兩性の氣品を高尙にして其交際を廣くし、隨つて結婚の契約をも自由自在ならしめんには唯だ社會改良を

待つのみ、否、徒らに其時節到來を待つに非ず、天下有志の善男善女が躬踐實行して實例を示し以て其時節を作らんこと我輩の希望し勸告する所なり」と云つて、日本の女のために、其獨立自尊心の旺盛、其體力の強健、其智力の高大、其意志の熱烈を同時に獎勵し、併せて父母及び社會が婦人に對する偏頗な思想と態度とを一變するやうに忠告されたのは、今更ながら私が絶大の感謝と無限の敬意とを捧げて止まない所である。

福澤先生の此發言のやうでこそ初めて眞の偉大な教育者の警告である。先生は人間自然の欲求の尊嚴を認め、其欲求の發展を計る生活の大體の利害を中樞として思索し且つ警告せられた。此中樞との關係を忘れて部分と枝葉の改革を斷片的に計り氣紛れに發言しようとはされなかつた。高田文相が單に體育のために女子の體育を獎勵せられるので無いことを私は望んで置く。

下田次郎氏が女子の高等教育を世界の一大勢だと云つて奨励せられた一文の中に、一等國の日本は眞物の女子大學生を唯だ二人しか持たない國である。完全に男の大學生と同じ試験を受けて東北の理科大学に入學し、數學科を修めて來る七月に理學士となつて卒業する牧田らく子、黒田ちか子兩氏が其二人であるといふ意味のことを雑誌「女王」の上で述べられたが、日本の女學生に體操其他の體育を課して以來三十年以上になりながら、其れが體育として女學生の身長を高めた位の物質的効果が少しくあつた丈で、三十年後の今日に猶二人しか無い女子大學生を珍重がらねばならぬ程、精神的に優秀な女を出すだけの強健な體質を養成して居ないのを見ると、在來の女子の體育が枝葉の教育であつて、福澤先生の警告されたやうな人間生活の中樞と聯絡の取れた教育で無かつたことが明白である。

一體今の中等程度の學校で實際の體育を受持つて居る體操教師には、極めて少數の特例を除いて、品性の陶冶の未熟な儘に固定して物質的、利己的、若くは器械的に安

んじて居る人達が多いやうに想はれる。中學生を教へる體操教師には「武士道」と現代の體育的精神とを漫然同視して、二言目には「乃木將軍のやうに壯烈であれ」と云ふやうな定り文句を云つて私達の子供を叱咤する先生などがある。さう云ふ先生は「武士道」と私達の子供の將來の生活と根本にどう云ふ融通があるか、錯誤があるか、そんな事には全く無知、無反省、無批判なのである。

また女學校で體操を受持つて居る女教師には體操を頻りに「優美」な情操と結び附けようとして、見た目の美しい姿勢を八釜しく言つたりする先生がある。さうして其先生自身の平生の姿勢は其れと反對であつたりする。其先生が體操の時間に示される「優美」は先生自身の個性の表現では無くて體操術のための「優美」に過ぎない。「優美」と云ふ情操が現代の女の生活とどう云ふ關係を持つか。昔の優美と今のと内容が同じか、どうか。其れが以前の女に必要であつたやうに今の女にも必要か、どうか、と云ふやうな事には全く無頓着なのである。さう云ふ教師に教へられた體育は生活の

大體の利害と關係する程精神的に暗示を與へられて居無いから、或は學校に居る間だけは多少の斷片的效果があつても、卒業して仕舞へば其れ切りで絶縁し、中學で體育部の選手であつた男子が大學へ行つて病身になつたりなどする。其點は嘉納先生の塾の柔道などは幾分精神的に後後まで効果があるやうに教へてあるらしい。

女學校の體育がさう云ふ意味で役に立たない證據は、多數の女學校卒業生が人の妻となつた後の體的活動——心的活動は勿論——が依然として無教育な女と同じやうに不活潑なのと、女學生時代よりも妻になつて後の方が概して體力が弱くなつて居るとして明かである。

併し今日の若い妻の體質が概して不良であるのは女學校の體育の爲でなくて、前に述べた二つの原因からであることを忘れてはならない。舅姑と別居して居る若夫婦の家庭では在來の嫁が想像も及ばない程度に物質的自由を享けて居る妻もあるが、——單に物質的自由である。まだ精神的自由に達して居る妻は寡い。——さうで無い

多數の若い妻は姑や小姑や其嫁入先の家風やらに遠慮し、若くは壓迫されて、粗食、睡眠不足、精神過勞等のために瘦せたり病身になつたりせず居られない境遇に置かれて居る。

其れに今一つ表面に出ない理由がある。既婚婦人の四割は良人の不品行から由來した病毒に感染して居ると云ふことである。其れが若い妻の體質をどんなに破壊し、どんなに苦しませ、其性情をどんなに悲觀的に滅入らせて居るか知れないと想ふ。

かう云ふ女學校卒業後の婦人や、女學校を経ない大多數の若い婦人やの體質の不良を防ぎ若くは救ふにはどうすればよいか。其れは最早學校の體育などの力の及ぶ範圍でない。もつと根本の原因に溯つて其れを整調する實際の工夫を私は識者に問ふ。

(一九一六年三月)

安價生活よりも高價生活

私は既に我我第三階級の市民が小賣商の窠から逃れねばならぬことを述べた。それ

に對していろいろの人達から同感の意味の手紙を寄せられたことを私は感謝する。中にも大阪天王寺中學の校長鈴木氏は私の意見と似て而も一層周到な意見を私より一ヶ月前に發表せられて居る雑誌「救済研究」を贈られた。氏の意見は主として先づ市營の米庫を設けて白米の小賣から着手しようと言はれるのであるが、今日のやうに市公吏の多數が腐敗し、市に安定な財力の餘裕が無い時に氏の意見の實行はむづかしい。官設の質屋や酒場が立派に建つて居ると云ふやうなことは巴里やミュンヘン市のやうに官公吏が眞に公僕の誠意を持つて居る土地にして初めて出来ることである。私は白米に限らず、家庭のあらゆる第一必需品を出来るだけ同じ場所で實費以上の利益無しに鬻ぐ大雜貨店及び其分店の開かれることを望む者ですが、それを實行する方法としては、都下に勢力ある二三の大新聞社が主唱者となり、愛國婦人會、基督教婦人矯風會、大日本婦人衛生會、其他あらゆる上流婦人の團體を勧誘して、眞實の意味の公益事業が其等貴婦人の力て經營されるやうに協議して頂くのが一法かと私は考へる。

私達を誅求するものは小賣商に止まらない。電燈、瓦斯の如きも需要者が倍加して却て其料金が昂つて居る。其計量器なども東京の米屋の榭目と同じく随分不安心なものである。

近頃安價生活などを唱へられる人達の意見が唯だ需要者の方に廉價な物を買ふことを勧められるだけで、其供給者の方の不法な掠奪的暴利を少しも商量せられないのは不親切である。供給者を現在の儘にして置いて私達だけが廉價物を買はうとすれば實は眞に廉價物で無くて、彼等小賣商の店の屑物を不當な高價で買はされて居る結果になるのである。一圓の物を止して廿錢の物を買つたからと云つて同じ小賣商の店から買つたのでは何の得にもならない。廿錢の呼び聲は一圓に比べて低いけれども、其物が原價五錢位の粗製品を廿錢に賣られたのでは矢張非常な損をして居るのである。粗悪な品を廉いと喜び、儉約儉約と云つて心を小さくし肉體を營養不良にしながら小賣商の弊に掛つて居る安價生活は賛成し難い。

通俗な名を附けられたのであらうが、私には安價生活と云ふ言葉も面白くない。私達は生活の聰明な打算から成るべく無駄な勢力を節約して多大な而も純粹な効果を收めようとする。金銭は私達に取つて私達の勢力の兌換券である。私達は自分の汗水と腦漿とを搾つて得た兌換券を貪欲な小賣商の餌食にしたくない、また自ら浪費したくもない。成るべく節約して遣つて、能ふだけ價値の高い、立派な、純粹な物を買ひたい。決して粗悪な物、間に合せ物なんかを買はされる爲に使用したくない。之で見ると、私達の生活の方針は無駄の無い洗練された勢力で出来るだけ正しい高價な生活を遂げようとするのである。安價生活と云ふ言葉の表示する意味は私達の心持と反對に、制欲道徳を聯想させて、人間の向上發展を沮喪させる嫌ひがある。(一九一六年三月)

小學教育の本末關係

私が小學の手工無用を雜誌で述べたのに對して「手工研究」の一記者が門外者の妄

論だと反駁せられたのは私を首肯させない。教育は母としての私に取つて眞剣な私自身の問題否事實である。學校關係者のみの専有と解して門外者と私と呼ばれたことは私の心得て居る教育とは相異して居る。部分を偏重すると其部分に囚はれて全體の關係と中樞の威嚴とを忘れてしまふ。それが目に見える程著しい害悪でない限り、部分にも相應に存在の理由を主張し得られる。併し全體の利害の上から廣く深く考へるなら、中樞と中樞に近い部分とを重んじて他の部分を節約するのが生活力の經濟法である。私が手工を無用とし、習字、圖畫、體操等の採點を數學、國語、物理等重要な學課の採點比例から區別して欲しいと述べたのは此意味からである。記者は手工の無用を唱へる者が私一人であるやうに云はれたけれども、東京市で淺草區會のやうに手工反對を鮮明に議決して手工の爲に一錢の支出をも拒んで居る事實のあることを反省して頂きたい。猶私は手工を課さない小學に私の子供等を學ばせて居る。之が爲に私の子供等の個性開發に損をさせて居るとは思はない。併し猶正しい御示教を記者

人及び女として
及び識者に求める。(一九一六年三月)

三三四



人及び女として (完)

大正五年四月二十五日印刷
大正五年四月二十八日發行

著者 與謝野品子
出版者 東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地 中村一六
印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地 天弦堂書屋
振替口座東京二九五五九

版權所有

定價一圓

東京三陽印刷株式會社印刷

終

